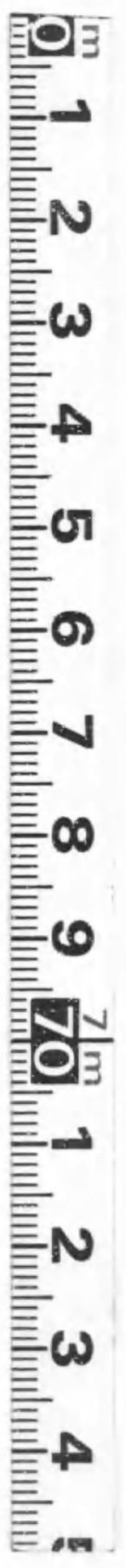


375  
42



始



特218  
181



經 經 經

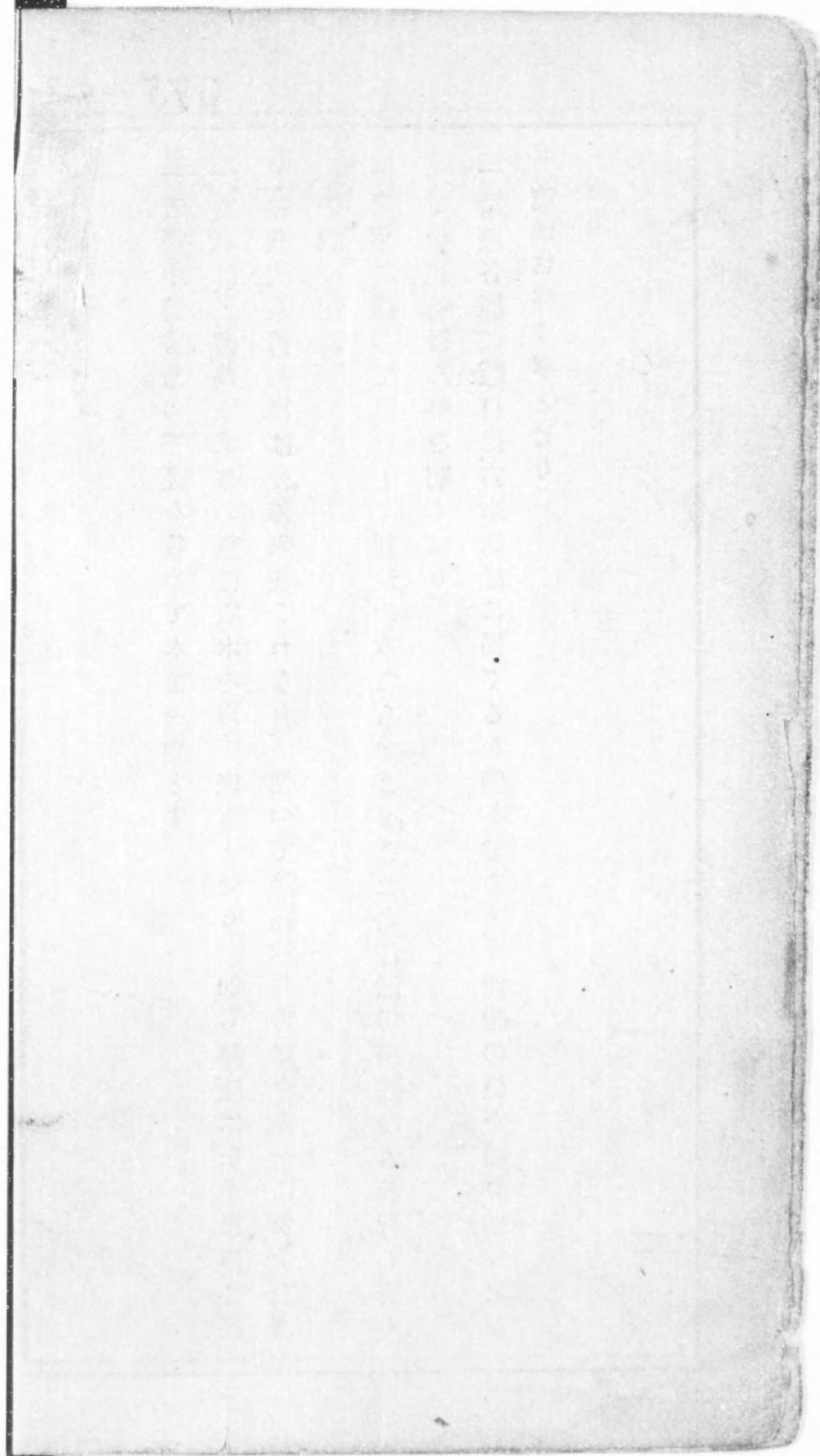
全 全 全



例言

- 一五經中詩書易の三經を收めて本書一卷とす。
- 一本文は、三書共に流布の新注版本を以て底本とせり。即ち詩經は朱子集傳、書經は蔡沈集傳、易經は程傳朱義これなり。従つて詩經章句の如き亦一に朱子集傳の説に従ふ。
- 一訓解に關しては、ひとり新注のみならず、まゝまた古注派の所説をも參看し、努めて中正を得ん事を期したり。
- 一詩經各篇の題目は、古來篇尾に掲ぐるを例とせるも、今通讀の便を圖り、姑く之を篇頭に移す事とせり。

欠



欠

機之始。則脩身及家。平均天下之道。其亦不待他求而得之於此矣。問者唯唯而退。余時方輯詩傳。因悉次是語。以冠其篇云。淳熙四年丁酉冬十月戊子新安朱熹書。

目次

詩經

國風一

一一七六

周南一之一

一一七六

關雎

葛覃

卷耳

樛木

采芣

桃夭

兔置

采芣

漢廣

汝墳

麟之趾

召南一之二

一一七六

鵲巢

采芣

草蟲

采芣

甘棠

行露

羔羊

殷其雷

標有梅

小星

江有汜

野有死麇

何彼穠矣

騶虞

邶一之三

一一七六

柏舟

綠衣

燕燕

日月

終風

擊鼓

凱風

雄雉

匏有苦葉

谷風

式微

旄丘

簡兮

泉水

北門

北風

靜女

新臺

二子乘舟

鄘一之四

一一七六

柏舟

將有茨

君子偕老

桑中

鶉之奔奔

載馳

定之方中

蟋蟀

相鼠

干旄

衛一之五

一一七六

淇奥

考槃

碩人

碩

竹竿

芄蘭

河廣

伯兮

有狐

木瓜

王一之六

一一七六

黍離

君子于役

君子陽陽

揚之水

中

谷

兔爰

葛藟

采芣

大車

丘中有

麻

鄭一之七

一一七六

緇衣

將仲子

叔子田

大叔于田

清人

羔裘

遵大路

女曰鷄鳴

有女同車

山

有扶蘇

攬兮

狡童

褰裳

丰

東門

之罍

風雨

子衿

揚之水

出其東門

野有蔓艸

深洧

齊一之八

鷄鳴 還 著 東方之日 東方未明 一〇六

南山 甫田 盧令 敝笱 載驅 猗嗟 一〇七

魏一之九

葛屨 汾沮洳 園有桃 陟岵 十畝之間 一〇七

伐檀 碩鼠 一〇八

唐一之十

蟋蟀 山有樞 揚之水 椒聊 綢繆 一〇九

杖杜 采芣 鷦羽 無衣 有杕之杜 一一〇

葛生 采芣 一一〇

秦一之十一

東鄰 無衣 渭陽 權輿 終南 黃鳥 一一一

晨楓 無衣 一一一

陳一之十二

宛丘 東門之枌 衡門 東門之池 東門 一一二

之楊 慕門 防有鵠巢 月出 株林 一一三

檜一之十三

羔裘 素冠 隔有 萋楚 匪風 一一六

曹一之十四

蟋蟀 候人 鳴鳩 下泉 一一七

邶一之十五

七月 鷓鴣 東山 破斧 伐柯 九罭 一一八

小雅二

鹿鳴之什二之一 一一九—一二四

鹿鳴之什二之一

采芣 出車 秋杜 采芣 采芣 一一九

白華之什二之二

白華 華黍 魚麗 由庚 南有嘉魚 一一九

形弓之什二之三

形弓 菁菁者莪 六月 采芣 車攻 吉 一一九

大雅三

文王之什三之一 一二五—一二九

文王之什三之一

文王 大明 緜 棫樸 旱麓 思齊 一二五

生民之什三之二

生民 行葦 既醉 鳧鷖 假樂 公劉 一二六

蕩之什三之三

蕩 抑 桑柔 雲漢 崧高 烝民 一二七

頌四

周頌清廟之什四之一 一二八—一四九

周頌清廟之什四之一

清廟 維天之命 維清 烈文 天作 一二八

昊天有成命

昊天有成命 我將 時邁 執競 思文 一二九

周頌臣工之什四之二

臣工 噳嘻 振鷺 豐年 有瞽 潛 一三〇

日 鴻雁 庭燎 沔水 鶴鳴

祈父之什二之四

祈父 白駒 黃鳥 我行其野 斯干 一二九

無羊

無羊 節南山 正月 十月之交 雨無正 一二九

小旻之什二之五

小旻 小宛 小弁 巧言 何人斯 巷 一三〇

伯

伯 谷風 蕤蕤 大東 四月 一三〇

北山之什二之六

北山 無將大車 小明 鼓鐘 楚茨 一三一

信南山

信南山 甫田 大田 瞻彼洛矣 裳裳者華 一三一

桑扈之什二之七

桑扈 鸛鳴 類奔 車擊 青蠅 賓之 一三二

初筵

初筵 魚藻 采芣 角弓 菀柳 一三二

都人士之什二之八

都人士 采芣 黍苗 臨桑 白華 縣 一三三

蠻 瓠葉 漸漸之石 苕之華 何草不黃

載見 有客 武	四八
周頌閔予小子之什四之三	四八
閔予小子 訪落 敬之 小憲 載芟	四八
良耜 緜衣 酌 桓 賚 般	四八
魯頌四之四	四六
關 有駟 泮水 闕宮	四六
商頌之什四之五	四九
那 烈祖 玄鳥 長發 殷武	四九
書經	
堯典	四五—四九三
舜典	四五
大禹謨	四六〇
皋陶謨	四七一
益 稷	四八〇

夏書	四九四—五二三
禹 貢	四九四
甘 誓	五〇六
五子之歌	五〇七
胤 征	五二一
商書	五二四—五六五
湯 誓	五二四
仲虺之誥	五二六
湯 誥	五三〇
伊 訓	五三三
太甲上	五三七
太甲中	五三〇
太甲下	五三二
咸有一德	五三四
盤庚上	五三七
盤庚中	五四四
盤庚下	五四九

說命上	五一
說命中	五四
說命下	五七
高宗彤日	五八〇
西伯戡黎	五八一
微子	五八三
周書	五八六—七三三
泰誓上	五八六
泰誓中	五八九
泰誓下	五九二
牧 誓	五九五
武 成	五七八
今考定武成	五八二
洪 範	五八五
旅 獒	五九七
金 縢	五九九
大 誥	六〇四

微子之命	六一
康 誥	六二
酒 誥	六三
梓 材	六三
召 誥	六三
洛 誥	六四〇
多 士	六四九
無 逸	六五四
君 奭	六六〇
蔡仲之命	六六八
多 方	六七一
立 政	六七九
周 官	六八七
君 陳	六九二
顧 命	六九六
康王之誥	七〇二
畢 命	七〇五
君 牙	七二〇



問命	七三
呂刑	七五
文侯之命	七五
費誓	七八
秦誓	七〇

易經

上經	七七						
乾	坤	屯	蒙	需	訟	師	比
小畜	履	泰	否	同人	大有	謙	
豫	隨	蠱	臨	觀	噬嗑	賁	
剝	復	無妄	大畜	頤	大過		
習坎	離						
下經	七六八						
咸	恆	遯	大壯	晉	明夷	家人	
睽	蹇	解	損	益	夬	姤	萃
升	困	井	革	鼎	震	艮	漸

歸妹	豐	旅	巽	兌	渙	節
中孚	小過	既濟	未濟			
上象傳	八〇三					
下象傳	八一八					
上象傳	八三四					
下象傳	八五五					
擊辭上傳	八七七					
擊辭下傳	八九五					
文言傳	九二三					
說卦傳	九二一					
序卦傳	九三〇					
雜卦傳	九三七					

——(目次終)——

經詩解題

第一 詩經の名稱

本書は元來詩といへる一字の名にして、孟子左傳等に詩曰といひ、論語に詩三百、一言以て之を蔽ふといへるが如きものは是なり。詩の字は固より普通名詞なれども、周代頃には専らこの書を指すこととなりしは、書經の書と同様なることなり。漢代に至りて詩學の系統上、魯の申培の傳へしものを魯詩といひ、齊の轅固、后蒼の傳へしものを齊詩といひ、燕の韓嬰の傳へしものを韓詩といひ、毛亨、毛萇の傳へしものを毛詩といへり。その詩經と稱することも漢代より既にありしことなれども、廣く行はるゝに至らざりしが、宋の頃より詩經講義、詩經訓注などの著書の出るあり、元明以後に至りて詩經の名益々行はるゝこととなり。朱子の集傳は、詩集傳と稱せしものなりしが、其の説の毛傳に従はざるより、後世の本には他の

傳派の本と區別して、詩經集傳又は詩經集注など、書せり。是より大抵毛傳（毛傳朱）ふものは毛詩と稱し、朱傳に従ふものは詩經と稱することゝなれり。ことは後に述べべし。要するに經とは其の言の常經常法にして典則となすべきり、之を尙びて後世より加へたる詞なり。而して詩經の名は既に漢代より存するものにて、その典據あるのみならず、詩經を讀むに必ずしも毛傳に據らざるものは、毛詩といはずして詩經の名を用ふること最も適當なる名稱なりといふべし。

### 第二 詩經の編輯

詩經は從來古詩三千餘篇ありしものに就き、孔子之を刪定して三百五篇となしたる書なりとは、史記漢書以來の説なりしが、後世種々の點より之を疑ふもの尠からず。その主なる理由は、殷周時代の詩の詩經に載録せられざる所謂逸詩と稱するもの甚だ少なきより見れば、古代に於て三千餘篇の多きものありしには非ざる

べく、又孔子が論語禮記等に於て詩三百といひたるは、孔子以前にありて大概三百篇となりて傳はりしことをいへるなるべしといふにあり。これ等の説を見る時は、孔子が詩經を刪定せりといふことは遽に信ずること能はざるなり。

然らば詩經は何人の編輯せしものなりやといふに、周代には朝廷に采詩の官といへるものありて地方を巡回し、各地方に行はるゝ詩を採集し、以て民俗の良否、政治の得失を知るの材料に供することあり。而して采詩の官はその採集したる詩を大師に獻すれば、大師は更に之を音律に協へて天子に奏聞す、これ即ち詩經中の國風なり。又朝廷に仕ふる公卿大夫より列士に至るまでの者、その作りし所の詩を朝廷に獻することあり、これ亦大師の掌る所にして即ち詩經中の雅なり。又朝廷に於て祭祀の時音樂に用ふる爲めに作りし詩あり、これ即ち詩經中の頌なり。すべてこれ等の詩を音樂に用ひ、且大學に於て詩を教ふるものは、皆大師の掌る所なれば、大師と詩とは種々の點に於て極めて密接なる關係あるものなり。されば

孔子以前に於て大凡三百篇計りの詩を輯めたるは、必ず周室に於ける大師の官にあるものゝ手に出でしなるべし。たゞその大師の名は何といへるか、今之を明確に言ふこと能はざるは勿論なり。

とにかく今の詩經の原本は、右の如き事情によりて編輯せられたるものとせば、詩經と孔子とは何等の關係なきかといふに、必ずしも然らざるに似たり。元來周代の大學及び孔子の教科として子弟を教育せしものは詩書禮樂なれば、論語中にも詩經に言及せしこと十七ヶ所の多きに至れり。而して子罕篇に吾衛より魯に歸りて然る後に樂正しく、雅頌各其所を得たりとあるは、孔子が列國を遊歴し、晩年に魯に歸りし後、當時音樂の亂れたるを正ししことをいへるなり。されども既に音樂の亂れたるを正して雅頌各其所を得たりといへば、詩の亂れたるを正ししことも其の中に包含せらるゝことは明かなり。思ふに孔子時代には、詩經にも往々錯亂せることなきに非ざれば、孔子が之に就て多少の整理を加ふることは、譬へば今日自己の使用せる教科書に不都合の點あれば、之に幾分の修正を加ふると同じくして、固より有り得べきことなり。後世の人此の如きことを傳聞して稍これを誇張し、三千餘篇を刪りて三百篇となししといへるなるべし。

### 第三 詩經の内容

詩經に載録せし詩は凡そ三百五篇あり。尤も三百十一篇といへることもあれども、六篇は題のみにて詩なければ、その實数は三百五篇なり。論語禮記又は墨子等に三百篇とあるは、その概數をいへるのみ。この三百五篇の詩は之を風雅頌の三種に區別せり。なほ之を細分すれば、風は周南、召南、邶、鄘、衛、齊、魏、唐、陳、秦、檜、曹、豳に分ち之を十五國風といふ。されども周、召、邶、鄘、衛、齊、魏、唐、陳、秦、檜、曹、豳と同じく、衛、魏、唐は同じく晉なれば、周を除きたる他の列國の詩は僅に八國より取りたるに過ぎず。魯と宋とは之を頌中に收めたるも、滕、薛、杞、宋の如き小國の詩は、

一も採録せられざるなり。雅は之を小雅大雅に分つ。小雅と大雅との異なる所は規模體制の大小にあり。詞旨正大、氣象開闊なるは雅の體なり、優柔委曲、意言外にあるものは風の體なり。純然たる雅の體を用ふるものを大雅とし、風の體を雜へ用ふるものを小雅とす、これその大小の別なり。頌は周頌魯頌商頌に分つ。頌は祖宗の徳の形容を美めて其の成功を以て神明に告ぐるものにて、周頌はその正體なり。魯頌は魯國の詩、商頌は宋の詩なり。魯宋二國の詩を國風に列せずして、之を周頌の次に置きしは、魯は周公の後、宋は殷の後なるが故に、之を特別に扱ひたるなり。商頌は古來殷代の詩となすものと、周代に於ける宋は殷の後にて商ともいひたれば宋の詩なりとなすものとの兩説ありて、普通は多く前説に従ひたれども、余は後説を以て正當なるものとす。されども解釋に至りてはその孰れに従ふも大差なし。

三百篇に於ける作者の時代は、勿論明確に知り難きもの多けれども、上は殷の末

より下は周代春秋の中葉、陳の靈公の時)に至りしものにて、凡そ六七百年間に亘りしものなれども、その大部分は周代に成りしものなり。又その土地よりいへば、西は秦(陝西)東は齊(山東)南は陳(河南)北は唐(山西)にして、大概黃河流域の地方に過ぎず。されば詩經の詩は皆北方支那の産物にして、其の後戰國時代に於て南方楚の地方より出でたる屈原の離騷などは、全くその土地その系統を異にするものなり。兎に角この上下六七百年、東西一千餘哩に亘れる時代と土地とに於て發生せるものにして、支那上代文化の精粹なり。而して後世に於ける詩の形式及び法則の如きは、大抵この中に備らざるものなし。詩經と我が國の萬葉集とは、實に東洋に於ける最古の二大詩篇にして、よく比喩法、重疊法、對聯法を用ひ、その言ひ方は或は異なることありと雖も、至純至粹なる感情を吐露したることは則ち一なり。

#### 第四 詩經解釋家の二派

詩經の内容は上文に述べたるが如く、今より二千數百年乃至三千年以前の作なれば、その言語その文字、往々今日と同じからず、殊に詩は言語文字の外にその意を求めざるべからざることとあれば、古人の解釋に據らざるを得ず。然るに詩經の解釋家に古來二派あり。一は秦漢頃に出でし詩序によりて解釋するもの、即ち毛亨・毛萇の傳、及び後漢鄭玄の箋、所謂毛傳鄭箋の流是なり、之を古注派といふ。一は序に拘らずして専ら文に依りてその義を求むるもの、即ち朱子集傳の流是なり、之を新注派といふ。其他、古注新注を折中するものあり、齊詩魯詩韓詩を取るものあり、又古注派新注派の中にも多少異同あれども、之を概言すれば、まづ古注新注の二派となすことを得べし。今本編の主として新注に據れるは、その明白にして了解し易きを取れるなり。

### 第五 詩の六義

詩に六義といへることあり、風雅頌賦比興是なり。風雅頌は詩の性質上より分類せしものにて、之を詩の三緯といふ。三經と三緯とは、その性質同じからずして並び稱すべきものに非ず。されども古人は必ずしも精密なる分類法によらずして、之を概言すること往々之あり、なほ文字の構造法と使用法とは、稍その性質を異にすれども、之を合せて六書といへるが如し。風雅頌のことは既に上文に述べたれども、その名稱の意義を略説すれば、風は民俗歌謠の詩にして、その上の化を被りて言ふことありて、その言又人を感ずるに足ること、物の風の動くによりて聲ありて、その聲又物を動かすが如きをいふなり。雅は正なり、格律の嚴正規模の雄大なるの意なり、頌は容なり、盛徳の形容を述ぶるの義なり。

### 第六 詩の形式

詩經の詩の形式は一樣ならず。その詩の最も短きは、周頌維清の一章五句十八字にして、その最も長きは、魯頌閟宮の九章百二十五句四百九十二字なり。一句の字數の最も少きは二字にして、小雅に祈父といひ、周頌維清に肇禋といへるもの是なり。最も多きは八字にして、豳風七月に十月蟋蟀入我牀下といひ、小雅十月之交に我不敢傲我友自逸といへるもの是なり。その他、三字四字五字六字七字皆有らざる所なしと雖も、尤も多數に用ひられたるは四字句なり。

押韻の法は種々あれども、その最も多きは毎句に韻を押すものと、隔句に韻を押すものとの二種なり。毎句に韻を押すは、周南卷耳に陟彼高岡。我馬玄黃。我姑酌彼兕觥。惟以不永傷とあるの類是なり。隔句に韻を押すは、召南采芣に于以采芣。于以于以。公侯之事とあるの類是なり。又隔句韻を交互して押すこと、周南行露の誰謂鼠無牙。何以穿我墉。誰謂女無家。何以速我訟とあるが如きものあり。其他種々のものあれども、大抵語尾に助字を用ふる時は、助字の上にある文字を以て韻

となすこと、召南標有梅に標有梅。其實七兮。求我庶士。迨其吉兮とあるが如きを通例とす。要するに音韻には古今の變遷あり、且支那に於ける音韻の法則は、南北朝以後に定まりたるものなれば、勿論後世の二百六韻、百七韻等の法則を以て詩經の韻法を律すること能はず。是を以て詩經の詩の押韻には、或は明瞭ならざるものもなきに非ざれども、大體に於てはその法則を知ることを得べし。これ蓋し詩は自然の天籁なるが故に、その聲調を合せて吟詠諷唱に適せしむるときは、その法則の古今一致することは固より當然なることなり。

且それ詩經の材料は極めて豊富にして、上は日月星辰より殷雷震電に至り、下は山川陵谷より草木鳥獸蟲魚に至り、而して凡そ人類の衣食住に關する百般の物殆ど備らざる所なく、人倫の關係、民族の行動に於てその委曲を盡せり。況やその修辭上に於て、譬喻法を以て感情の表彰を強からしめ、重疊法、對聯法を以て格調の威嚴を具へしめ、句法の齊整、押韻の協調を以て十分に律語の本旨を發揮せしは、眞に

後世詩法の典範となすべきなり。

### 第七 詩の本旨及び應用

古來詩の字を解して志の之く所なりといへるが如く、詩は人の性情を其儘に發露し、凡そ喜怒哀樂、憂悲愉快、怨恨思慕みな之を詞に表はして音響節奏あるものなれば、之を以て種々の用に供すべし。まづ詩を讀むに、その詩を作りたるものは如何なる思想が發してこの詞となりたるかを知ることが、その第一緊要なること言ふ迄もなし。さてその思想が如何なるものなるかを知りたる上は、之を如何に應用すべきかは、詩經を讀むものゝ知らざるべからざることなり。先づ周代にて詩を應用することを論ぜしものを見るに、禮記經解に溫柔敦厚は詩の教なりといひ、論語爲政に詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く思ひ邪なしといへるが如きは、詩を以てその性情を養ひ、修身道德の資となすべきことをいへるなり。論語子路篇に詩三

百を誦すれども之に授くるに政を以てして達せず、四方に使して専ら對ふこと能はずんば、多しと雖も亦奚を以て爲んといひ、禮記王制に天子五年に一たび巡守し、大師に命じ詩を陳せしめて以て民風を觀るといへるは、人情風俗の得失を知りて政治の資となすべきことをいへるなり。晉の趙衰が詩書は義の府なりといひ、左傳孟子荀子禮記等の諸書に詩を引用してその議論の證據となし、こと甚だ多きは、道德政治に論なく、總べて學問上の準則を詩に取りしなり。春秋時代に於て列國の卿大夫が聘問燕饗の際に當りて、主客互に詩を賦してその志を表せしは、實際上の要具となし、なり。祭祀の時に於て詩を歌ひ樂を爲すは、鬼神を慰むるの用に供せしなり。論語陽貨に多く鳥獸草木の名を識るといへるは、當時は未だ博物學科の設けあらざれば、詩を以て之を補ひしなり。右の如く周代にては詩の應用せらるゝ場合極めて多ければ、苟も中流以上に於て社會に活動するものは、詩を知らざれば殆ど何事をも爲すこと能はざるなり。これ以て當時詩教の盛なりし

所以を察すべし。

秦漢以後に至りては、時勢の變遷と共にその應用の方法も同じからざりしが、漢代には詩經、書經、易經等、皆それらの専門學といふものありて、詩經の専門學者なれば常に詩經の旨趣を應用することを怠らざりき。例へば前漢の王式の如きは、詩を以て昌邑王の師たりしが、王の位に即きし後淫亂を以て廢せらるゝや、昌邑の羣臣皆誅せらる。時に使者式を責問して曰く、師何を以て王を諫むるの書なきや、式曰く、臣三百五篇を以て王に授く、忠臣孝子の篇に至りては未だ嘗て王の爲めに反復之を誦せずんばならず、危亡道を失ふの君に至りては未だ嘗て流涕して王の爲めに深く之を陳せずんばならず、臣三百五篇を以て諫む、是を以て諫書なしと、式は是に因て罪を赦さる。これ以て詩經の世教に補あるを見るべし。其他詩經の詩に四字、五字、六字、七字等の句を用ひたるは、後世普通に行はるゝ碑銘、樂府、律、絶句の範を示しゝが如き、修辭上に於て反復法、漸層法等、種々の用例を開きしが如き、そ

の文學上に及ぼしゝ影響は極めて大なりといふべし。

されば今日詩經を讀むものは如何なる應用を爲すべきかといふに、古今既に同じからず、彼我亦國情を異にすれば、固より以上述べたることゝ同一なる能はず。されども今日より見れば、詩經は支那古代の一大文學として研鑽すべきものたることは言ふ迄もなく、漢民族思想の傾向變遷を見、政教風俗の良否得失を察し、古代の文明を尋釋するに於ては無上の好材料なり。況や道德政治上に於ける格言として千歲磨滅すべからざるもの尠からざれば、資りて以て教育上の模範となすことも、亦決して缺くべからざるなり。これ豈支那文學研究の寶庫となすべきものにあらずや。

文學博士 林 泰 輔



## 書經解題

## 第一 書經の名稱

書經には古來三つの名稱あり、書といひ、尙書といひ、書經といふ。周代にては單に書といひ、漢代に至りて尙書及び書經の名見え、明代以後に及びて、書經の名稱多く用ひらる。その書といへるは、古代君臣の言行政事を記録したる文書なるが故に名づけたること明かなれども、之を尙書といへるに就ては、種々の説あり。されども尙書とは漢初に於て書經を傳へたる伏生（名は勝）の名づけしものゝ如くなれば、尙を上古とし、上古の書と解すること、尤も穩當なるべし。書經に收めたるものは唐虞以來の書なるを以てなり。

その書經といへるは、記録する所、皆道德政治の法則となるものなるが故に、後世之を尊びて經の字を加へしことは、他の詩經易經と同一なり。前述の如く、尙書の

名は頗る古きものにて、從來之を用ふるもの尠からず。書經といへることは、古代に於ては甚だ行はれざれども、近代に至りては、殆ど普通の如くなるに至れり。これ決して不當なる名稱に非ざるが故に、今之に従ふ。

## 第二 書經の編輯及び作者

書經は孔子の編輯せしものにて、上は唐虞より下は秦穆公に至るまで、凡そ百篇の書を選択せしものなりとは、史記漢書等の説なり。尙書旋璣鈴には更に之を詳にして、孔子書を求めて、黃帝の玄孫帝魁の書より秦穆公に至るまで、凡そ三千二百四十篇を得て、其中より世法となすべきもの百二十篇を取り、百二篇を以て尙書とし、十八篇を尙書中候となすといへり。これ亦詩經三百篇の三千餘篇より取りしといへると同じく、頗る誇張の言なれども、とにかく古代に於て若干の古文書中より百篇を選択して一部の書となし、ことはありしなるべし。然らばその編輯

者は何人なるか、史記漢書以來の説に従つて孔子となすものあり、或は之を疑ふものあり。されども之を疑ふものも、亦舊説を打破すべき程の十分なる根據あるにあらず。されば東周時代に於て、上代帝王の遺書數百篇の存在するものに就て、之を考訂整理して凡そ百篇となし、ことは堯舜を祖述し文武を憲章し、詩書禮樂を以て門弟子を教養せる孔子の事業としては、有り得べきことなるべし。其の百篇の書といへるは、虞夏書二十篇、商書四十篇、周書四十篇なりといふ。

書經の編輯は右の如しとするも、その各篇の作者は皆同一ならず。その何人なるかは固より明瞭ならざれども、朝廷史官の記録せしものなることは疑なし。その記録せる時代は、商書は商代、周書は周代なること勿論なるが、たゞ虞夏書は舊説にては虞夏時代史官の作となしたれども、それ程古きものには非ざるべく、堯典、皋陶謨等の冒頭に曰若稽古といへる文字あるより見るも、後世より追記せしことは明かなり。されども周末若しくは漢代などに成りしものに非ざることとは、復た多

言を俟たざるなり。

### 第三 今文尙書と古文尙書

孔子が前代帝王の遺書を考訂整理して百篇となし、も、その書傳來の歴史には、種々の錯雜せることありて、今文尙書と古文尙書との別を生ずるに至れり。秦の始皇の書を焚き儒を坑にするに當りてや、難を四方に避け、書を屋壁に藏する者もある程にて、一時學問の衰頽を來せり。然るに漢興るに及びて、文運の隆興を圖り、孝文帝の時能く尙書を治めし者を求め、濟南の伏生を召す。時に伏生年九十餘にして、徵に應ずること能はず、因つて晁錯をして往て學ばしむ。伏生乃ちその屋壁に藏せしものを出して之を教へしも、兵亂の際、既に數十篇を失ひ、その存するものは二十九篇に過ぎず。其の篇目は左の如し。

堯典、皋陶謨、禹貢、甘誓、湯誓、盤庚、高宗彤日、西伯戡黎、微子、牧誓、洪範、大誥、金縢、康誥、酒

詰梓材、召誥、雋誥、多士、無佚、君奭、多方、立政、顧命、康王之誥、冢誓、甫刑、文侯之命、秦誓、顧命、康王之誥を合すれば二十八篇となる。

その書は皆古文、次の古文尙書の古文と同じにて録せしものなるが故に、伏生は之を當時一般に通行せる隸書體即ち今文に書き改めたり、之を今文尙書といふ。この伏生より出でたる學系は、張生、夏侯都尉の傳へたるものは、後に分れて大夏侯學、小夏侯學となり、歐陽生、兒寬の傳へたるものは、歐陽氏學となりて、漢代には皆學官に立てられたり。

古文尙書は孔子の故宅より出でたるものなり。漢の武帝の時、魯の恭王孔子の故宅を壞ちて宮を廣めんとし、壁中より尙書論語孝經等數十篇の書を得たり。何れも皆科斗の文字、科斗は「オタマジャクシ」なり、其の文字の頭粗尾細にして之に似たるよりいふ、即ち古文にて書したるものなり、故に之を古文尙書といふ。孔子の後裔なる孔安國は、この古文尙書を得て、今文尙書と比較せしに、十六篇多かりきとい

ふ。十六篇の名は、鄭玄の説によれば左の如し。

舜典、汨作、九共、大禹謨、益稷、五子之歌、胤征、湯誥、咸有一德、典寶、伊訓、肆命、原命、武成、旅葵、罔命、九共を九篇に分てば二十四篇となるなり。なほ今文古文の篇目に就ては、異説頗る多し。今皆省略に従ふ。

孔安國は右の古文尙書を朝廷に獻ぜしも、未だ學官に立つるに至らず。平帝の時に至りて一たび之を立つることありしも、暫くにして復た之を廢せり。

古文尙書は右の如く甚だ行はれざりしが、後漢に至りて杜林之を傳へ、衛宏、賈逵、馬融、鄭玄等も之を學び、賈馬鄭の三氏はその訓傳注解を作れり。但し今文以外の十六篇は、意義不明なるが爲め、その注解を作らざりしものゝ如し。其の後古文尙書の經文は、西晉永嘉の亂に歐陽大小夏侯の注解と共に亡佚し、馬鄭注二十九篇の尙書は、隋唐頃までは存在せしも、また亡佚せり。これ今文尙書古文尙書傳來の概略なり。

第四 古文尙書の偽作

古文尙書經文は、西晉の懷帝永嘉の亂に亡佚せしに拘らず、東晉元帝の時、豫章内史梅賾（すけ）といふ者、孔安國傳古文尙書五十八篇を得て之を朝廷に上れり。この五十八篇の中、今文にあるもの三十三篇（前に挙げたる二十九篇中堯典より舜典を分ち、皐陶謨より益稷を分ち、盤庚を分ちて上中下三篇となしたるもの）古文のみにあるもの二十五篇なり。その二十五篇の名目は左の如し。

大禹謨、五子之歌、胤征、仲虺之誥、湯誥、太甲、上中下、咸有一德、說命、上中下、泰誓、上中下、武成、旅葵、微子之命、蔡仲之命、周官、君陳、畢命、君牙、冏命、

右の二十五篇と之に附隨せる孔安國傳と稱するものは、實に疑問の存する所なり。

抑、梅賾は孔傳古文尙書を元帝に上りしも、その舜典なきが爲めに、堯典の慎微五

典以下を分ちて舜典とせり。是に於て學徒漸く多きを加へ、遂に鄭注と共に學官に立つることゝなれり。尤も梅賾の上りし孔傳古文尙書は、それより以前魏の頃より存在せしものゝ如くなれども、元帝以後は鄭注と並び行はれ、唐に至りて孔穎達が勅を奉じて尙書正義を作るや、梅賾本を本とせしを以て、馬鄭本は遂に滅亡し、孔傳古文のみ盛に世に行はれ、宋の蔡沈が集傳を作るも、亦この本によれり。是に於て古文尙書は不朽の經典として、孔傳と共に世人の尊信を受くるに至れり。

然るに南宋時代に至りて、古文尙書孔傳に疑を挾むもの起り、吳棫、朱子の如きは、古文の今文に類せざるを疑ひ、且朱子は孔傳の魏晉以後の偽作なることを斷言せり。其の後元の吳澄、明の梅鷺等を経て、清の閻若璩、惠棟、江聲、王鳴盛に至り、古文尙書孔傳の偽書なること愈々明白なることゝなれり。今その偽書たる理由の主なるものを擧ぐれば、概略左の如し。

一、孔傳古文尙書二十五篇の篇名は、鄭玄の擧げたる今文以外の二十四篇と合せざ

ること。

鄭玄の擧げたる二十四篇には、汨作、九共、典寶、肆命、原命の篇名あれども、孔傳古文には之なく、又孔傳古文には、仲虺之誥、太甲、說命、微子之命、蔡仲之命、周官、君陳、畢命、君牙の諸篇あれども、鄭說には之を擧げず。鄭玄は古文尙書を學び、その注解をも作りし人なるに、その說と一致せざるは、孔傳古文の眞本に非ざる一證となすべし。

二、左傳國語孟子禮記等に引用せる尙書の語にして、杜預韋昭趙岐鄭玄等が逸書となししもの、孔傳古文の本文に存在すること。

左傳國語等に尙書の語を引きたること甚だ多きも、其中杜預韋昭等の注家が之を逸書となししものは、當時その書の世に傳らざりしこと明かなり。然るに其の語現に古文尙書の中に存在し、その見えざるものは、僅に左傳昭公十四年、夏書曰、昏墨賊殺の一句に過ぎざるのみ。されば古文尙書はこれ等逸書

の文を蒐集補綴して作りし痕迹を留めたるものなり。

三、文章の上より見るに、今文古文の文體同じからざること。

伏生の傳へし今文尙書は詰屈聱牙にして、難解の語句頗る多く、いかにも古色蒼然たるものあり。然るに古文尙書は明白坦亮、且その文勢は平緩卑弱にして力なく、到底秦漢以前の文章と認むること能はざるものなり。

以上擧げたる所の三條によりて之を見れば、古文尙書の後世の僞作なることは、誠に掩ふべからざるものなり。之と同時に孔安國傳と稱するものも、その文章は西漢時代のものに類せず、その地名は魏晉以後のものも之あり。然のみならず、史記漢書には孔安國はたゞ尙書を獻せしのみにて、傳を作りしこと見えざれば、その僞作なることは復た論を俟たざるなり。

右の如く孔傳古文尙書は既に僞作なりとすれば、その僞作は何人の手に出でたるかの疑問は起るべし。されども既に僞作といふ以上は、その作者固より明瞭な

らざるものなれば種々の推測説をなすものあり。其の中にて魏の王肅の作なるべしとするもの最も有力なる説なり。王肅は鄭玄の後に生れ、事毎に鄭玄に反對したる人にて、孔子家語を偽造し、聖證論を作りて、務めて鄭玄に抗せしことは、人の皆知れる所なり。孔傳古文尙書と王肅の尙書注と大體一致するより見れば、王肅が己れの説の鄭玄説よりも孔安國の古義に合することを證明せんが爲めに、孔傳古文尙書を偽作せしことは、亦この消息を傳へしものなるべし。且古文尙書は魏晉より南宋に至るまで凡そ九百年の間、幾多の堂々たる學者の目を眩して、眞に三代の遺文なりとして信用せられたる程のものにて、博學洽聞の士に非ざれば、決して之を作ることを能はず。若し魏晉の間に於て其の人を求めば、王肅に非ざれば恐らく之に當るものなかるべし。これ余の王肅説を取る所以なり。

古文孔傳既に偽作なりとするも、世人或は之を廢せんとするは亦誤れり。たとひ王肅の偽作なるも、其の材料は左傳國語孟子禮記等の古書に引用せる逸書の文を蒐集したるものなり。されば恰も斷錦を綴りて製せし衣服の如くにて、その一句一章には全玉の言少なからず、故事を考へ風教に益すべきもの、數ふるに遑あらず。且千數百年の間之を以て典據とし、之を以て準則となしたる場合甚だ多し。孔傳も亦孔安國の作には非ざれども、魏晉時代の經説として之を見れば、相當の價值あるものなり。之を讀めば幾多の益を得ること勿論なり。かゝる次第なるが故に、古文尙書は偽作なれども、本編は蔡傳本によりて悉く之を收載せり。

第五 書經の性質及び讀法

書經は唐虞三代君臣の言行政事を記したるものなり。されども普通の歴史とは同じからず。普通の歴史は、治亂興廢善惡得失を併記して、その分るゝ所以を明かにするものなれども、書經は古代君臣の言行政事中に於て、特にその模範となすべきことを採録したるものなり。故に歴史として之を見れば、その一面を叙述す

るに過ぎず。堯舜のこと、禹湯文武のこと、假令百篇の書悉く今日に存在するも、決して唐虞三代史實の全部を傳ふるものに非ず。若し之を以て書經の不完全を責むるものあらば、そは書經の性質を解せざるものといふべし。

孔傳の序には、書經の文體を分ちて、典謨訓誥誓命の六種とせり。典は堯典舜典の類なり。謨は皋陶謨益稷の類なり。訓は無逸立政の類なり。誥は大誥康誥の類なり。誓は甘誓牧誓の類なり。命は顧命文侯之命の類なり。その形式より之を見れば、大體右の如くなれども、要するに唐虞三代の聖帝明王とその良臣賢輔との精神心術を傳へたるものにて、明德新民の要を述べ、天叙天秩の理を明かにし、洪範の道を説き、無逸の誠を陳し、嘉言要道甚だ多し。今日存する所の眞本は、百篇中僅に三分の一に過ぎずと雖も、洵に古典の貴重なるものにて、今日に於ても道德政治の標準となすべきもの往々之あるのみならず、支那古代の研究に於ては、決して缺くべからざるなり。

それ支那の古經は、何れも二千數百年以上のものなれども、書經を以て最も古しとす。易の起原は書經以前にあるべけれども、其の初はたゞ卦畫あるのみにして未だ文辭あらず、文辭を係けたるは周初よりの事なれば、書經の古きに及ばず。且書經は種々の災厄に遭遇せしことあるが故に、文字の誤脱錯繆からず、難解の場處も往々これあり、之を精讀せんと欲せば、孔傳正義以下、清の江聲(尚書集注音疏)王鳴盛(尚書後案)孫星衍(尚書古今文注疏)王先謙(尚書孔傳參正)等の諸説を参考せざるべからず。

されどもその大意を領會して之を運用せんとするには、宋の蔡沈の集傳本によりて一應之を通讀すること、尤も簡便なる方法といふべし。而して本書は實に之が階梯をなしたるものなり。

文學博士 林 泰 輔

## 易經解題

## 第一 易の名義

易の字は、元來蜥易即ち「トカゲ」又は守宮といへる動物の象形字なり。支那の傳説に、蜥易は一日に十二たび色を變ずといへることあり。蓋し亞弗利加に産する「カメリオン」の敵の眼を掠めんが爲めにその止まる所に從つて色を變ずるが如きものにて、十二たびといへることは確實なりや否や詳ならざれども、とにかく古代に於て時々色を變ずる動物ありしなるべし。この故にその象形たる易の字を變易の義に用ふることもありしより、この書名となすに至りしものゝ如し。既に之に書名となす時は、易の字に交易變易の二義を包含すべし。交易は天地山澤男女の如く、二つの者の對立して相交はるをいひ、變易は晝夜寒暑の推移するが如く、一氣の流行して相變ずるをいふ。易の述ぶる所この二義に外ならず、故に之を以て名

づけしなり。この書に又周易易經等の名あり。周とはその書の周代に成りしを以てなり。之に經の字を加へて易經と稱するは、尊尙の意より出でたること、他の經書と異なることなし。

## 第二 易經の成立

易は一人一時の作にあらず、數人の手を歴て成りしものにて、その成立の年代は甚だ長し。その始めて出でしは乾坤巽艮坎兌離震の八卦にて、即ち「易」の如きもの八種あるに過ぎず、而して未だ文字の之を説明するものあらず。古來之を伏羲の作る所となし、も茫漠たる太古の事にて明確には言ひ難し。その後、八卦を重ねて六十四卦となし、は何人なるか、或は伏羲といひ、或は文王といひ、其他種々の説あれども、とにかく文王以前にあることは疑なかるべし。何となれば、占筮をなすには六十四卦あるに非ざれば、その運用も自由なること能はず、この故に筮をなす



と卦を重ねるとは必ず關係あるべし。而して殷の巫咸が筮を作ることは、世本呂氏春秋等に見え、筮の字は竹に従ひ巫に従ふ、即ち巫が竹を把りて行ふことにて、殷代は巫を尙ぶの風頗る盛にして、巫咸巫賢の如きもの政を相けし時なれば、筮法の此時に起るは固より然るべきことなり。されば八卦を重ねて六十四卦となすことも、亦この頃に起りしなるべし。若しそれ八卦のみを以て吉凶を占ひし時代は、いかなる方法なりしか明白ならざれども、とにかく極めて簡單なることなりしは、世運の變遷進歩の上より見るも、蓋し疑なかるべし。

以上は、易の卦畫のみにして未だ文字あらざる時のことなるが、始めて之に文字を係けたるは卦辭爻辭にして、即ち易の經文なり。卦辭は乾元亨利貞の類にして、一卦の義を説明し、爻辭は初九潛龍勿用の類にして一爻の義を説明したるものなり。この卦辭爻辭は何人の作なるか、從來の學者は、繫辭傳又は史記等によりて之を周文王の作とせり。卦辭は文王として別に差支のこともあらざれども、爻辭に

は明夷の卦に箕子之明夷といへるが如き、文王以後の事もありて、不都合なれば、後に卦辭は文王、爻辭は周公なりとの説起り、多數の學者は大抵之に従へり。今、卦辭爻辭の文を検するに、その文章及び事實の上より見れば、周初のものたることは殆ど疑なしと雖も、その文王周公なりや否やは、なほ未了の問題に屬す。殊に書經に見えたる周公の思想と爻辭とを比較するに、聊か逕庭なきこと能はざれば、今はただ周初の作として、必ずしもその人を指定せざることを、寧ろ穩當なる見解といふべきなり。

易の卦爻及び經文を説明せしものに十翼あり。十翼とは、象傳(上下)象傳(上下)繫辭傳(上下)文言說卦序卦雜卦、是なり。十翼の名は漢代に始まり、それより宋代に至るまでは、十翼を孔子の作となすこと殆ど異論なし。然るに宋の歐陽修に至りて、十翼中の繫辭傳以下を以て孔子の作に非ずとせしより、元明以後之を議するもの愈多く、或は十翼全部を疑ふものあり、或はその一部分を疑ふものあり。我が國に

於ても伊藤東涯佐藤一齋等の如き皆十翼は一人一手に出づるに非ずとして舊説を難ぜり。今、十翼を讀むに、その文體より之を見るも、決して一人の筆に成りしものに非ざること極めて明かなり。象傳象傳の如きは、いかにも簡質古樸にして孔子の筆とも思はるゝなり。若し孔子に非ずとせば或は孔子以前のものなるやも知るべからず。繫辭傳に至りては頗る流暢明快にして、或は巧に過ぐるの嫌なきにあらず。たゞ孔子の時代と雖も、皆論語の如き簡質の文のみにも非ずして、或は左傳載する所の如き暢達の文もあれば、その暢達なるが故に孔子の筆に非ずとも言ひ難し。されども繫辭文言等、皆子曰の字ある上より見れば、その作者が孔子の説を引用せりといへるもの眞に近し。先儒或は繫辭などの議論の高尙深遠にして、論語の平易坦明なるに類せざるを以て孔子の説に非ざるを疑ふものあり。されども孔子は一面より之を見れば、實に庸言庸行の君子にして、又他の一面より之を見れば、高尙深遠の思想あること、是即ち孔子の孔子たる所以となすことも亦

一理なきに非ず。たゞ繫辭の議論はやゝ高遠に過ぎ、思想上より之を見れば、恰も子思の中庸と伯仲の間にありといふべし。されば孔子より以後の時代に於て、その學を爲すもの、孔子の思想に本づきて之を記せるも、幾分か自己の思想をも雜へて之を敷衍せしものゝ如し。説卦序卦雜卦に至りては、必ず周末學者の記せしものにて、決して孔子の作には非ざるべし。要するに、十翼は衆人の手に成れりと雖も、大極理性道器仁義等、後世學問の極致とするもの皆その中に在り、孔子の思想も亦往々包含せられたれば、實に儒教の要典なり。されども十翼の名目は悉く史記に載せざれば、この十篇を合せて經文に附せしは、恐らくは司馬遷以後にあるべし。易經は古來經を分ちて上下二篇とし、之に十翼を加へて十二篇となし、が、後漢の鄭玄が注を作るに及びて、象象を經に合して學者の便宜を謀りしより、王弼、孔穎達等、亦象象文言を卦爻の下に分付するに及びて、古經の面目一變せり。然るに宋の晁説之は古經の亂れたるを惜しみ、之が訂正を試みしも、盡く古に合はざる所あ

りしかば、呂祖謙は更に傳記を參考し定めて十二篇とせり。朱子が本義を作るに及びて祖謙の本に據り易始めて漢時の舊に復せり。其後また朱子の本義を取りて王弼本に本づきし程傳に分付することも行はれたり。要するに、古經の體裁に従ひて十二篇に分つは固より善しと雖も、象象文言を卦爻の下に分付するも、學者の習讀の便宜を圖るより出でたることなれば、亦深く咎むるに足らざるなり。

### 第三 易經の性質

易經の成立は、右の如く數十世を歴たるものなるが、その始めて八卦を作りし時代にありては、たゞ簡單なる占ひの用に供するのみにて、深遠微妙の意義あるに非ず。蓋し支那にては古來より龜卜の法行はれ、恰も我が國の神代に於てハ、カの本を以て鹿の肩骨を灼きてトふと同様なることあり。然るに八卦を重ねて六十四卦となすに及びては、その占筮の法頗る精密なることとなりて、龜卜の比にあら

ず。況んや周初、卦辭爻辭の成るに至りては、六十四卦三百八十四爻によりて陰陽消長の理を明かにし、吉凶悔吝の教を示し、單に占筮の爲めのみならず、亦往々道德の訓戒を垂るゝことあり。思ふに當時は既に淳朴の時代に非ざれば、卦辭爻辭の述ぶる所は、頗る人情の幾微を穿ち、世態の紛錯を究め、身を立て世に處するの道を指示するに於て、誠に剴切周到なるものあり。古來、易は聖人が徳を崇び業を廣むる所以なりといへるは之が爲なり。東周以後、十翼の出づるに及びて、天道を論じ人事を説くこと益々精密にして、造化の妙用を究め、鬼神の幽蹟を探り、宇宙間の事擧げて漏すことなきに至れり。これ易は天地に準ず、故に能く天地の道を彌綸すといへる所以なり。されば易は漸々に發達せしものにて、八卦、六十四卦、上下經、十翼、決して同一達度のものに非ず。故に朱子が伏羲の易は自ら是伏羲の易、文王周公の易は自ら是文王周公の易、孔子の易は自ら是孔子の易といひしは、極めて適當なることなり。朱子はこの見地よりして易を卜筮の書として本義を作りしは、確

に一の見識といふべし。たゞ十翼に至りては、卜筮上の事のみならず、廣く宇宙觀、人生觀等を論ぜしことあるは勿論なり。

易經の性質、既に此の如し。而して周初には周易の外に連山、歸藏あり、この三種を合せて三易といふ。古來連山を夏の易、歸藏を殷の易といへるは、甚だ明確なるものに非ずと雖も、とにかく周官大卜の官の三易を掌るは、即ち之を以て卜筮の用となし、こと明かなり。孔子の易を讀みて、韋編三たび絶つといへるが如きは、豈た卜筮の爲めのみならんや、その易理の研究に精力を傾注せしこと疑なし。

繫辭傳に、居れば則ち其の象を觀て、其の辭を遊び、動けば則ち其の變を觀て、其の占を遊ぶといへるは、即ち易の使用上に於てこの兩方面あることを示したるものなり。蓋し西周初代までは、専ら卜筮の用となし、孔子に至りては、象を觀、辭を遊ぶといへる方面に重きを置きしことは、論語述而に「我數年、五十以學易、可以無大過、矣」といへるを見ても、粗推察せらるべし。

#### 第四 易學の變遷及び應用

易經の述ぶる所は、宇宙間各方面の事に涉り、而して卦辭爻辭はすべて目に觸れ耳に達する種々の物象に因りて辭を係け、譬喩的の文字を以てその意を示し、一字一句も漫然として筆を下し、ものに非ず。これ蓋し卜筮上に於て、運用自在ならしめんが爲めに、この書法を用ひしなるべし。是を以て易はいか様にも解釋することを得べく、又全體の構造上に於て、その觀察の方法必ずしも一定せず。この故に古來易學を爲すものに種々の流派あり。漢代に於ては、易を借りてその説を述ぶること、焦贛、京房等の陰陽災祥を説くあり、魏伯陽の火候煉丹の法を明かにするあり。易を解釋するに象數を主とすること、荀爽、鄭玄等の如きあり。三國に至りては、吳の虞翻の如きも、亦その流派に屬するものなり。然るに魏の王弼は別に、象辭を離し、漢儒象數の説の支離附會に陥るを憂ひ、盡く之を一掃して、専ら理論を以

て易を解釋せり。且王弼はもと老莊の學を好みしものなるが故に、その意を以て説明をなし、當時虛無を尙ぶの氣運に乗ぜしかば、その說盛に行はれ、漢儒象數の學は次第に衰へ、其後、唐の孔穎達の命を奉じて正義を修むるに及びて、王弼の注に據りしより、王注孔疏は天下を風靡して衆說皆<sub>レ</sub>せり。

宋に至りて胡安定、程伊川等、専ら義理を以て易を解し、伊川は易傳を作りてその書未だ完成するに至らざりしも頗る世に行はる、これ亦王弼の流派に屬するものなり。たゞ王弼は老莊の意に本づき、伊川は儒學の立場より之を闡明するの差あるのみ。朱子は固より伊川の學を宗とするものなれども、その周易本義を作るや、易は卜筮の爲めに作るの說を主とし、象數と義理とを兼ねて之を説明せしは誠に適當なることなれども、その易學啓蒙を作りて河圖洛書を信用せしは、本末を顛倒することを免れず。されども程傳朱義の出でしより、學者率ね之を兼ね修め、明の初、易經大全を編するに及びて亦之に依り、元明の間甚だ異說なし。清の康熙帝の

時、李光地が勅を奉じて周易折中を作るや、亦朱義程傳を並べ列ねしも、廣く漢魏の遺說をも收載し、復た大全とその揆を異にせり。

是より先、王注孔疏の行はれしより、漢魏の說は次第に散佚し、僅に唐の李鼎祚の集解によりて子夏孟喜京房虞翻等三十五家の梗概を窺ふことを得るのみ。清朝に至りて從來宋學流行の反動として、所謂漢學復興の氣運再び開け、漢代に行はれたる學說を研究するもの起れり。是に於て易學に於ても、惠士奇、惠棟、張惠言、姚配中等の如き漢易を治むるもの、尠からず、王弼以前の易說漸く明かならんとするに至れり。されども漢易には頗る迂謬の說なきこと能はざるものなれば、之を非議するもの亦多し。

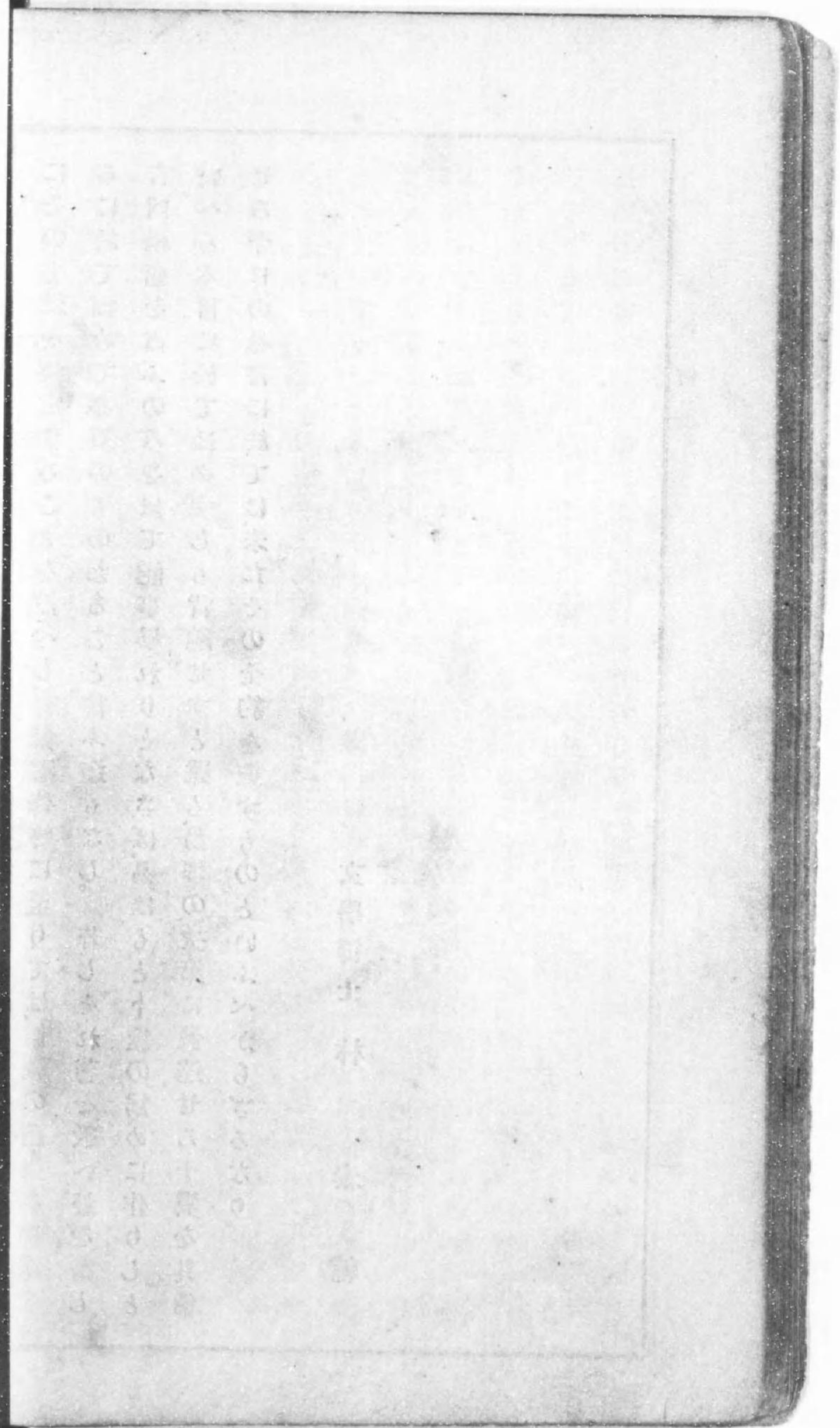
我が國にては、大寶學令に周易は鄭玄、王弼注とありて、或は鄭注を習ひ、或は王注を習ふことなりしが、今日に傳はれる鎌倉室町時代の古寫本は皆王注のみなれば、廣く行はれたるは王注なるべし。徳川時代に至りては、伊藤東涯、周易經翼通解、河

田東岡(周易新疏)佐藤一齋(周易欄外書)等の如きは其の説多少の異同ありと雖も、皆程傳朱義の流派に屬するものなり。その卜筮を主とするものには、新井白蟻(眞勢)中州・松井羅州の徒あり。王弼以前の易説を講究するものに至りては、誠に寥々たり。要するに、漢易は象數を主とし、魏宋の易は人事を重んずるの差ありと雖も、易は元來論語孟子の如く正面より倫理政治の教訓を述べしものに非ざれば、決して象數を廢すること能はざるものなり。故に晉の韓宣子は之を易象といへり。されども徒らに象數に拘りて術數讖緯に流れ、大義に於て悟ることなきはその弊や亦甚だし。必ずや漢宋並び治めてその長を取りその短を捨つべきことは勿論なるも、先づ程傳朱義の流派によりてその淵源に遡ること、最も修學の捷徑なるべし。今それ易を學びて之を各自に應用せんと欲せば、まづ六十四卦三百八十四爻に就て、常に之を自己の位地境遇に當て嵌めて、身を立て世に處するの道を察すること尤も必要なり。果して然らば必ずしも占筮を待たずして吉凶禍福に於て容易

にその去就を決定することを得べし。繫辭傳等に至りては、儒教の蘊奥を探求するに於て極めて必須のものたること言ふ迄もなし。若しそれ著を數へ卦を畫し吉凶禍福を占ふのみを以て能事畢れりとなさば、易はもと卜筮の爲めに作りしといへる本旨に於ては必ずしも背馳せずと雖も、易理の次第に發達せる十翼を具備せる今日の易書に於ては、未だその全豹を盡すものといふべからざるなり。

文學博士 林 泰 輔

欠



# 欠

有<sub>二</sub>淵濟盈<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>鷺雉鳴<sub>一</sub>。濟盈不濡軌。雉鳴求<sub>二</sub>其牡<sub>一</sub>。

雝雝鳴鴈。旭日始旦。士如歸妻。迨<sub>二</sub>冰未泮<sub>一</sub>。

招招舟子。人涉卬否。人涉卬否。須<sub>二</sub>我友<sub>一</sub>。

○淵として濟の盈つる有り、鷺として雉の鳴くあり。濟盈ちて軌を濡さず、雉鳴いて其牡を求む。

● 一杯にたへたるをいふ、濟は川の名 ● 雝雝の鳴く聲 ● 車のわだち也 ● 淫亂の人禮義を度らず其配偶に非ずして禮を犯して以て相求むるを云ふ

○雝雝たる鳴鴈、旭日始めて旦なり。士如し妻を歸がしめば、氷の未だ泮けざるに迨へ。

● 舞の相和ちるを云ふ

○招招たる舟子、人は渉るも卬は否す。人は渉るも卬は否す、卬は我友を須つ。

● 招きよぶ貌 ● 船頭也 ● 人は我先きにわたれども我はしかせずとなり ● 女の人に從ふ必ずつれあひたる縁を持つをいふ

## 谷風

是れ衛國の風俗増廢して夫婦其道を失へるを刺りて作れる詩なり



習谷風。以陰以雨。黽勉同心。不宜有怒。采芣采芣。無以下體。德音莫違。及爾同死。

行道遲遲。中心有違。不遠伊邇。薄送我畿。誰謂荼苦。其甘如飴。宴爾新昏。如兄如弟。

溼以涓涓。溼溼其流。宴爾

習習たる谷風、以て陰り以て雨ふる。黽勉心を同じくして、宜しく怒ること有るべからず。芣を采り芣を采る、下體を以てすること無かれ。德音違ふこと莫くんば、爾と死を同じうせん。

● やはらかにしづかなる形。● 東風なり。● 夫婦和して家道成ること、陰陽和して雨澤降るが如し。● つとめはげむこと。● あをなと訓ず、今のかぶら菜也。● 大根の類也。● 芣の根葉時として味の悪しきことあり、たとへ根の赤しくとも此の莖の上きをすてざれとなり。● よき譽をいふ。

○道を行くこと遅遅たり、中心違ふこと有り。遠からずして伊れ邇し。薄く我を畿に送る。誰か荼を苦しと謂ふ、其甘きこと飴の如し。爾の新昏を宴み、兄の如く弟の如し。

● のろく遅まざるをいふ。● 其足は進まんを欲すれども心に忍びざる所あるをいふ。● 門内を云ふ。● ながなといつて食用とならぬもの也、誰か之をながしといふ決して苦いことなしと也。● あまなと訓ず。

○溼は涓を以て涓、溼溼たる其流あり。爾の新昏を宴み、我を肩とし以

新昏不我。肩以。毋逝我梁。毋發我笱。我躬不閱。遑恤我後。

就其深矣。方之舟之。就其淺矣。泳之游之。何有何亡。黽勉求之。凡民有喪。匍匐救之。

不我能。慤反。以我爲。隲既。阻我德。賈用。

にせず。我梁に逝くこと毋かれ。我笱を發すること毋かれ。我躬すら閱られず、我後を恤ふるに遑あらんや。

● 涓水は瀾り涓水は清む、涓水が涓水と合流するに上りて其濁れる色のおぞやかに見ゆるをいふ。● 水の石。● 清みわたる貌。● 小島をいふ。● やな也、石を堰き水を障へて其中を空しくし以て魚の往來を通ずる者也。● うけ也、竹を以て器となし漿の空をうけて以て魚を取るもの也、前項と共に新昏を戒めて我の處に居るなかれとの意をたとへいふ也。● 我が去りたる後の事也。

○其深きに就きて、之に方し之に舟す。其淺きに就きて、之を泳り之を遊ぶ。何をか有りとし何をか亡しとす。黽勉して之を求む。凡そ民の喪ある、匍匐して之を救ふ。

● 深ければ方舟し淺ければ游泳す、家事の難易有無となく黽勉して之を爲すを云ふ。● 鄭高郵里の人の不幸を指していふ。● 手足並び行くこと、其急遽の甚しきを言ふ也。

○我を慤ふこと能はず、反つて我を以て隲と爲す。既に我徳を阻す、賈用つて售られず。昔育ふとき育の鞠まりて、爾と顛覆せんことを恐る。既に生じ既

不售。昔育恐。育鞠。及爾願。覆。既生既育。比予于毒。

我有旨蓄。亦以御冬。宴爾新昏。以我御窮。有洗有潰。既詒我肄。不念昔者。伊余來暨。

式微。式微。胡不歸。微君之躬。胡爲乎泥中。

に育して、予を毒に比す。

●我が善徳を排斥すること ●商品の賣れざるが如く、勤勞の甲斐なきに譬ふ ●生理既に窮るをいふ ●ひつくりかへりて起ること能はざるをいふ ●今既に生育して、反つて我を毒に比して毒てんとするかの意

○我に旨蓄あり、亦以て冬を御がん。爾の新昏を宴み、我を以て窮に御らしむ。洗たるあり潰たるあり、既に我肆を詒す。昔者、伊れ余が來りて暨ひしを念はず。

●美菜を蓄ふること ●冬季缺乏の時に儲へんが爲也 ●我をして困窮の時に富らしめ、安樂の時には之を棄つると也 ●たりんしき貌 ●怒れる色即けしきばむこと ●我に違ふに勞苦の事を以てするをいふ

式微

是れ黎侯國を失ひて、衛に寓せる時、其臣之に歸を勸めて作りし詩也

式微へ式微ふ、胡ぞ歸らざる。君の故に微すんば、胡ぞ中路に爲ん。

●それと訓じもつてと訓ずいづれも助辭也、式微と重ね言ふは衰の甚しきをいへる也 ●露中にありて泥濘の

辱をうくるをいふ

○式微へ式微ふ、胡ぞ歸らざる。君の躬に微すんば、胡ぞ泥中に爲ん。

●陷穽の難ありて救はれざるをいふ

旄丘

是れ黎の臣子が衛伯の其職を修めざるを責めて作れる詩也

旄丘の葛、何ぞ誕なる節ある。叔や伯や、何ぞ日多きや。

●前の高く後の下き處を云ふ ●葛の節の疎濶なるを指す、誕は即ち濶也 ●衛の諸臣を汎稱す ●日歌はありても救はれざるを云ふ

○何ぞ其れ處る、必ず與あらん。何ぞ其れ久しき、必ず以あらん。

●安定すること ●與國の事 ●何等か他の理由あらんと也

○狐裘蒙戎たり、車の東せざるに匪ず。叔や伯や、與に同じうする所靡し。

式微。式微。胡不歸。微君之躬。胡爲乎泥中。

旄丘之葛兮。何誕之節兮。叔兮伯兮。何多日也。

何其處也。必有與也。何其久也。必有以也。狐裘蒙戎。匪

車不東。叔兮伯兮。靡所與同。瑣兮尾兮。流離之子。叔兮伯兮。衰如充耳。

● 狐の皮衣也、大夫の著物也 ● 毛の亂れたる様をいふ ● 東に來らざるをいふ、蒙は衛の西に在り、今寓する所は衛の東に在れば也 ● 相與に來らざる事  
○ 瑣たり尾たり、流離の子、叔や伯や、衰として充耳の如し。  
● 細也 ● 末也、瑣尾ともに物の散足らざるをいふ ● さすらひ、ぶらつくこと ● 笑ふことの多き形容  
● 耳の塞がりたるもの即ち聖者を指す、耳聾の人は常に笑ふこと多しとか

簡兮

是れ衛君の賢人君子を用ひざるを刺りて作りし詩也

簡兮簡兮。方將萬舞。日之方中。在之前上。碩人俣俣。公庭萬舞。有力如虎。執轡如組。

簡たり簡たり、方に將に萬舞せんとなす。日の方に中する、前上の處に在り。  
● 簡易不恭の貌とありて物事をなげやりにすること ● 舞の體名、すべて武の舞には干戚を用ひ文の舞には羽箠を用ふるを例となす ● 明瞭すなはち人の目に立つ處をいふ  
○ 碩人俣俣たり、公庭に萬舞す。力あること虎の如く、轡を執ること組の如し。  
● 大徳の人 ● 大なる貌 ● たづなの事 ● 組糸の事革のたづなもやはらかき組糸の如くなるをいふ

左手執箠。右手秉翟。赫如渥赭。公言錫爵。

○ 左手に箠を執り、右手に翟を乗る。赫として渥赭の如し、公言に爵を錫ふ。  
● 箠の如くにして六孔あり或は三孔といふ ● 雉の羽也 ● 赤い形容 ● 顔色の渥赤にはてるをいふ、渥はあつしと訓じ赭はあかしと訓ず ● さかづき也、燕飲をたまふこと

山有榛。隰有苓。云誰之思。西方美人。彼美人兮。西方之人兮。

○ 山に榛あり、隰に苓あり、云に誰を之れ思ふ、西方の美人なり。彼の美人は西方の人なり。  
● 和名はしばみと訓ず ● 低地を指す ● 和名あまぎと訓ず藥種にして今の甘草也 ● 西周の世の盛なる賢主を指す

泉水

是れ衛女、諸侯に嫁するもの、父母終りて歸寧を思ふ得ざるが爲めに作れる詩也

瑟彼泉水。亦流于淇。有懷于衛。靡日不思。變彼諸姬。

瑟たる彼の泉水、亦淇に流る。衛に懷ふことあり、日として思はざるは靡し。  
變たる彼の諸姬、聊くは之と謀らん。  
● 泉の始めの涌き出づる形容 ● 水の石、之に流れ入る也 ● 衛に歸寧せんと欲するをいふ ● 顔よきこと

聊與之謀。

出宿于沛。飲餞于漚。女子有行。遠父母兄弟。問我諸姑。遂及伯姊。

出宿于干。飲餞于言。載脂載膏。馭車言邁。過臻于衛。不瑕有害。

我思肥泉。茲之永歎。思須臾。漚。我心悠悠。駕言出遊。以寫我憂。

と ① 贈する時從へる婦婦を云ふ

○出でて沛に宿し、漚に飲餞す。女子行くこと有りて、父母兄弟に遠かる。我諸姑に問ひ、遂に伯姊に及ぼす。

① 地の名 ② 地の名 ③ 古人外に出づるときは必ず道祖を祭る、祭り終りて其側 酒を飲みて後に行く也即ち酒を飲みて馬のはなむけするをいふ ④ 諸姑の中の老女を指す

○出でて干に宿し、言に飲餞す。載ち脂さし載ち膏さし、車を還らして言に邁く。過に衛に臻らん、暇ぞ害あらざらん。

① 衛に赴く途上の地名也 ② 同上 ③ 害あるまじきか、いかゞあらんと疑ふさま也

○我肥泉を思ひ、茲に之れ永歎す。須と漚とを思つて、我心悠悠たり。駕して言に出で遊び、以て我憂を寫かん。

① 衛の川の名 ② 大息をつきて歎く也 ③ 衛の地名 ④ 同上 ⑤ はろくの意、長く思ふこと ⑥ 馬を車につくること、車馬の用意と、のふをいふ ⑦ 我が憂の種をはらひ除かん也

北門

是れ衛の賢者が其志を得ざるを述べて作れるもの也

北門より出づれば、憂心殷殷たり。終に寒しくして且つ貧しく、我艱を知る。こと莫し。已ぬる哉、天實に之を爲す。之を何と謂はん哉。

① 北門の門、即ち國を背にし險を前にする也 ② 盛なる貌にて憂のあつく盛なるをいふ ③ やつれて無作法なること ④ よしてしまはうよといふ位のこと ⑤ 何といはうよたゞ自然の成行にまかせん

○王事、我に邁く、政事、一に我に埒益す。我外より入れば、室人交々徧く我を謫む。已ぬる哉、天實に之を爲す。之を何と謂はん哉。

① 王命じて之が事を爲さしむる也 ② 我に落ちかゝること ③ 其國の政事也 ④ 皆に同じ、一切也 ⑤ 重ね重ねますこと ⑥ 室に在る人を指す ⑦ 我志を知らず自ら安んぜざるを以て、我を責めて已まざる也

○王事、我に教うつ、政事、一に我に埒遺す。我外より入れば、室人交々徧く

出自北門。憂心殷殷。終窶且貧。莫知我艱。已焉哉。天實爲之。謂之何哉。王事適我。政事一埒益我。我入自外。室人交徧謫我。已焉哉。天實爲之。謂之何哉。王事教我。政事一埒遺我。

我入自外。室人交。徧擗我。已焉哉。天實爲之。謂之何哉。

我を擗む。已ぬる哉。天實に之を爲す。之を何と謂はん哉。

● 打つてかゝること ● 遺は加也。まづく加るをいふ

北風

是れ衛國政治の暴虐なるを刺りて作りしもの也

北風其涼。雨雪其秀。惠而行。其虛其邪。既亟只且。

北風其れ涼たり、雨雪其れ秀たり。惠して我を好せば、手を擗へて同じく行かん。其れ虚に其れ邪にせんや、既に亟なり。

● 冷く寒きをいふ ● 雪の盛にふるをいふ ● 愛情を以て我を好かば一擗に手をとりて去らんとの意 ● 虚はゆるくと訓じ邪はしづかと訓ず、こゝを去ること如何にし、ゆるくしづかにするを得んやとの意 ● 輻風は早くも足下に迫り居れば也

北風其嘒。雨雪其霏。惠而好我。攜手同歸。其虚其邪。既亟只且。

○北風其れ嘒たり、雨雪其れ霏たり。惠して我を好せば、手を擗へて同じく歸らん。其れ虚に其れ邪にせんや、既に亟なり。

● するどく吹きすさぶ形容 ● ちらく〜と降ること

莫赤匪狐。莫黑匪烏。惠而好我。攜手同車。其虚其邪。似亟只且。

○赤しとして狐に匪ざるは莫く、黒しとして烏に匪ざるは莫し。惠して我を好せば、手を擗へて車を同じうせん。其れ虚に其れ邪にせんや、既に亟なり。

● 狐は赤色 ● 烏は黒色狐烏共に不祥の物にして、人の見るを惡む所也今や見るもの盡く此物ならざるはなし ● 輻の將に危迫せんとするや知る可き也

靜女

是れ衛人が其時代の感化によりて風俗の淫亂なりし其狀を感得に説出したるものなり

靜女其姝。俟我於城隅。愛而不見。搔首踟蹰。

靜女其れ姝たり、我を城隅に俟つ。愛すれども見ず、首を搔きて踟蹰す。

● 眞靜のしとやかな女の也 ● 顔色の美なるをいふ ● 輻の輻即ち人目の少き處所を指す ● 相愛し一日を期せしに終に來らずと也 ● たちもとると訓ず、頭をかきく〜そこちあたりにつつとためらひ居るをいふ

○靜女其れ變たり、我に彤管を貽る。彤管煒たるあり、女の美を説擇す。

靜女其變。貽我彤管。彤管有煒。說擇女美。

● 顔よき貌 ● 赤き色の筆のツツをいふ ● 赤くてりもふ様をいふ ● 既に贈物の美なるあり、而して最も女子の美貌なるに満足する也

自<sub>レ</sub>牧歸<sub>レ</sub>冀<sub>レ</sub>洵  
美且異<sub>レ</sub>匪<sub>レ</sub>女  
之爲<sub>レ</sub>美<sub>レ</sub>美人  
之貽<sub>レ</sub>

○牧より冀を歸る、洵に美にして且つ異なり。女なをの美たるに匪ひず、美人びじんの貽おくりものなり。

- 野外の牧場也
- つばなと訓ず、茅の始めて生じたるもの也
- 普通に異るをいふ
- 冀をさして言ふ
- 冀其物の美なるにあらざり、美人の贈物なるが故に冀も亦美なるが如くに思はるゝと也

新臺

是れ猶の國人が宣公の子儀の妻を奪ひたるを惡みて作りし詩也

新臺有<sub>レ</sub>泚<sub>レ</sub>河  
水瀾瀾<sub>レ</sub>燕婉  
之求<sub>レ</sub>蓬篠不<sub>レ</sub>  
鮮<sub>レ</sub>  
新臺有<sub>レ</sub>酒<sub>レ</sub>河  
水洿洿<sub>レ</sub>燕婉  
之求<sub>レ</sub>蓬篠不<sub>レ</sub>  
珍<sub>レ</sub>  
魚網之設<sub>レ</sub>鴻

○新臺泚たることあり、河水瀾瀾たり。燕婉之れ求めて、蓬篠鮮からず。

○新臺酒たることあり、河水洿洿たり。燕婉之れ求めて、蓬篠珍えず。

○魚網の設あり、鴻則ち之に離れり。燕婉之れ求めて、此の感施を得たり。

- 新規に築きし臺をいふ
- 鮮明なること
- 樂に返るゝ形容
- 安んじ願へる義、即ちしとやかなる女子をいふ
- うつぶすこと能はざるもの所謂はとむねを指す
- 高城のさま
- 平に渡るゝをいふ

則離<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>燕婉  
之求<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>此感  
施<sub>レ</sub>

● 魚を捕る爲に網を張りたるに鴻の鳥之にかたり、これ得る所の求むる所に非ざるを言ふ也、鴻はちほとりと訓ず

二子乗舟

是れ猶の國人が宣公の太子儀と二男壽とを思ひて作れる詩也

二子乘<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>汎  
汎其景願<sub>レ</sub>言  
思<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>中心養  
養<sub>レ</sub>  
二子乘<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>汎  
汎其逝願<sub>レ</sub>言  
思<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>瑕有<sub>レ</sub>  
害<sub>レ</sub>

○二子舟に乗る、汎汎たる其景あり。願うて言に子を思ひ、中心養養たり。

○二子舟に乗る、汎汎として其れ逝く。願うて言に子を思ひ、瑕ぞ害あらざらん。

- もしや害あるまじきか如何あらんと疑ひ感ふ様をいふ

邶國十九篇七十二章 毛傳には七十一章とあり

邶 一之四

汎彼柏舟。在中河。鬢彼兩髦。實維我儀。母也天只。不諒人只。

汎彼柏舟。在中河。鬢彼兩髦。實維我特。母也天只。不諒人只。

柏舟

是れ衛の世子共伯の夫人姜氏が父母に再嫁を強ひられしを義を守りて許さず其思を述べたるもの也

汎たる彼の柏舟、彼の中河に在り。鬢たる彼の兩髦、實に維れ我儀。死に之るまで矢うて他靡し。母や天なれども、人を諒とせず。

● うか／＼とただよふ様を云ふ ● 柏(ひ)の木材にて作りし舟 ● 河中と同じ、河水の内をいふ ● 鬢の髪(ひげ)の毛へかぶさりたるをいふ ● ナザしると訓ず、鬢の附髪にて額の兩方へ飾りに附くるもの也 ● 儀は匹をりとなりてつれあひをいふ ● 他心なきを誓ふこと ● 母の養育の恩は天の如く大なるをいふ ● 人間の心即ち我心を得ずして再嫁を勧むるをいふ

○汎たる彼の柏舟、彼の河側に在り。鬢たる彼の兩髦、實に維れ我特。死に之るまで矢うて愚靡し。母や天なれども、人を諒とせず。

● 河水の波也 ● 特も亦匹なり、つれあひをいふ ● 邪道即ち權を破りて再嫁するをいふ

牆有茨

是れ衛の公子頑の不伯を疾みて之を作りしものなり

牆に茨あり、埽ふ可からず。中葍の言は、道ふ可からず。道ふ可き所なれども、之を言へば醜ければ也。

● 築臺のこと名をひしと訓ず、とげある者也 ● 取り除くこと ● 葍中と同じ、こゝにては閨門の中の義なり ● 之を口にするは見にくしと也

○牆に茨あり、埽ふ可からず。中葍の言は、詳にす可からず。詳にす可き所なれども、之を言へば長ければ也。

● はらひ除くこと ● くはしくいふこと ● 之を言つても言ひ盡されずと也

○牆に茨あり、束ぬ可からず。中葍の言は、讀む可からず。讀む可き所なれども、之を言へば辱かしければ也。

● たばねて取り去ること ● 或は抽と讀み、ひき出す義にとくものもあり

牆有茨。不可埽也。中葍之言。不可道也。所可道也。言醜也。

牆有茨。不可埽也。中葍之言。不可詳也。所可詳也。言之長也。

牆有茨。不可束也。中葍之言。不可讀也。所可讀也。言之辱也。

君子偕老

是れ衛の夫人淫亂にして君子に事ふる道を失へるを刺れる詩なり

君子と偕に老いて、副笄六珈あり。委委佗佗として、山の如く河の如し。象服是れ宜し、子の淑からざる、云に之を如何にせん。

● 夫を指す、夫婦は一體、生きては偕に老い死しては同穴也 ● 后夫人の頭の飾也 ● 副をさしかたむるか  
んざし也 ● 笄に玉六つかざりにつくる也 ● 容儀のゆるやかにして自得したる様也 ● しづまりて風重し  
きをいふ ● ゆたかにしてひるきをいふ ● 物にかたどりにて法度ある衣服也 ● 似つかはしきをいふ ●  
宣姜を指す汝の義也 ● 不善なること ● この服飾ありとも之を如何にせん、其似合はざるを言ふ也

○ 玼たり玼たり、其の翟や。鬢髮雲の如く、鬢を屑とせず。玉の瑱や、象の掃や、揚にして且つ之に哲なり。胡ぞ然く天のごとくなる、胡ぞ然く帝のごとくなる。

● あざやかに盛なる形容 ● 雉子の模様のある祭服也 ● 鬢髮の雲の如く多くして美しきをたへたる也

君子偕老。副笄六珈。委委佗佗。如山如河。象服是宜。子之不淑。云如之何。

玼兮玼兮。其之翟也。鬢髮如雲。不屑鬢也。玉之瑱也。象之掃也。揚且之哲也。胡然而天也。胡然而帝也。

然面天也。胡然而帝也。

瑳兮瑳兮。其之展也。蒙彼繡緜。是緜絆也。子之清揚。揚且之顔也。展如之人兮。邦之媛也。

爰采唐矣。沫之鄉矣。云誰之思。美孟姜

○ 瑳たり瑳たり、其の展や。彼の繡緜を蒙つて、是れを緜絆とす。子の清揚なる、揚にして且つ之れ顔なり。展に之の如き人は、邦の媛なり。

● 玼と同義盛に立無なること ● 明の衣裳也 ● ちぢみたる細布をいふ、暑時の服也 ● かけまとひてひ  
かしむること ● 目もとの涼しく、額際のみろく晴れやかなるをいふ ● ひたひつきの圓くみちたるをいふ  
● 一國の美人

桑中

是れ衛の公室淫亂甚しく男女相奔り、世族在位に至るまで、妻妾を相羅ひに至る、此詩之を刺りて作れり

爰に唐を采る、沫の郷に、云に誰をか之れ思ふ。美なる孟姜なり。我を桑中に期し、我を上宮に要し、我を淇の上を送る。



矣。期我乎桑中。要我乎淇宮。送我乎淇之上矣。  
爰采芣苢。沫之北矣。云誰之思。美孟弋矣。期我乎桑中。要我乎淇宮。送我乎淇之上矣。

● 和名をなすと訓ず、鬼録の事也 ● 衛の邑の名 ● 長女の養氏、齊王の女子即ち衛族也 ● 地名、衛の地は桑多し故に地名にもかく名づけたり ● 何時會はんや約東を定むること ● 地名 ● 出迎に來ること ● 水の名 ● 會うて別る、時見送るを云ふ

○ 爰に麥を采る、沫の北に、云に誰をか之れ思ふ、美なる孟弋なり。我を桑中に期し、我を上宮に要し、我を淇の上に送る。

● 七一に似て作る、杞國の姓たり、杞國の長女亦貴族を意味す

○ 爰に藜を采る、沫の東に、云に誰をか之れ思ふ、美なる孟庸なり。我を桑中に期し、我を上宮に要し、我を淇の上に送る。

● かぶら菜也 ● 庸姓の貴族なちん、今之を知るによしなし

鶉之奔奔

是れ衛人が宣姜と頑と匹耦にあらずして相從ひしを刺りたる詩也

鶉之奔奔。鶉之疆疆。人之無良。我以爲君。

鶉は之れ奔奔たり、鶉は之れ疆疆たり。人の良無き、我以て兄と爲す。

● 鳥名、和名うづちと訓ず ● 居るときは常匹あり、飛べば相隨ふ貌とあり ● 鳥名、和名かき、ぎと訓ず ● 奔奔と同意 ● 良心なきをいふ ● 鶉屬にも劣れる人を兄とするの恥辱なるをいへる也

○ 鶉は之れ疆疆たり、鶉は之れ奔奔たり。人の良無き、我以て君と爲す。

定之方中

是れ衛の國人が文公を美めて作りし詩也

定之方中。作于楚宮。揆之以日。作于楚室。樹之榛栗。椅桐梓漆。爰伐琴瑟。

定の方に中する、楚宮を作る。之を揆るに日を以てして、楚室を作る。之に樹うるに榛栗と、椅桐梓漆と、爰に伐りて琴瑟とせん。

● 星の名、二十八宿の一也 ● 此星は陰曆十月頃になれば午後六時頃南の正中にあらはれて北極星と相對する也 ● 楚丘の上なる宮也 ● 日出日没をはかりて東西の方位を定むること ● 楚宮と同じ、互文也 ● はしはみとくりと ● あべぎり、きり、あづき、うるしの四種

升<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>虛<sub>一</sub>矣。以望<sub>レ</sub>楚<sub>一</sub>矣。望<sub>二</sub>楚<sub>一</sub>與<sub>レ</sub>堂<sub>一</sub>。景山與<sub>レ</sub>京<sub>一</sub>。降<sub>レ</sub>觀<sub>二</sub>于桑<sub>一</sub>。卜云其吉。終焉允臧。

靈雨既零。命<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>信人。星言<sub>レ</sub>風<sub>一</sub>駕。說<sub>二</sub>于桑<sub>一</sub>田。匪<sub>レ</sub>直也。人<sub>一</sub>。秉<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>塞淵。騶牝三千。

○彼の虛に升りて、以て楚を望む。楚と堂と、景山と京とを望む。降りて桑を観る。トして云に其れ吉なり、終にして允に臧し。

● 墟と同じ、故墟也 ● 楚丘の旁の邑の名 ● 大山なり ● 高丘なり、或は景を影とし山と京とを影はかると讀む ● 桑樹の土地に遊するは以て民の居と爲すに足るを知る也 ● 土地を選定してトも亦其吉を見ず

○靈雨既に零つれば、彼の信人に命ずらく、星みて言に夙に駕せよ、桑田に説らんと。直に人に匪ず、心を乗ること塞淵、騶牝三千あり。

● 上き雨なり ● 車駕を掌る官人也 ● 早朝に馬車の準備せよと命ずる也 ● 一説に農事を勸諭すとあり亦通ず ● 徒らに凡庸の君主にあらず ● 心を操り守ること誠實にして深きをいふ ● 馬七尺以上を騶と爲す、この肥大の牝馬三千匹ありとは、國産の富強をのべて君徳の美を稱するもの也

蝮 蝮

是れ蝮の風俗の淫亂を戒むる爲に爲りし者なり

蝮 蝮 在<sub>レ</sub>東。莫<sub>二</sub>之<sub>一</sub>敢<sub>レ</sub>指<sub>二</sub>女子<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>行。遠<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>兄弟<sub>一</sub>。

蝮蝮東に在り、之を敢へて指すこと莫し。女子行くことあらば、父母兄弟に遠からん。

● 虹の事、虹は天地の淫氣と爲す ● 淫奔の人は指だにさらずとの意也 ● 奔り去ること ● 父母兄弟に遠ざかるは不孝の極なり、其改心を望むや切なりと訓ふべし

○朝に西に隣れば、崇朝其れ雨ふる。女子行くことあらば、兄弟父母に遠からん。

● 虹の午前西の空に起つをいふ ● 夜明より食時までをいふ、共に淫邪の毒、陰陽の和を害するをいふ

○乃ち之の如き人は、昏姻を懐ふなり。大に信なきなり、命を知らざるなり。

● 男女の欲を指す ● 女子は自己の貞操を汚さざるを信とす ● 天理の正をいふ

相 鼠

是れ簡の在位の臣が禮無きを刺れる詩也

乃<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>人也。懷<sub>二</sub>昏<sub>一</sub>姻<sub>一</sub>也。大<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>信<sub>一</sub>也。不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>命<sub>一</sub>也。

朝<sub>二</sub>隣<sub>一</sub>于西。崇朝其雨。女子有<sub>レ</sub>行。遠<sub>二</sub>兄弟<sub>一</sub>父母<sub>一</sub>。

相鼠有皮。人而無儀。人而無儀。不死何爲。

相鼠有齒。人而無止。人而無止。不死何俟。

相鼠有體。人而無禮。人而無禮。胡不遄死。

鼠を相るに皮あり、人にして儀なからんや。人にして儀なくんば、死せずして何をか爲む。

○鼠を相るに齒あり、人にして止なからんや。人にして止なくんば、死せずして何をか俟たむ。

○鼠を相るに體あり、人にして禮なからんや。人にして禮なくんば、胡ぞ遄に死せざる。

干旄

是れ衛の臣子が善道を好むを美めて作りし者也。

子子干旄。在澆之郊。素絲組之。良馬四之。彼姝者子。何以粦之。

子子干旄。在澆之都。素絲組之。良馬五之。彼姝者子。何以予之。子子干旄。在澆之城。素絲視之。良馬六之。彼姝者子。何以告之。

子子たる干旄、澆の郊に在り。素絲もて之を組し、良馬之を四つにす。彼の姝たる者は子、何を以て之に粦へん。

○子子たる干旄、澆の都に在り。素絲もて之を組し、良馬之を五つにす。彼の姝たる者は子、何を以て之に予へん。

○子子たる干旄、澆の城に在り。素絲もて之を視し、良馬之を六つにす。彼の姝たる者は子、何を以て之に告げん。

載馳

載馳載驅。歸  
暗衛侯。驅馬  
悠悠。言至於  
漕。大夫跋涉。  
我心則憂。

既不我嘉。不  
能旋反。視爾  
不臧。我思不  
遠。既不我嘉。  
不能旋濟。視  
爾不臧。我思  
不閔。

陟彼阿丘。言

是れ許の穆公の夫人が其宗國の顯慶をあらはれみ自ら教ふこと能はざるを傷めて作れる詩也

載馳載驅、歸つて衛侯を暗はん。馬を驅ること悠悠、言に漕に至らん。大夫跋涉す、我心則ち憂ふ。

● 馬を走らす也 ● 國を失ふ見舞をのぶること也 ● 至りて還きをいふ ● 衛の東邑の名 ● 草をよみて行くを跋といひ水をわたりにて行くを渉といふ、許の大夫等が大急ぎにやつて來て、我を引きとめんとするかと疑ふ也

○ 既に我を嘉せず、旋り反ること能はず。爾が臧せざるを視れども、我思ひ遠からず。既に我を嘉せず、旋り濟ること能はず。爾が臧せざるを視れども、我思不閔。

● 我が衛に反るを善事とせざることを ● 許人をさしていふ ● 隠は意の如しとあり思ひむすばれぬれざることを ● 我が思ふ所の自の止むること能はざるをいふ

○ 彼の阿丘に陟りて、言に其極を采る。女子善く懐ふも、亦各行あり。許人之

み尤むるは、衆穉にして且つ狂なればなり。

● かたさがりたる所をいふ ● 貝母といふ藥草にして氣鬱を治するもの也 ● 思ふこと多きをいふ ● 其思にものゝ筋みちあるをいふ ● 許國の衆が我をとがむるは年少くして未だ事に慣れず且つ狂妄にしてきつ分のなき故なりとの意

○ 我其野に行く、芄其麥あり。大邦に控ぐ、誰にか因り誰にか極らん、大

● 凌の茂れる貌 ● ひかへて之を告ぐる也 ● 小國既に頼むべからずたれたよりて大國に至らんかと思案する也 ● 大夫は前の跋涉の人也、君子は許國の衆人也 ● 我が自ら心を盡すの意に知らずとの意

鄘國十篇二十九章

衛一之五

淇奥

是れ衛人が武公の徳を美めて作りし詩也

言采其蕪。女  
子善懷。亦各  
有行。許人尤  
之。衆穉且狂。

我行其野。芄  
芄其麥。控于  
大邦。誰因誰  
極。大夫君子。  
無我有尤。百  
爾所思。不如  
我所之。

瞻彼淇奥。綠竹猗猗。有匪君子。如切如磋。如琢如磨。瑟兮僩兮。赫兮咺兮。有匪君子。終不可諼兮。

瞻彼淇奥。綠竹青靑。有匪君子。充耳琇瑩。會弁如星。瑟兮僩兮。赫兮咺兮。有匪君子。終不可諼兮。

彼の淇の奥を瞻れば、綠竹猗猗たり。匪たる君子あり、切るが如く、磋るが如く、琢つが如く、磨くが如し。瑟たり僩たり、赫たり咺たり。匪たる君子あり、終に諼る可からず。

● 淇水のくまをいふ、奥は淇と同じ ● なより、とうるはしく茂れる様をいふ ● 斐に潤ず、いろあやの明にあらはれたる貌 ● 成徳の人 ● 骨角を治むるものが刀斧を以て之を切り鑿を以て之を瑤ること ● 玉石を治むる者が礎や鑿を以て之を琢ち沙石を以て之を磨くこと、琢磨の一步一步より進むをいふ ● つままやかにして少しもそらげなれぬ貌 ● もごもかにして少しもたゆまざる貌 ● 氣象のみちて盛なる貌 ● 威光のてりあはるゝ貌 ● 我心に慕ふ所ありて到底忘られざる也

○彼の淇の奥を瞻れば、綠竹青靑たり。匪たる君子あり、充耳琇瑩す、會弁星の如し。瑟たり僩たり、赫たり咺たり。匪たる君子あり、終に諼る可からず。

● 冠のみ、がね也 ● 玉に似たる美しき石也、之を以てみ、がねとす ● 冠の名、鹿の皮六片を帽の如く縫ひ合せ其の縫目に飾の玉をつく。是がかゞやいて星の如く見ゆると也

○彼の淇の奥を瞻れば、綠竹簞の如し。匪たる君子あり、金の如く錫の如く、

珪の如く璧の如し。寛たり綽たり、猗重較よ。善く戲謔すれども、虐を爲さず。

● 隙間なき程しげり合ふをいふ ● 金や錫(すず)の練りきたへるを以て、君子の徳の精しく純なるにたとふ ● 珪も璧も符瑞の玉器として王侯以下の執りて信とするもの也、そのうつしくなだらかなるを以て君子の質のただやかにうるはしきにたとふ ● ひるく、ゆるやかなる貌 ● ひらけて大なる貌 ● 戲詞 ● 卿士の乗る車を指す、ありこの重較の車にのる人よと欽美する也 ● をかしき事をいふこと ● 善き程にちどけて理をそこなひ事をやぶるに至らざるをいふ

考槃

是れ詩人が賢者の澗谷の間に隠れ絶えて戚戚の意なきを美めて作りし者也  
槃を考して澗に在り、碩人之れ寛なり。獨り寐ねて寤めて言ふ、永く矢うて諼れず。

● 槃の意、槃を成すとは隱居の室を作り成すを云ふ、槃を樂と解するもあり ● 山間に水の流るゝ谷を云ふ ● 心懐大いなる人にして胸中のひろきをいふ ● 自から此槃を忘れじと誓ふこと

竹如簞。有匪君子。如圭如璧。錫如圭如璧。寬兮綽兮。猗重較兮。善戲謔兮。不爲虐兮。

考槃在澗。碩人之寬。獨寐寤言。永矢弗諼。

考槃在阿。碩人之邁。獨寐寤歌。永矢弗過。

考槃在陸。碩人之軸。獨寐寤宿。永矢弗告。

碩人其頤。衣錦褰衣。齊侯之子。衛侯之妻。東宮之妹。邢侯之姨。譚公維私。

○槃を考して阿に在り、碩人之れ邁なり、獨り寐ねて寤めて歌ふ、永く矢うて過さず。

● 曲れるをかをいふ ● ひろく大なること ● 過分の睡を爲さずと自ら誓ふ也

○槃を考して陸に在り、碩人之れ軸なり、獨り寐ねて寤めて宿す、永く矢うて告げず。

● 地の高く平なる處をいふ ● 盤桓(たちもとほる)して行かざる意 ● 此槃を人に告げじと自ら誓ふ

碩人

是れ衛人、莊姜の美にして予無きをあはれかて作れる詩也

碩人其れ頤たり、錦を衣て褰衣す。齊侯の子、衛侯の妻、東宮の妹、邢侯の姨、譚公は維れ私なり。

● 大人なり莊姜を指す ● たけたかき貌 ● 錦の文、目立つ故にひとへの薄絹を上に施ふをいふ ● 太子居る所の宮をいふ、やがて太子の名稱となる即ち齊の太子得臣の事也 ● 妻の姉妹也 ● 姉妹の美也

手如柔荑。膚如凝脂。領如蝤蛴。齒如瓠犀。巧笑倩兮。美目盼兮。

○碩人敖敖。說于農郊。四牡有騶。朱幘鑿鑿。翟菲以朝。大夫夙退。無使君勞。

河水洋洋。北

○手は柔荑の如く、膚は凝脂の如く、領は蝤蛴の如く、齒は瓠犀の如し。巧笑倩たり、美目盼たり。

● 荑(つばな)の柔かなるが如きをいふ ● 脂(あぶら)のねりかたまれるが如く光澤あるをいふ ● 和名のむし又はきくちむしと訓ず、長く白い物也、首の下の長く白きに譬ふ ● ひまごうりのさなご也、齒の白くそらひたるをいふ ● 四月頃なく小蠅の如く額つきのよきをいふ ● かひこのかへりたる蠅の眉の如くはそくして曲れるを云ふ ● 笑顔のしほらしきをいふ ● またざしのあざやかなるをいふ

○碩人は敖敖たり、農郊に説れり。四牡驕たるあり、朱幘鑿鑿たり、翟菲して以て朝す。大夫夙に退き、君をして勞せ使むること無かれ。

● たけののびたる貌 ● 城下近くの郊外をいふ ● 車につけたるたぐましく四頭の駝馬 ● 朱幘を以てまきたるくつわ ● 色合の盛に燃えたつ様なるをいふ ● 雉の羽を以て飾とする車、夫人の乗用也、之にはるをかくるを菲といふ ● 莊姜の來り嫁して朝廷に入るをいふ ● 大夫夙く退くは君をして政事に勞せしむる所以なり、故に早く退いて君主と夫人と相親むの慶會を多からしめんとする也

○河水洋洋として、北に流れて活活たり。氓を施すこと濊濊として、鱣鮪發

流活活。施罝罝。發發。蘆蕩揭揭。庶姜孽孽。庶士有暵。

發たり。蘆蕩揭揭として、庶姜孽孽たり。庶士暵たることあり。

- 罝に大なる罝
- 流るゝ罝
- おみの事
- おみを打つ罝
- 罝も罝も川魚にして大なる罝
- たばたと跳び上る形容
- 腹はよしの事、莢はをぎの事
- アツと伸びて高くなれる形容
- 莊姜に従ひ來れる姫婦をいふ、庶は衆也
- さかんに飾れる形容
- 夫人につき來れる諸臣をいふ
- さぐれてたけだけしきをいふ

氓

是れ衛人其の當時の風俗を刺りて作れる者也

氓之蚩蚩。抱布貿絲。匪來貿絲。來即我謀。送子涉淇。至于頓丘。匪我愆期。子無良媒。將子無怒。秋以為期。

氓の蚩蚩たる、布を抱きて絲を貿ふ。來つて絲を貿ふに匪ず、來つて我に即いて謀るなり。子を送つて淇を涉り、頓丘に至る。我期を愆つに匪ず、子良媒なし、將はくは子怒ること無かれ、秋以て期と爲す。

- 何處のものとも分らず他國より入り來れる人民をいふ
- 無智なる貌
- 錢の事也
- 生絲を賣ひに來る也
- 穀のむすびを謀らんとて我が許に來りしと也
- 水の名
- 地名
- 夫婦の體を成す時期をいふ

乘彼坳垣。以望復關。不見復關。泣涕漣漣。既見復關。載笑載言。爾卜爾筮。體無咎言。以爾車來。以我賄遷。

○彼の坳垣に乗つて、以て復關を望む。復關を見ざれば、泣涕漣漣たり。既に復關を見れば、載ち笑ひ載ち言ふ。爾の卜爾の筮、體に咎言なくば、爾の車を以て來れ、我が賄を以て遷らん。

- くづれたるついで垣をいふ
- 男子の居る所也
- なみたが絶えず流るゝ様をいふ
- 龜をよきてうちなふをいふ
- 著(めどき)をもつてうちなふを云ふ
- 龜著のうらかたをいふ
- とがめの詞也、とがめの詞なしとは吉とか大吉とかのうらかたを得たるをいふ
- 財產即ち嫁入道具をいふ

桑之未落。其葉沃若。于嗟鳩兮。無食桑葚。于嗟女兮。無與士耽。士之耽兮。猶可說也。女之耽兮。不可說也。桑之落矣。其

○桑の未だ落ちざる、其葉沃若たり。于嗟鳩や、桑葚を食ふこと無かれ。于嗟女や、士と耽ること無かれ。士の耽るは、猶ほ説くべし。女の耽るは、説く可からず。

- 仲秋の頃のけしき也
- うるはしき貌
- 鳩鳩の事即ちひよどり也
- 桑の實也
- 相愛むこと
- 説は解なり

○桑の落つるとき、其れ黄にして隕つ。我、爾に徂きしより、三歲食貧しかり

黃而隕。自我  
徂爾。三歲食  
貧。淇水湯湯。  
漸車帷裳。女  
也不爽。士貳  
其行。士也罔  
極。二三其德。

三歲爲婦。靡  
室勞矣。夙興  
夜寐。靡有朝  
矣。言既遂矣。  
至子暴矣。兄  
弟不知。嗟其  
笑矣。靜言思  
之。躬自悼矣。  
及爾偕老。老  
使我怨。淇則  
有岸。隕則有

き。淇水湯湯として、車の帷裳を漸す。女や爽はず、士、其行を貳つにす。

● 黄色に色づいて後に落つとは色の衰へたるに比する也 ● 水のさかんなる貌 ● 車のしたすだけ也 ● 女は一心に約束を變へざるをいふ ● 男子の態度は際限なきをいふ ● 舊人を捨て新人を愛するなど其徳行の恃むべからざるをいふ

○三歳婦と爲つて、室勞靡かりしも、夙に興き夜に寐ねて、朝有ると靡かりき。言既に遂けて、暴に至る。兄弟知らず、嗟として其れ笑ふ。靜に言に之を思つて、躬自ら悼めり。

● 家庭の苦勞をいふ ● 一朝のいとまなかりきとの意 ● 我は彼のいひし通りに成し遂ぐるを云ふ ● 彼は情なく、手あらく我にあらざるをいふ ● 笑ふ貌、我が歸り來れる理由を知らずして兄弟に笑はるゝをいふ

○爾と偕に老いとせしに、老いて我をして怨ましむ。淇には則ち岸あり、隕には則ち岸あり。總角の宴、言笑晏晏たり。信誓旦旦にして、其反るを思はず。

反るを是れ思はず。亦已んぬる哉。

● 深(さほ)也 ● 匪(きし)也 ● ふげまき結び也、まだをとめの時をいふ ● 物やはらかに何心もなく言笑の樂しかりしをいふ ● 末かけて變らじと互に信を取り誓をなしたること明白なりとの意 ● 其反覆して今日り如くならんとは思ひ設けざりしとの意也 ● 復た之を如何ともすべからずとの意

竹竿

是れ衛女、諷候に聲して歸寧するを得ず、其思を述べたる者也

籊籊竹竿、以て淇に釣る。豈に爾を思はざらんや、遠くして之を致すと莫し。

● ながくして末の細りたる貌 ● 衛に歸るの意を含む

○泉源左に在り、淇水右に在り、女子行あり。父母兄弟に遠かる。

● 即ち百泉の事にして衛の西北に在り ● 泉源淇水は左右にあれども我はかたへに歸ることを得ずの意

淇。總角之宴。  
言笑晏晏。信  
誓且且。不思  
其反。反是不  
思。亦已焉哉。

籊籊竹竿。以  
釣于淇。豈不  
爾思。遠莫致  
之。

泉源在左。淇  
水在右。女子  
有行。遠父母  
兄弟。



淇水在右。泉源在左。巧笑之瑳。佩玉之儺。

淇水濛濛。楫楫舟。駕言出遊。以寫我憂。

芄蘭之支。童子佩之。雖則佩之。能不我知。容兮遂兮。垂帶悸兮。

○淇水右に在り、泉源左に在り。巧笑之れ瑳たり、佩玉之れ儺たり。

● 白色のちぎやかなるをいふ、笑ふ口もとに白い歯の見ゆること ● 玉をくさりて腰の兩側に垂れて飾とす、行歩につれて玉の鳴ること ● 玉をくさりて腰の兩側に垂れて飾とす

○淇水濛濛として、楫楫松舟あり。駕して言に出遊し、以て我憂を寫はん。

● ながる、貌 ● ひのきのかざ ● はらひ除くこと

芄蘭

是れ衛の惠公を刺りて作れる也。或は云ふ、是れ童子の等を諷ゆるを刺れる者なりと

芄蘭の支ある、童子艦を佩ぶ。則ち艦を佩ぶと雖も、能く我を知らず。容たり遂たり、帯を垂れて悸たり。

● 和名カマクミと訓ず、俗にかまいもといふ ● 形を角の如く象牙にて作り物の結びを解くもの也、佩を帯ぶるは成人の事也、今童子にして之を佩びるは芄蘭の弱き草なるに其枝のながく葉の茂れることの似合はしからざるに比する也 ● ゆるやかにほしいま、なる貌なり ● 同上 ● 大帯なり ● 大帯の垂れ下る様にて大人びることといふ

芄蘭之葉。童子佩之。雖則佩之。能不我知。容兮遂兮。垂帶悸兮。

○芄蘭の葉ある、童子艦を佩ぶ。則ち艦を佩ぶと雖も、能く我に甲たらず。容たり遂たり、帯を垂れて悸たり。

● すがけ也 ● 押と同じくなる、と説く人もあれど、甲は人に長ずるの意味にて其才能の我にまさるざるをいふ

河廣

是れ宋の襄公の母、衛に歸り、思うて止まらず自ら作りし詩也

誰か河を廣しと謂ふ、一葦之を杭せん。誰か宋を遠しと謂ふ、跋てば予之を望まん。

● 一本の葦をいふ、後には小舟の義に轉用セリ ● わたること、其狭きをいふ也 ● 園の名 ● 足をつまむこと、其近きをいふ也

○誰か河を廣しと謂ふ、會て刀を容れず。誰か宋を遠しと謂ふ、會て朝を崇へず。

● 小船の事、亦其狭きをいふ也 ● 朝食前に間に合ふこと、亦其近きをいふ也

誰謂河廣。一葦杭之。誰謂宋遠。跋予望之。

伯兮

是れ亦時を判りて作りし詩也

伯兮 芻芻たり、邦の桀たり、伯や安を執つて、王の爲に前驅す。

● 婦人其夫を目するの辭 ● たけくいさめる、機をいふ ● 才人にする、を桀といふ即ち一國の傑物也 ● 是こなり、竹を削りて八角につかね長さ一丈二尺にして人を打つもの也刃なし ● さきがけを務むること

○伯の東せしより、首、飛蓬の如し。豈に膏沐無からんや、誰を適としてか容を爲さん。

● 頭髮がよもぎの花の如く風に吹き散らさるゝが如く亂るゝをいふ ● 膏はあぶら髪につけてつやを作ること、沐は髪を洗ひて垢を落とすこと ● 誰を相手として化粧を爲さんとの意

○其れ雨ふらん其れ雨ふらん、杲杲たる出日あり。願うて言に伯を思ふ、首の疾

伯兮 芻芻。邦之桀兮。伯也。執安。爲王前驅。自伯之東。首如飛蓬。豈無膏沐。誰適爲容。其雨其雨。杲杲。

に甘心す。

● 人はそれ雨ふらんといへるに裏切りて日出て明なるをいふ ● かしら首のいたむ疾にかゝるとも之に甘心せんとの意、甘心とは満足すること

○焉んぞ諛草を得て、言に之を背に樹るん。願うて言に伯を思ひ、我心をして瘳ましむ。

● わすれ草也 ● 北うちのがしき即ち北堂也 ● 憂苦しめて心の疾を得るは思ふの甚しきを見る也

有狐

是れ亦時を判りて作りし詩也

有狐 綏綏として、彼の淇の梁に在り。心の憂あり、之子裳無し。

● 獨行して西側を求むる貌 ● 淇水の上に架したる石橋をいふ、或は橋と同義として淇水にかけたるやなと説く亦通ず ● 裳は衣の配なり、裳なきの男を見て之が爲に裳を作らんといへば女之が配たらんとする意明白也

杲出日。願言思伯。甘心首疾。焉得諛草。言樹之背。願言思伯。使我心瘳。有狐綏綏。在彼淇梁。心之憂矣。之子無裳。

有狐綏綏。在彼淇側。心之憂矣。之子無帶。

○狐あり綏綏として、彼の淇の厲に在り。心の憂あり、之子帶無し。  
●水の深く渉るべき處なり ●帶は百物をしむるもの也、以て其配なきを稱ふ  
○狐あり浚浚として、彼の淇の側に在り、心の憂あり、之子服無し。  
●衣服なきは家室なきに喩ふ、家室は即ち配也

木瓜

齊の桓公を美するの詩也

投我以木瓜。報之以瓊瑤。匪報也。永以為好也。

我に投ずるに木瓜を以てせば、之に報ずるに瓊瑤を以てせん。報ずるに匪ず、永く以て好と爲さん。  
●むけの事 ●瓊はうつくしき玉なり、瑤は偏びもの玉の名なり ●永く以て相愛のしるしとして忘れざるのみの意  
○我に投ずるに木瓜を以てせば、之に報ずるに瓊瑤を以てせん。報ゆるに匪ず、

報之以瓊瑤。匪報也。永以為好也。

永く以て好と爲さん。

●もの事 ●瑤も亦美玉也

投我以木李。報之以瓊玖。匪以報也。永為好也。

○我に投ずるに木李を以てせば、之に報ずるに瓊玖を以てせん。報ゆるに匪ず、永く以て好と爲さん。  
●すもの事 ●玖は玉の名、説文には黒き玉なりとあり

衛國十篇三十四章

王之一之六

王國なり東周の畿内四方六百里の地をいふ

黍離

是れ宗廟を闕んで作りし詩也

彼黍離離。彼稷之苗。行邁

彼の黍の離離たる、彼の稷の苗ある、行き邁くこと靡靡として、中心搖搖た

靡靡。中心搖搖。知我者。謂我心憂。不知我者。謂我何求。悠悠蒼天。此何人哉。

り。我を知る者は、我心憂ふと謂ひ、我を知らざる者は我何をか求むと謂ふ。悠悠たる蒼天、此れ何人ぞや。

彼黍離離。彼稷之穗。行邁靡靡。中心如醉。知我者。謂我心憂。不知我者。謂我何求。悠悠蒼天。此何人哉。

○彼の黍の離離たる、彼の稷の穂の穂のる、行き邁くこと靡靡として、中心酔へるが如し。我を知る者は、我心憂ふと謂ひ、我を知らざる者は、我何をか求むと謂ふ。悠悠たる蒼天、此れ何人ぞや。

彼黍離離。彼稷之實。行邁靡靡。中心如噎。知我者。謂我心憂。不知我者。謂我何求。悠悠蒼天。此何人哉。

○彼の黍の離離たる、彼の稷の實ある、行き邁くこと靡靡として、中心噎ぶが如し。我を知るものは、我心憂ふと謂ひ、我を知らざるものは、我何をか求むと謂ふ。悠悠たる蒼天、此れ何人ぞや。

我者。謂我何求。悠悠蒼天。此何人哉。

君子于役

是れ平王を刺りて作りし者也

君子于役。不其期。曷至哉。雞棲于埘。日之夕矣。羊牛下來。君子于役。如之何勿思。

君子于役。不其期。曷至哉。雞棲于埘。日之夕矣。羊牛下來。君子于役。如之何勿思。

○君子于いて役す、日ならず月ならず、曷か其れ休ふことあらん。雞埘に棲む。日の夕、牛羊下り括る。君子于いて役す、苟も飢渴すること無けん。

● 雞日撫月と月日を以て計算すべからざるをいふ ● 來り會すること ● 枝(くひ)木にかけたる鳥小屋也

飢渴。

君子陽陽

是れ征戌の人が周の平王を怨みて作りし詩也

君子陽陽として、左に簧を執り、右に我を招いて房に由ふ、其れ樂しまん。

● 志を得て思ひあがりたる貌 ● 舌のある節也 ● つばねの事、部屋なり

○君子陶陶として、左に翮を執り、右に我を招いて敷に由ふ、其れ樂まん。

● 和ぎ樂める貌 ● 舞の羽也、これをとりて舞ふ ● 舞人の立ならぶ場所也、こゝにつれて来るといふ

揚之水

是れ亦周の平王を刺りし詩也

○揚たる之の水、東薪を流さず。彼の其之子、我と申を戌せず。懷ふ哉懷ふ哉、曷の月か予還り歸らん哉。

君子陽陽。左執簧。右招我由房。其樂只且。君子陶陶。左執翮。右招我由敷。其樂只且。揚之水。不流東薪。彼其之子。不與我戌。懷哉懷哉。曷月予還歸哉。

● 水のゆるく流るゝ貌 ● 東れたる薪だにも流しやらずとの意 ● 夫、其妻をさしていふ ● 平王の母方の本國の名 ● 軍兵を以て其地を守ること ● 思ひ出てくる、かなと再び重ぬるは其意の深きを見る也

○揚たる之の水、東楚を流さず。彼の其之子、我と市を戌せず。懷ふ哉懷ふ哉、曷の月か予還り歸らん哉。

● 東れたる恒木の薪(楚)だに流しやらずとの意 ● 國の名、申に近き所也

○揚たる之の水、東蒲を流さず。彼の其之子、我と許を戌せず。懷ふ哉懷ふ哉、曷の月か予還り歸らん哉。

● 東れたるかはやなぎだにも流しやらずとの意 ● 國の名

中谷

是れ周の四年饑饉相つぎ室家相すつるをあらはれて作りし詩也

中谷有蕓あり、嘆として其れ乾きぬ。女あり佻離し、嘒として其れ嘆く、嘒と

中谷有蕓。嘆其乾矣。有女佻離。嘒嘒其嘆。中谷有蕓。嘆其乾矣。有女佻離。嘒嘒其嘆。中谷有蕓。嘆其乾矣。有女佻離。嘒嘒其嘆。

仇離。嘒其嘆矣。嘒其嘆矣。遇人之艱難矣。

中谷有蕓。嘆其脩矣。有女仇離。條其歡矣。條其歡矣。遇人之不淑矣。

して其れ嘆くは、人の艱難に遇へばなり。

- 谷中なり
- 益母草のこと、和名めはじきと訓ず
- 蕓なり、かわくと訓ず
- 別る、也
- 條、歡の聲
- 窮后なり

○中谷に蕓あり、嘆として其れ脩し。女あり仇離し、條として其れ歡く。條として其れ歡くは、人の不淑に遇へばなり。

- 一説に脩も亦乾なりとあり
- 嘒く貌
- 口をつぼめて聲を出すこと
- よからぬこと、即ち艱難をいふ

○中谷に蕓あり、嘆として其れ濕ふ。女あり仇離し、嘒として其れ泣く。嘒として其れ泣く、何ぞ嗟くとも及ばん。

- 泣く貌、聲を吞みて涙を流す也

兔、爰

是れ周室衰微し諸侯背叛し、君子其生を樂しまずして作れる詩也

有兔爰爰。雉離于羅。我生之初。尙無爲。我生之後。逢此百罹。尙寐無吡。

有兔爰爰。雉離于罌。我生之初。尙無造。我生之後。逢此百憂。尙寐無覺。

有兔爰爰。雉離于罌。我生之初。尙無庸。我生之後。逢此百凶。尙寐無聽。

兔あり爰爰たり、雉羅に離れり。我生の初めは、尙ほ爲ること無かりき。我生の後に、此の百罹に逢ふ。尙ほはくは寐ねて吡くこと無からん。

- うさぎの事
- ゆるやかなる意なり
- 無事にして安樂なりしをいふ
- 此の種々の艱難にあへるをいふ
- ねたるまゝ、動くことなしに死なんと意

○兔あり爰爰たり、雉、罌に離れり。我生の初めは、尙ほ造すこと無かりき。我生の後に、此の百憂に逢ふ。尙ほはくは寐ねて覺ること無からん。

- 車の輻の如くなる者の中に網をかけ、鳥兔をかぶせとるもの也
- 無爲と同じ
- 睡りしまゝ、目をさまさずして死なんと意

○兔あり爰爰たり、雉、罌に離れり。我生の初めは、尙ほ庸ふること無かりき。我生の後に、此の百凶に逢ふ。尙ほはくは寐ねて聴くこと無からん。

- 學の類也
- 力を用ひて爲すことなかりしを云ふ
- 睡りしまゝ、物音を聞かざして死なんと意

葛藟

是れ周の平王を刺りて作れる詩也

縣葛藟。在河之漘。終遠兄弟。謂他人父。亦莫我顧。

縣縣たる葛藟、河の漘に在り。終に兄弟に遠かる、他人を父と謂ふ。他人を父と謂へども、亦我を顧みること莫し。

● 長くして絶えざる貌 ● くずかづち也 ● 岸なり ● 族類にはなること ● 目をかけてねんごるに世話すること

○ 縣縣たる葛藟、河の漘に在り。終に兄弟に遠かり、他人を母と謂ふ。他人を母と謂へども、亦我を有りとする事莫し。

● 我を有りとも思はて、有るか無きかの待遇すること

○ 縣縣たる葛藟、河の漘に在り。終に兄弟に遠かり、他人を昆と謂ふ。他人を昆と謂へども、我に聞ゆること莫し。

縣縣葛藟。在河之漘。終遠兄弟。謂他人母。亦莫我有。縣縣葛藟。在河之漘。終遠兄弟。謂他人昆。亦莫我聞。

采芣

● 河の岸の上平にして下を水のあらひながす所をいふ ● 兄のこと ● 我に言づることなきをいふ

彼芣采芣。一日不見。如三月兮。

● くづ也 ● 思念することの深き未だ久しからずして甚だ久しきが如く感ぜらるるをいふ

○ 彼に藟を采る、一日見ざれば、三秋の如し。

● 上もぎと訓ず、香ある草なり ● 秋三ヶ月を三つ重ねて九ヶ月とす、其思念するの深き又一層を加へたり

○ 彼に艾を采る、一日見ざれば、三歳の如し。

● もぐさと訓ず、かわかして灸するもの也 ● 三ヶ年也、思念の深き三月、三秋の及ぶ所に非ざるを見せ也

大車

是れ周の大夫を刺りて作りし詩也

昆。謂他人昆。亦莫我聞。彼采芣兮。一日不見。如三月兮。彼采艾兮。一日不見。如三歲兮。

大車轆轤。豈不  
衣如蒺藜。豈不  
爾思。畏子不  
敢。

大車噉噉。露  
衣如瑤。豈不  
爾思。畏子不  
奔。  
穀則異室。死  
則同穴。謂予  
不信。有如皦  
日。

大車轆轤として、露衣蒺藜の如し。豈に爾を思はざらんや、子を畏れて敢へてせず。

① 大夫の乗る黒轆の車なり ② 車の行く聲なり ③ 大夫の著る露葉の服也 ④ あし的事 ⑤ 其私する所の人をいふ ⑥ 大夫を指す ⑦ 敢へて走らざるをいふ

○大車噉噉として露衣瑤の如し。豈に爾を思はざらんや、子を畏れて奔らず。

① 車のおもくしてかき鏡 ② 赤き玉也

○穀きては則ち室を異にすれども、死しては則ち穴を同じうせん。予を信ならずと謂はば、皦日の如きことあらん。

① 生きて室を同じうするを得ずとも同 ② 子を信すならずと疑ふならばの意 ③ 日をかけて露を立つる詞 ④ 皦日を以て證明する也、日の如く明白なりとの意

丘中有麻

是れ莊王之不明にして賢人を放逐するを思ひて作りし詩也

丘中有麻。彼  
留子嗟。將其  
來施施。

丘中有麥。彼  
留子國。將其  
來食。  
丘中有李。彼  
留之子。貽我  
玖。

丘中に麻あり、彼子嗟を留む。彼の留れる子嗟、將はくは其れ來ること施施たらん。

① 彼は女子を指す、麻の中に女ありて子嗟を留めおこならん ② 一説に留子嗟として留を地名と爲す、子嗟は男子の字也 ③ ゆるく歩む貌、又よるこぶ貌とあり

○丘中に麥あり、彼子國を留む。彼の留れる子國、將はくは其れ來り食へ。

① 男子の字也

○丘中に李あり、彼之子を留む。彼の留れる之子、我に佩玖を貽れ。

① 前の子を指す ② 佩玉なり

王國十篇二十八章

鄭一之七

鄭はもと西周の畿内の一邑なり、宣王、其弟友の領地と爲す、後以畿、鎡の地を得て其封を移す、而して舊號をそのみ、新地に附す是れ新鄭と爲す



緇衣

是れ鄭の武公父子の並びに周の司徒となりて、其職を善くせしを美めて作りし者也

緇衣の宜しき、敝れなば予又改め爲らん。子の館に適き、還らば予子の榮を授けん。

● 黒色の衣、卿大夫、私朝に居るとき服する所也 ● 似合へること ● 宿舎なり ● 養なり、或は曰く、粟のしちげたるものと

○ 緇衣の好き、敝れなば予又改め造らん。子の館に適き、還らば予子の榮を授けん。

● 前節と殆んど同詞を繰返せるものなり、語句重ね註せず

緇衣之宜兮。敝予又改爲兮。適予之館兮。還予授予之榮兮。

○ 緇衣の宜なる、敝れなば予又改め作らん。子の館に適き、還らば予子の榮を授けん。

授けん。

● 大なり、程子は、鄭に安舒の義ありと曰へり

將仲子

是れ鄭の莊公が其母に勝へず、以て其弟を害せしを刺りたるもの也。或は云ふ、此れ淫奔者の辭なりと

將仲子よ、我里を踰ゆること無かれ、我樹杞を折ること無かれ。豈に敢へて之を愛まんや、我父母を畏る。仲も懐ふ可きなり、父母の言も、亦畏る可き也。

● 男子の字也 ● 二十五家を里と爲す、里のかこひをこゆるをいふ ● 樹の類、里のかこひにうゑたる木也 ● 我が父母の知らんことと畏ると也 ● なつかしく思ふをいふ

○ 將仲子よ、我牆を踰ゆること無かれ。我樹桑を折ること無かれ。豈に敢へて之を愛まんや、我諸兄を畏る。仲も懐ふ可き也。諸兄の言も、亦畏る可き也。

● ついぢがき也 ● かきねに樹えたる桑の木也

敝予又改作兮。適予之館兮。還予授予之榮兮。

將仲子兮。無踰我里。無折我樹杞。豈敢愛之。畏我父母。仲可懷也。父母之言。亦可畏也。將仲子兮。無踰我牆。無折我樹桑。豈敢愛之。畏我諸兄。仲可懷也。諸兄之言。亦可

可長也。將仲子兮。無踰我園。無折我樹檀。豈敢愛之。畏人之多言。仲可懷也。人之多言。亦可畏也。

叔于田。巷無居人。豈無居人。不如叔也。洵美且仁。

叔于狩。巷無飲酒。豈無飲酒。不如叔也。洵美且武。

○將ふ仲子よ、我園を踰ゆること無かれ、我樹檀を折ること無かれ。豈に敢へて之を愛まんや、人の多言を畏る。仲も懐ふ可き也、人の多言も、亦畏る可き也。

●園中にうゑたるまゆみの木也 ●世間の人のとやかくと批評するを畏ると也

叔于田

是れ鄭の莊公を刺りて作れる者也。或は云ふ、此亦民間の男女相悦ぶの詞なりと

叔于田に于く、巷に居人無し。豈に居人無からんや、叔が洵に美にして且つ仁なるに如かず。

●莊公の弟、共叔段の事也 ●里のこうご也 ●居る人なきが如しの意 ●かたち、ありさまの美しきをいふ ●情の深きをいふ

○叔狩に于く、巷に飲酒無し。豈に飲酒無からんや、叔が洵に美にして且つ好きに如かず。

洵美且好。

叔適野。巷無服馬。豈無服馬。不如叔也。洵美且武。

叔于田。乘二馬。執轡如組。兩驂如舞。叔在藪。火烈具舉。擅揚暴虎。獻于公所。將叛無狃。戒其傷女。

○叔野に適く、巷に服馬無し。豈に服馬無からんや、叔が洵に美にして且つ武なるに如かず。

●出遊すること ●往來に馬に乗るもの一人もなきが如しの意 ●たけなしく勇ましきをいふ

大叔于田

是れ亦莊公を刺りて作れる詩也

叔于田に于く、乘馬に乗る。轡を執ること組の如く、兩驂舞ふが如し。叔、藪に在り、火烈具に擧がる。擅揚して虎を暴にし、公の所に獻る。將ふ叔よ、狂ふこと無かれ、其の女を傷はんことを戒む。

●禽を得んために出かくるをいふ ●組糸をとる様に上手なるをいふ ●轡をさしはさみて衝く(びき)にかけたる二馬をいふ ●ほどひやうしにあたること、馬を御するの巧なるをいふ ●深なり狩場也 ●やきがりに行人のもてる火の手が一時にあがること ●はだぬぐこと ●かゝる荒業になることなかれの意

叔子<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>乘<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>黃<sub>二</sub>兩服上襄<sub>一</sub>兩驂<sub>レ</sub>鷹行<sub>レ</sub>叔在<sub>レ</sub>藪<sub>レ</sub>火烈具揚<sub>レ</sub>叔善<sub>レ</sub>射忌又良<sub>レ</sub>御忌<sub>レ</sub>抑擊控忌<sub>レ</sub>抑縱送忌<sub>レ</sub>叔子<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>乘<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>鴉<sub>二</sub>兩服齊<sub>一</sub>首兩驂<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>叔在<sub>レ</sub>藪<sub>レ</sub>火烈具阜<sub>レ</sub>叔馬<sub>レ</sub>慢忌<sub>レ</sub>叔發<sub>レ</sub>罕忌<sub>レ</sub>抑釋<sub>レ</sub>柵忌<sub>レ</sub>抑豐弓忌<sub>レ</sub>

○叔<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>く、乘<sub>レ</sub>黃<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>る、兩<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>襄<sub>レ</sub>に、兩<sub>レ</sub>驂<sub>レ</sub>鷹<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>す。叔<sub>レ</sub>藪<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>り、火<sub>レ</sub>烈<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>揚<sub>レ</sub>がる。叔<sub>レ</sub>射<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>くし、又<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>くす。抑<sub>レ</sub>擊<sub>レ</sub>控<sub>レ</sub>し、抑<sub>レ</sub>縱<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>す。

① 四馬を乗と爲す、其色皆黃なり ② 中央につくる二匹の服馬也 ③ 乘馬中の最良をいふ ④ 二匹のそへ馬をいふ ⑤ 駟馬よりは少し後比下ること蹄雁の列の如くなるをいふ ⑥ 馬を御するに上手なるをいふ ⑦ 馬をかけたたり、とめたりすること ⑧ 矢放ち弓強くこと

○叔<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>く、乘<sub>レ</sub>鴉<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>る。兩<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>首<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>齊<sub>レ</sub>しうし、兩<sub>レ</sub>驂<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>し。叔<sub>レ</sub>藪<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>り、火<sub>レ</sub>烈<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>阜<sub>レ</sub>なり。叔<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>慢<sub>レ</sub>なり、叔<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>する<sub>レ</sub>罕<sub>レ</sub>なり。抑<sub>レ</sub>釋<sub>レ</sub>柵<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>釋<sub>レ</sub>き、抑<sub>レ</sub>豐<sub>レ</sub>弓<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>豐<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>す。

① 黑白交りたる鬃毛の馬四頭をいふ ② 二匹善くならぶと ③ 左右の手の如く相助くること ④ おそきこと ⑤ たまに矢を放つこと ⑥ ヤブ、の藪也 ⑦ 事畢りて弓を懸に入る、を云ふ、其從容としてゆつたりあちつきたるを狀する也

清人

是れ鄭の文公、高克を罷み、之をして狄を河上に禦がしむ。久しくして召まざり、師散じて歸りしかば、鄭人之が爲に此詩を賦したる也

清人在<sub>レ</sub>彭<sub>レ</sub>翮介<sub>レ</sub>旁<sub>レ</sub>旁<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>矛重<sub>レ</sub>英<sub>レ</sub>河<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>乎翮<sub>レ</sub>翔<sub>レ</sub>清人在<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>駟介<sub>レ</sub>廐<sub>レ</sub>廐<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>矛重<sub>レ</sub>喬<sub>レ</sub>河<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>乎逍<sub>レ</sub>遙<sub>レ</sub>清人在<sub>レ</sub>軸<sub>レ</sub>駟介<sub>レ</sub>陶<sub>レ</sub>陶<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>旋右<sub>レ</sub>抽<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>軍<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>

羔裘如<sub>レ</sub>濡<sub>レ</sub>洵直<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>侯<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>之子<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>

○清人<sub>レ</sub>彭<sub>レ</sub>翮<sub>レ</sub>介<sub>レ</sub>旁<sub>レ</sub>旁<sub>レ</sub>たり。二<sub>レ</sub>矛<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>英<sub>レ</sub>し、河<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>翮<sub>レ</sub>翔<sub>レ</sub>す。

○清人<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>駟<sub>レ</sub>介<sub>レ</sub>廐<sub>レ</sub>廐<sub>レ</sub>たり。二<sub>レ</sub>矛<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>喬<sub>レ</sub>し、河<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>逍<sub>レ</sub>遙<sub>レ</sub>す。

○清人<sub>レ</sub>軸<sub>レ</sub>駟<sub>レ</sub>介<sub>レ</sub>陶<sub>レ</sub>陶<sub>レ</sub>たり。左<sub>レ</sub>旋<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>抽<sub>レ</sub>し、中<sub>レ</sub>軍<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>す。

○羔裘<sub>レ</sub>濡<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>く、洵<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>直<sub>レ</sub>にして<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>侯<sub>レ</sub>なり。彼<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>、命<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>きて<sub>レ</sub>渝<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ず。

① 鄭國邑の名、其地の人をいふ ② 黄河の邊にて鄭と衛と二國の界にある地名 ③ 四馬なり ④ 駟驅して息まざる貌 ⑤ 會矛と男となり ⑥ 朱羽を以て飾とするを英と爲す其重疊して見ゆるを云ふ ⑦ 遊戯する貌 ⑧ 河の上の地名 ⑨ たげんしき形容 ⑩ 矛のえだの曲りたるをいふ ⑪ 遊戯する貌 ⑫ 清人軸に在り、駟介陶陶たり。左旋右抽し、中軍好を作す。 ⑬ 河上の地名 ⑭ 樂して心のまゝなるをいふ ⑮ 左にめぐらし右にぬき出ること ⑯ 車のまん中に居る大將軍也 ⑰ 威儀をかきつくるよこと

羔裘

是れ鄭の朝延を判りて作りし者也。或は云ふ、此れ大夫其人を美むるの詩なりと

塗。  
 羔裘豹飾。孔武有力。彼其之子。邦之司直。羔裘晏兮。三英粲兮。彼其之子。邦之彥兮。

遵大路兮。摻執子之手兮。無我惡兮。不寔故也。

● ひつじの皮衣也、大夫の服をいふ ● つま、かにぬれてうるはへるが如くなるをいふ ● 國なり、なびきしたがふこと ● 美なり、うつくしきこと ● 大夫を指す ● 天命の理に身をまかすこと  
 ○ 羔裘豹の飾あり、孔だ武にして力あり。彼其之子、邦の司直なり。  
 ● 直きを司るといふ意にて一國の直道、此人によりて立つをいふ

○ 羔裘晏たり、三英粲たり。彼其之子、邦の彥なり。

● あざやかなる貌 ● 三つのかざり ● 光明あるをいふ ● 美士なり、うるはしくすぐれたるをいふ

遵大路

是れ朝廷に君子なきを悼み之を思慕して作りし書也。或は云ふ、此れ亦男女相悦ぶの詞なりと

○ 大路上に遶ひ、子の袂を摻り執る。我を惡むこと無かれ、故を寔にせざれば也。

● 大道なり ● 私する所の男子を指す ● つかまへて引つばること ● ふるきなきは情に絶たざればなりと也

遵大路兮。摻執子之手兮。無我醜兮。不寔好也。

○ 大路上に遶ひ、子の手を摻り執る。我を醜むこと無かれ、好を寔にせざれば也。  
 ● ふるきよしみを寔に棄てざればなりの意

女曰雞鳴

是れ古義を陳べて以て今の徳を説ばずして色を好むを判れる書也。或は云ふ、此れ時の詩人が賢夫婦相愛むるの詞を述ぶる書也と

女曰く、雞鳴と、士曰く、昧旦と。子興きて夜を視よ、明星爛たる有らん。將た翔し將た翔し、鳧と鴈とを弋せん。

● 一番朝の時刻 ● 夜明けの時刻 ● 夜の時刻を見よの意 ● きちめくこと ● とくかけり、ふるまひての意 ● かもとかりとをいぐるみにせよとなり

○ 弋して言に之に加てなば、子と之を宜にせん。宜して言に酒を飲み、子と偕に老いん。琴瑟神に在り、請好ならざること莫し。

女曰雞鳴。士曰昧旦。子興視夜。明星有爛。將翱將翔。弋鳧與鴈。弋言加之。與子偕飲。酒與子偕。

老。琴瑟在御。莫不靜好。

知子之來之。雜佩以贈之。知子之順之。雜佩以問之。知子之好之。雜佩以報之。

有女同車。顏如舜華。將翱將翔。佩玉瓊琚。彼美孟姜。洵美且都。

● 味つけて調理すること ● 侍御の義として身近くあることをいふ ● しづかにやはらがざることはいふ

○子の之を來すを知らば、雜佩以て之を贈らん。子の之に順なるを知らば、雜佩以て之を問せん。子の之を好するを知らば、雜佩以て之に報いん。

● 夫を指す ● 子の徳の感化よく他の賢者を此方に致せしを知らばの意 ● 玉佩なり ● いつくしむこと ● 存問の意 ● 同調を答すること

有女同車

是れ師の太子忽が齊女の賢なるを娶らざりしを刺れる詩也。或は云ふ、此亦淫奔の詩なり

女あり車を同じうす、顏舜華の如し。將翱將翔し、佩玉瓊琚あり。彼の美なる孟姜、洵に美しくして且つ都なり。

● 木槿(むくじ)の花をいふ ● 身の起居振舞のかるやかなるをいふ ● 玉なり ● 問難の意、しとやかなるをいふ

有女同行。如舜英。將翱將翔。佩玉將將。彼美孟姜。德音不忘。

山有扶蘇。隰有荷華。見子都。乃見狂且。山有橋松。隰有游龍。不見子充。乃見狡童。

○女あり行を同じうす、顏舜英の如し。將翱將翔し、佩玉將將たり。彼の美なる孟姜、德音忘れず。

● 舜花と同じ ● 佩玉のよれる音の形容 ● 徳行の馨香をいふ ● 後世に至るまで忘れざるをいふ

山有扶蘇

是れ太子忽を刺りたる詩にて、忽が美とする所の人實は善人に非ざるを述ぶ

山に扶蘇あり、隰に荷華あり。子都を見ず、乃ち狂を見る。

● 小木の名 ● 深なり ● 遠の花なり ● 世に隠れたる美男子なり

○山に橋松あり、隰に游龍あり。子充を見ず、乃ち狡童を見る。

● 橋は高と同じ高くそびえたる松の木をいふ ● 龍は草草、俗にいふけたて也、遊は遊戯なり、思ふまゝ、比枝葉ののびたる様をいふ ● 美男子の名なるべし、其傳記を詳にせず ● 小ざかしきわらべをいふ

攴兮

是れ亦太子忽を刺りたるもの也。或は云ふ、是れ淫女の詞なりと

擗兮擗兮。風其吹女。叔兮伯兮。倡予和女。

擗たり擗たり、風其れ女を吹く。叔や伯や、予を倡はば女に和せん。

●木の葉の枯れて落ちんとする形容 ●叔伯は男子の字なれども、さし定めたる人なし ●はいと答へて成に從はんの意

○擗たり擗たり、風其れ女を擗へす。叔や伯や、予を倡はば女を要さん。

●汝の志の如くならんとの意

狡童

是れ亦太子忽を刺れる詩也。或は云ふ、此れ淫女の其私せし所の者に絶たれて之に戯むる、同なりと

彼の狡童、我と言はず。維れ子の故に、我をして餐ふこと能はざらしむ。

●小ざかしきわらべをいふ

○彼の狡童、我と食はず。維れ子の故に、我をして息ふこと能はざらしむ。

襄裳

彼狡童兮。不與我言兮。維子之故。使我不能餐兮。彼狡童兮。不與我食兮。維子之故。使我不能息兮。

子惠思我。襄裳涉溱。子不我思。豈無他人。狂童之狂也且。子惠思我。襄裳涉洧。子不我思。豈無他人。狂童之狂也且。

子之丰兮。俟我乎巷兮。悔予不送兮。

是れ鄭の風俗亂れて國人大同の己を正さんことを思うて述べたる詩也。或は云ふ、此れ淫女が其私する所の人に戯むる、同なりと

子惠して我を思はば、裳を襄けて溱を渉らん。子我を思はずんば、豈に他人

無からんや。狂童の狂。

●いつくしむこと ●鄭國を流る、川の名 ●これこの狂童の名を貰へるたはれをよと戯れる詞也

○子惠して我を思はば、裳を襄けて洧を渉らん。子我を思はずんば、豈に他人

無からんや。狂童の狂。

●鄭國を流る、川の名

丰

是れ鄭の淫亂を刺りて作りし詩也

子の丰たる、我を巷に俟てり、悔ゆらくは予の送らざりしこと。

●ふつくりとふとりてゆたかなる貌

子之昌兮。俟我乎堂兮。悔予不將兮。  
 衣錦裝衣。裳錦裝裳。叔兮伯兮。駕予與行。

裳錦裝裳。衣錦裝衣。叔兮伯兮。駕予與歸。

東門之墀。茹

○子の昌たる、我を堂に俟てり、悔のらくは予が將らざりしこと。

● 年さかんにして、大なる貌 ● 裳のうち也、座敷也

○錦を衣にして裝衣し、錦を裳にして裝裳す。叔や伯や、駕せば予與に行かん。

● 錦の衣裳の上に單の薄絹をまとも也 ● 同上 ● 男子の字を廣くいひたる也 ● 馬を車につくること

○錦を裳にして裝裳し、錦を衣にして裝衣す。叔や伯や、駕せば予與に歸らん。

東門之墀

是れ亦節の淫風なる、男女禮を待たずして相奔る者あるを刺れるもの也

東門の墀、茹蘆阪に在り。其室は則ち邇く、其人甚だ遠し。

蘆在阪。其室則邇。其人甚遠。

東門之栗。有踐家室。豈不爾思。子不我即。

● 節の城郭の東門也 ● 草をはらひて平にしたる庭地なり ● 西へあかむなり ● 土地のかたかさがあるところ、即ちさかをいふ

○東門の栗、踐たる家室あり。豈に爾を思はざらんや、子、我に即かず。

● 栗の下に立ち連なれる人家あるをいふ ● 汝は我に上りつかずの意

風雨

是れ節の世亂れて君子の其度を改めざるを思ひて作れる詩也

風雨凄凄。雞鳴喈喈。既見君子。云胡不夷。

● 物すてくすまじきこと ● 鶏の聲なり ● 約束する所の男子を指す

○風雨凄凄として、雞鳴喈喈たり。既に君子を見る、云に胡ぞ夷えざらん。

● 風雨のちと也 ● 喈々と同じく鶏の鳴く聲也 ● 相思の病のいゆるをいふ

○風雨晦晦如、雞鳴已ます。既に君子を見る、云に胡ぞ喜ばざらん。

風雨凄凄。雞鳴喈喈。既見君子。云胡不夷。  
 風雨濛濛。雞鳴膠膠。既見君子。云胡不瘳。  
 風雨如晦。雞

嗚不<sub>レ</sub>已。既見<sub>二</sub>君子。云胡不<sub>レ</sub>喜。

子衿

是れ鄭の風俗亂れて學校廢せるを刺れる者也。或は云ふ、此れ淫奔の時なりと

青青たる子の衿、悠悠たる我が心、縦ひ我往かすとも、子寧ぞ音を嗣がざらん。

- 學生を指す、或は云ふ、男子なりと
- 衣領を云ふ
- 思ふことの長きをいふ
- 女子自ら我とする也

○青青たる子の佩、悠悠たる我が思、縦ひ我往かすとも、子寧ぞ來らざらん。

● 佩玉なり

○挑たり達たり、城闕に在り。一日見ざれば、三月の如し。

- 往來して相見る貌、或は云ふ、起居振舞のかるく跳びまはるをいふ
- 達は氣象の放縱なるをいふと

青青子衿。悠悠我心。縱我不往。子寧不嗣音。  
青青子佩。悠悠我思。縱我不往。子寧不來。  
挑兮達兮。在城闕兮。一日不見。如三月兮。

揚之水

是れ太子忽の忠臣良士なくして終に死亡したるを閔んで之を作れる者也

揚たる之水、東楚をも流さず、終に兄弟鮮し、維れ予と女とのみ。人の言を信すること無かれ、人實に女を遷かん。

- うか／＼と流れゆく貌
- 東ねたる雜木の薪だも流さじとなり
- 他人を指す
- 誘惑すること

○揚たる之水、東薪を流さず。終に兄弟鮮し、維れ予と二人のみ。人の言を信すること無かれ、人實に信あらず。

出其東門

是れ鄭國の亂を閔んで作れる詩なり。或は云ふ、此れ淫奔の時也と

其東門を出づれば、女より雲の如し。則ち雲の如しと雖も、我思の存せるに匪

揚之水。不流東楚。終鮮兄弟。維予與女。無信人之言。人實廷女。  
揚之水。不流東薪。終鮮兄弟。維予二人。無信人之言。人實不信。

出其東門。有



女如雲。雖則如雲。匪我思存。綺衣裳。巾聊樂我員。出其闈。闈有女如茶。雖則如茶。匪我思且。綺衣茹蘆。聊可與娛。

す。綺衣裳巾、聊か我を樂ましむ。

● 衆多なるをいふ ● 白きまゝに染めざる絹と、うすあを色の身を飾る帨巾とをいふ、貧女の衣服也

○其闈闈を出れば、女あり茶の如し。則ち茶の如しと雖も、我が思に匪ず。綺衣茹蘆、聊か與に娛む可し。

● 城門の前にまゐるくつき出せる小城を闈といひ、城門の處を闈といふ ● かるく白くしてうつくしきことあかねぞめの中なり

野有蔓草

野有蔓草。零露漙漙。有美一人。清揚婉兮。邂逅相遇。適我願兮。

野に蔓草あり、零露漙漙たり。美なる一人あり、清揚婉たり。邂逅相遇うて、我願に適ふ。

● はびこれる草をいふ ● 落つる露をいふ ● 露多き貌 ● 眉目間のほこやかにうるはしきをいふ ● 期せずして會すること

是れ淫奔の詩也、男女時を失ひ期せずして會せんことを思ひ、之を作りし也

野有蔓草。零露漙漙。有美一人。婉如清揚。邂逅相遇。與子偕臧。

○野に蔓草あり、零露漙漙たり。美なる一人あり、婉如として清揚なり。邂逅相遇うて、子と偕に臧し。

● 盛なる貌 ● 各其の欲する所を得る也

溱洧

是れ淫奔の詩也。男女時を失ひ期せずして會せんことを思ひ、之を作りし也

溱と洧と、方に渙渙たり。士と女と、方に而を乘れり。女曰く觀んやと。士曰く既にすと。且往いて觀んか、洧の外に、洧に訏にして且つ樂し。維れ士と女と、伊れ其れ相諶ぶれて、之に贈るに芍藥を以てす。

● 溱洧共に水の名 ● 春水の盛なる貌 ● よぢばかまの事 ● 互にもどけをいふ ● 芍薬なり

○溱と洧と、澗として其れ清し。士と女と、般として其れ盈てり。女曰く、觀ん

清矣。士與女。殷其盈矣。女曰觀乎。士曰既且。且往觀乎。洧之外。洵訏且樂。維士與女。伊其將譖。贈之以芍藥。

やと。士曰く、既にすと。且往いて観んや、洧の外に。洵に訏にして且つ樂し。維れ士と女と、伊れ其れ將譖ぶれて、之に贈るに芍藥を以てす。

● 深き貌 ● 衆き貌

鄭國二十一篇五十三章

### 齊一之八

齊は國の名、禹貢九州の一なる青州の内にあり

### 雞鳴

是れ古の賢妃を思うて作れる詩也

雞既鳴矣。朝既盈矣。匪雞則鳴。蒼蠅之聲。

雞既に鳴きて、朝既に盈てり。雞則ち鳴くに匪ず、蒼蠅の聲なり。

● 朝廷の出仕者を指す

東方明矣。朝既昌矣。匪東方則明。月出之光。蟲飛薨薨。甘與子同夢。會且歸矣。無庶予子憎。

○東方明けて、朝既に昌なり。東方則ち明くるに匪ず、月出の光なり。

○蟲飛んで薨薨たり、子と夢を同じうすることを甘しむ。會に且に歸らんとす。

庶をして予のゑに子を憎ましむること無けん。

● 蟲の飛ぶ聲なり ● 朝會の事 ● 諸の朝臣を指す

### 還

是れ哀公田獵を好みて厭くことなきを刺れる詩也

子の還たる、我に狐の間に遣ふ。並に驅せて兩肩を従ふ。我を揖して我を偃と謂ふ。

● はたらしのすみやかにして自由なる貌 ● 齊の山の名 ● 二獸也、獸の三歳なるを肩といふ ● 立ちしまうに手を拱して一禮すること ● 偃は利なり、物の上手をいふ

子之還兮。遣我乎。狐之間兮。並驅從兩肩兮。揖我謂我儂兮。

子之茂兮。遭我乎。道。並驅從兩牡兮。揖我謂我好兮。

子之昌兮。遭我乎。陽之。並驅從兩狼兮。揖我謂我臧兮。

俟我於著乎。而充耳以素瓊瑩乎。而。

○子の茂なる、我に道の道に遭ふ。並に驅せて兩牡を従ふ。我を揖して我を好と謂ふ。

● 美なること ● 二匹の牡馬をいふ ● 結構なる上手をいふ

○子の昌なる、我に陽の陽に遭ふ。並に驅せて兩狼を従ふ。我を揖して我を臧と謂ふ。

● 盛なること ● 善也

著

是れ齊の時俗、親迎せしむるを判れる者也

我を著に俟つ、充耳素を以てし、之に尙ふるに瓊瑩を以てす。

● 門のめかくし外をいふ ● 耳がねの體名 ● 瑩をかけたる瓊の色をいふ ● 石の美しくして玉に似たもの、即ち之を以て瓊と稱す也

○我を庭に俟つ、充耳青を以てし、之に尙ふるに瓊瑩を以てす。

● 美石の玉に似たるものをいふ

○我を堂に俟つ、充耳黃を以てし、之に尙ふるに瓊瑩を以てす。

● 美石の玉に似たるもの

東方之日

是れ齊の君臣道を失ひ、男女淫奔にして禮を以て化すること能はざるを判れる者也

○東方之日あり、彼の姝たる者は子、我室に在り、我を履みて即けり。

● 美好なる貌 ● 女より男をさして云ふ ● 我の跡をふんで相就くをいふ

○東方の月あり、彼の姝たる者は子、我園に在り。我を履みて發せり。

俟我於庭乎。而充耳以青瓊瑩乎。而。俟我於堂乎。而充耳以黃瓊瑩乎。而。

東方之日兮。彼姝者子。在我室兮。履我即兮。

東方之月兮。彼姝者子。在我園兮。在我

圖一兮。履我發兮。

● 門内を指す

東方未明

是れ齊君の起居節なく、號令時ならざるを刺れる詩也

東方未だ明けず、衣裳を顛倒す。之を顛し之を倒す、公より之を召す。

● 衣と裳と其位置を顛倒すること

○ 東方未だ暗けず、裳衣を顛倒す。之を倒し之を顛す、公より之を令す。

○ 柳を折りて圃に樊すれば、狂夫瞿瞿たり。晨夜すること能はず、夙からざれば則ち莫し。

● はたけ、即菜園をいふ、樊は藩なり ● 守ることなき貌、又驚き顛かる貌にて墜を破りて侵入せざるをいふ ● 朝夕をかどろこと能はずして起居時ならず早からざれば則ちあそしと

東方未明。顛倒衣裳。顛倒之。自公召之。  
東方未暗。顛倒裳衣。顛倒之。自公令之。  
折柳樊圃。狂夫瞿瞿。不能晨夜。不夙則莫。

南山

是れ襄公の不倫不徳を刺りたる詩也

南山崔嵬たり、雄狐綏綏たり、魯道蕩たることあり。齊子由つて歸ぐ、既に日に歸ぐ、曷ぞ又懷はん。

● 齊の南山也 ● 高大なる貌 ● 牡狐が牝をもとめある貌 ● 魯に行く道が平坦なるをしる

○ 葛屨五兩あり、冠綏雙べり。魯道蕩たることあり、齊子庸ふ。既に日に庸ふ。曷ぞ又従はん。

● 葛屨のくつ五足 ● 冠のひもなまび下るをいふ

○ 麻を藝うることを如何ん、其畝を衡従にす。妻を取ること之を如何せん、必ず父母に告す。既に日に告す、曷ぞ又鞠めん。

● うねの事 ● 横従にすること ● 私慾をはいまにすること

南山崔嵬。雄狐綏綏。魯道有蕩。齊子由歸。既曰歸止。曷又懷止。  
葛屨五兩。冠綏雙止。魯道有蕩。齊子庸止。既曰庸止。曷又從止。  
藝麻如之何。衡從其畝。取妻如之何。必告父母。既曰告止。曷又鞠止。

析薪如之何。匪斧不克。取妻如之何。匪媒不得。既曰得止。易又極止。

○薪を析くこと之を如何ん、斧に匪されば克はず。妻を取めること之を如何せん、媒に匪されば得ず。既に日に得たり、易ぞ又極めん。

●媒によりて妻り得たること ●私慾をほしむるにすること

甫田

是れ大夫、襄公の其道に非ざるを刺れる詩也

無田甫田。維莠騶騶。無思遠人。勞心切切。

甫田を田つくること無かれ、維れ莠騶騶たり、遠人を思ふこと無かれ、勞心切切たり。

●大田也 ●苗に似たる毒草也 ●はびこる貌 ●諸侯を指す ●憂ひ苦しむ貌

無田甫田。維莠桀桀。無思遠人。勞心怛怛。

○甫田を田つくること無かれ、維れ莠桀桀たり。遠人を思ふこと無かれ、勞心怛怛たり。

●はびこる貌 ●憂ひ苦しむ貌

婉兮變兮。總角卯兮。未幾見兮。突而弁兮。

○婉たり變たり、總角卯たり、未だ幾ならずして見しは、突として弁せり。

●少くして面上を鏡 ●同上 ●子供のつゝの髪が兩方に角を出したるが如きをいふ ●突然冠を加へて成人と爲るをいふ

盧令

是れ襄公の荒政を刺りて作れる詩也

盧令令。其人美且仁。

○盧の令令たる、其人美にして且つ仁なり。

●田獵の犬をいふ ●犬のあごの下にある環の聲

盧重環。其人美且鬢。

○盧の重環なる、其人美にして且つ鬢なり。

●子母環を指す ●下ひげと兩鬢のうつくしき貌也

盧重鍔。其人且偲。

○盧の重鍔なる、其人美にして且つ偲なり。

●大環を以て小環二つを貫きたるをいふ ●鬢の多き貌也

敝筍在梁。其魚魴鯉。齊子歸止。其從如雲。

敝筍在梁。其魚魴鯉。齊子歸止。其從如雨。

敝筍在梁。其魚唯唯。齊子歸止。其從如水。

敝筍

是れ文書を刺りて作れる者也

○敝筍に在り、其魚は魴鯉。齊子歸るときに、其從雲の如し。

① やぶれたるうけの事 ② 大魚の名、和名を附したる書もあれども詳ならず ③ 文書を指す ④ つきした

がよもの雲の如く多きをいふ

○敝筍に在り、其魚は魴鯉。齊子歸るときに、其從雨の如し。

① 大魚の名、邦名何とも分らず ② 其多きをいふ

○敝筍に在り、其魚は唯唯たり。齊子歸るときに、其從水の如し。

① 出入の貌 ② 其多きをいふ

載驅

齊人の襄公を刺れる者なり

載驅薄薄。玁狁朱韜。魯道有蕩。齊子夕發。

載ち驅すること薄薄、玁狁朱韜あり、魯道蕩たるあり、齊子夕より發す。

① 疾くかくるをいふ ② 韜は竹にて編みたる敷物也、韜は車の後に原麗の如くかゝり居る敷物也 ③ 赤色のつくり皮をいふ ④ 齊より魯へゆく道の平にして高低なきをいふ ⑤ 宿る所の舎をたちてゆくをいふ

○四驪濟濟たり、轡を垂ること漚漚たり、魯道蕩たるあり、齊子豈弟なり。

① 四つの黒毛の馬 ② 美しき貌 ③ 委なる貌 ④ 安らかに樂しむ貌

○汶水湯湯たり、行人彭彭たり。魯道蕩たるあり、齊子翺翔す。

① 川の名 ② 川の水の廣き貌 ③ 多き貌 ④ かけりふるまふ貌

○汶水滔滔たり、行人儻儻たり。魯道蕩たるあり、齊子遊敖す。

① 水の流るゝ形容 ② 多き貌 ③ 氣體に遊ぶ形容

猗嗟

是れ魯の莊公を刺れる者也

猗嗟昌兮。顧而長兮。抑若揚兮。美目揚兮。巧趨踰兮。射則臧兮。

猗嗟名兮。美目清兮。儀既成兮。終日射侯。不出正兮。展我甥兮。

猗嗟變兮。清揚婉兮。舞則選兮。射則貫兮。四矢反兮。以禦亂兮。

猗嗟昌なり、顧として長く、抑ふれども揚がるが若し。美目揚たり、巧に趨りて踰たり、射れば則ち臧し。

○猗嗟名あり、美目清く、儀既に成る。終日侯を射るも、正を出でず。展に我甥なり。

○猗嗟變たり、清揚婉たり。舞へば則ち選なり、射れば則ち貫く。四矢反す、以て亂を禦がん。

- 威儀藝術の美なる皆評判あるをいふ
- 立居振舞の威儀既によく成りかたまるをいふ
- あづちの事
- 威儀藝術のうるはしき事
- めもとまゆつきのよきをいふ
- 舞ふすがたも亦人にすぐれたること
- 四つ矢ながら的をはづれずしてよく當るをいふ

齊國十一篇三十四章

魏一之九

國の名、周の初めに同姓の諸侯をこゝに封ぜり

葛屨

是れ魏の人民が褊狭なるを刺れる者也

糾糾葛屨。以て霜を履むべし。摻摻たる女手、以て裳を縫ふ可し。之を要し之を瀦し、好人之を服す。

- 日のあらい貌
- くずのくつ
- かばまきをいふ
- 腰ぬひすること
- えりぬひすること
- 猶ほ大人の如し

○好人提提、宛然として左に辟け、其象搯を佩ぶ。維れ是の褊心、是を以て刺を爲す。

- 靜にゆるやかなる形容
- まながら
- 象牙のかみかきをいふ
- 褊急の精神をいふ

好人提提。宛然左辟。佩其象搯。維是褊心。是以爲刺。

糾糾葛屨。可二以履霜。摻摻女手。可二以縫裳。要之瀦之。好人服之。

彼汾沮洳。言采其莫。彼其之子。美無度。美無度。殊異乎公路。

汾沮洳

是れ魏君の檢にして禮に中らざるを刺れるもの也

彼の汾の沮洳に、言に其莫を采る。彼其之子、美にして度なし、美にして度なけれども、殊に公路に異なり。

● 川の名 ● 水氣のありてじめくする處をいふ ● 植物なり、和名すいごと訓ず、葉節に似て味酸しとあり ● 莫を采る人を指す ● 尺度を以てはかるべからざる事 ● 公の路車を掌るもの、卿大夫の庶子を以て之を爲さしむ

○彼の汾の一方に、言に其桑を采る。彼其之子、美にして英の如し。美にして英の如くなれども、殊に公行に異なり。

● 一邊といふが如し ● 華也、はなぶさをいふ ● 即ち公路也

○彼の汾の一曲に、言に其蕢を采る。彼其之子、美にして玉の如し。美にして玉の如くなれども、殊に公族に異なり。

彼汾一方。言采其桑。彼其之子。美如英。美如英。殊異乎公行。言采其蕢。彼其之子。美如玉。

美如玉。殊異乎公族。

園有桃

● 川水の曲り角をいふ ● 植物なり、和名つくしと訓ず、或は云ふ、水草にして今の源根(かもだか)なりと ● 公の宗族を掌るもの、卿大夫の嫡子を以て之を爲さしむ

是れ孝子に行き、父母を念うて作れる者也。或は云ふ、魏國の小にして政なきを褒へて之を作れりと

園に桃あり、其實を之れ殺とす。心の憂あり、我歌ひ且つ諗ふ。我を知らざる者は、我士や驕ると謂ふ。彼人是なる哉、子が曰へるは何ぞや。心の憂あり、其れ誰か之を知らん。其れ誰か之を知らん、蓋し亦思ふこと勿けん。

● 歌曲を樂器に合するを歌といひ、徒ちに歌ふを諗といふ ● 歌諗するを却つて賢達なりといふ ● 彼の政を爲す人の行ふ所は己に是なるぞよとの意 ● 子が歌諗に托して之を言ふは何の爲ぞやとの意

○園に棘あり、其實を之れ食ふ。心の憂あり。聊か以て國を行かん。我を知らざる者は、我士や極り罔しと謂ふ。彼人是なる哉、子の曰へるは何ぞや。心の憂あり、其れ誰か之を知らん。其れ誰か之を知らん、蓋し亦思ふこと勿けん。

園有桃。其實之殺。心之憂矣。我歌且諗。不知我者謂我士也。驕。彼人是哉。子曰何其。心之憂矣。其誰知之。蓋亦勿思。園有棘。其實之食。心之憂矣。聊以行國。不知我者謂



我士也。罔極。彼人是哉。子曰。何其心之憂矣。其誰知之。其誰知之。蓋亦勿思。

陟彼岵兮。瞻望父兮。父曰。嗟予行役。夙夜無已。上慎旃哉。猶來無止。

陟彼屺兮。瞻望母兮。母曰。嗟予行役。

ん。

陟岵

● ちよつと國中を巡視せんといふ程の意 ● 心の放縱にして度なきものといふべしとなり  
是れ魏の季子役に行き、父母を思念して作れる詩也

彼の岵に陟りて、父を瞻望す。父曰く、嗟予が子役に行きて、夙夜已むこと無かれ、上はくは旃を慎まん哉、猶ほ來れ止まること無かれと。

● 草木なきから山をいふ ● ながめ望むこと ● 父が別時の言を念ひ出す也 ● 夙夜勤勞して一刻も休むな之意 ● 猶ほ來れ、彼に止りて歸らざるが如きことなかれとの意、一説に來るべくは乃ち來れ、決して還事を止めて來る勿かれとあり

○彼の屺に陟りて、母を瞻望す。母曰く、嗟予が季役に行きて、夙夜寐ぬること無かれ、上はくは旃を慎まん哉、猶ほ來れ棄つること無かれと。

夙夜無寐。上慎旃哉。猶來無棄。

陟彼岡兮。瞻望兄兮。兄曰。嗟予行役。夙夜必偕。上慎旃哉。猶來無死。

十畝之間

是れ魏國の削小せられ、民居る所なきを刺れる者也

十畝の間、桑とる者閑閑たり。行かば子と還らん。

● 人民の田畝は一夫百畝の定めなりしに何時か削り取られて僅かに十畝位の狭きものとなりたり ● 如何にも満足なる様をいふ ● 朋友を指す、去りなば君と共に本國故郷にかへんとなり

○十畝の外、桑とる者泄泄たり。行かば子と逝かん。

行與子逝兮。

坎坎伐檀兮。寘之河之干。河水清且漣漪。不稼不穡。胡取禾三百廩兮。不狩不獵。胡豕豮三。爾庭有縣貍。不彼君子兮。不素餐兮。坎坎伐輻兮。寘之河之側。河水清且

● 閑閑と同じ如何にものんびりと見ゆる様をいふ

伐檀

是れ在位者、貪欲なるを刺れる者也

坎坎として檀を伐り、之を河の干に寘けば、河水清くして且つ漣たつ。稼せず穡せずんば、胡ぞ禾三百廩を取らん。狩せず獵せずんば、胡ぞ爾の庭に縣貍あるを瞻ん。彼の君子は、素餐せず。

● 檀を伐る聲なり ● 和名まゆみと訓ず、或は云ふ、それは非なり今のむくの類にして木質もつと堅く車の材となるものなりと ● 植ふ村もせず刈り取りもせざるをいふ ● 一夫の居る所を廩といふ三百廩也稻の收穫三百軒分を取ること ● 冬臘を狩と爲し夜臘を獵と爲す、之を爲さざるをいふ ● 貍は狸の一種和名むじなと訓ず、むじなの獲物をかくること ● 閑かずして食ふこと

○ 坎坎として輻を伐り、之を河の側に寘けば、河水清くして且つ直し。稼せず穡せずんば、胡ぞ禾三百億を取らん。狩せず獵せずんば、胡ぞ爾の庭に縣特あるを瞻ん。彼の君子は、素餐せず。

るを瞻ん。彼の君子は、素餐せず。

● 車の矢となるべき材をいふ ● 十萬を億と爲す、但我國の現在の萬といふと同じからず、思ふに稍東の歌ならんか ● 獸の三歳なるものをいふ ● 素餐と同じ、飽かずして食ふこと

○ 坎坎として輪を伐り、之を河の漚に寘けば、河水清くして且つ淪たつ。稼せず穡せずんば、胡ぞ禾三百困を取らん。狩せず獵せずんば、胡ぞ爾の庭に縣鶉あるを瞻ん。彼の君子は、素餐せず。

● 車の輪と爲すべき材をいふ ● 風少し吹きて水面紋を成すこと、即ちささなみ也 ● 圓形の倉也、三百箇の倉庫に納入するだけの收穫をいふ ● 鶉名、うづらの事也

碩鼠

是れ強の同人が、重斂の苦を刺れる者也

直猗。不稼不穡。胡取禾三百億兮。不狩不獵。胡豕豮三。爾庭有縣特兮。不彼君子兮。不素餐兮。坎坎伐輪兮。寘之河之漚。河水清且淪漪。不稼不穡。胡取禾三百困兮。不狩不獵。胡豕豮三。爾庭有縣鶉兮。不彼君子兮。不素餐兮。

碩鼠碩鼠。無食我黍。三歲貫女。莫我肯顧。逝將去女。適彼樂土。爰得我所欲。

碩鼠碩鼠、我黍を食ふこと無かれ。三歳女に貫へども、我を肯へて顧みること莫し。逝いて將に女を去りて、彼の樂土に適かんとす。樂土樂土、爰に我所を得ん。

● 大なるねずみをいふ、人民虐政に困む故に之に托して言へる也 ● 有道の國を指す ● 安心して住居し得る處を得べしとなり

碩鼠碩鼠。無食我麥。三歲貫女。莫我肯德。逝將去女。適彼樂國。爰得我直。

○ 碩鼠碩鼠、我麥を食ふこと無かれ。三歳女に貫へども、我を肯へて德すること莫し。逝いて將に女を去りて、彼の樂國に適かんとす。樂國樂國、爰に我直を得ん。

● 少しも恩恵を加へざる事 ● 直は宜也、我が住むに宜しき處をいふ

碩鼠碩鼠。無食我苗。三歲貫女。莫我肯勞。逝將去女。適彼樂郊。樂

○ 碩鼠碩鼠、我苗を食ふこと無かれ。三歳女に貫へども、我を肯へて勞すること莫し。逝いて將に女を去らんとし、彼の樂郊に適かん。樂郊樂郊、誰にか之れ永く號ばん。

郊樂郊。誰之永號。

● いたはり賑むることなきをいふ、一説には國の爲に勤勞するものと稱さずと釋けり ● なげきさげぶこと

魏國七篇十八章

唐一之十

唐は國の名、本、帝堯の都也、周の成王其弟叔虞を封じて唐侯と爲す其子の時代に及び晉水に因みて國號を晉と改めたり、今其詩を晉風といはずして唐といへるは其の始封の舊號によれる也

蟋蟀

是れ晉の僖公が彼にして禮に申さざるを罰れる也

蟋蟀堂に在り、歲聿に其れ莫れん。今我樂ますんば、日月其れ除らん。已大だ康んすること無かれ。職として其居を思へ。樂を好みて荒むこと無かれ。良士翟翟たれ。

● 蟲の名きりざりすの事也、俗には之をいととといへり ● 牀下(ゆかした)をいふ ● 日大の二字を連ねてはなはたと讀むを可と才樂に過ぐるをいふ ● 根本的に其居る所を顧慮するをいふ ● 善良なる人士と驚き顧

蟋蟀在堂。歲聿其莫。今我不樂。日月其除。無已大康。職意其居。好樂無荒。良士翟翟。

蟋蟀在堂。歲  
聿其逝。今我  
不樂。日月其  
邁。無已大康。  
職思其外。好  
樂無荒。良士  
蹶蹶。

みて危亡に至らざれとなり

○蟋蟀堂に在り、歲聿に其れ逝かん。今我樂ますんば、日月其れ邁かん。已大  
だ康んすること無かれ。職として其外を思へ。樂を好みて荒むこと無かれ。良士  
蹶蹶たれ。

● 其以外の事までも心にかけて思へとの事也 ● ナばしこく働くこと

○蟋蟀堂に在り、役車其れ休せん。今我樂ますんば、日月其れ愒ぎん。已大  
康んすること無かれ。職として其憂を思へ、樂を好みて荒むこと無かれ、良士  
休休たれ。

● 庶人の乘る車也、荷物や穀物などを積みて運搬するもの也、職の暮には此車を休ませて用ひざる也 ● 其身  
に任じて憂ふべきことを忘れざるをいふ ● 安閑なる貌 ● 其身

山有樞

是れ魯の國人が其君昭公の失政を刺りし詩也

山有樞。隰有  
檣。子有衣裳。  
弗曳弗裳。子  
有車馬。弗馳  
弗驅。宛其死  
矣。他人是愉  
矣。他人是保。  
山有漆。隰有  
栗。子有酒食。  
何不日鼓瑟。  
且以喜樂。且  
以永日。宛其  
死矣。他人入  
室。

○山に樞あり、隰に檣あり、子に衣裳あれども、曳せず裳せず。子に車馬あれ  
ども、馳せず驅けず、宛として其れ死せば、他人是れ愉まん。

● 和行あきこれと訓ず、刺ある木也 ● 運搬をいふ ● 和名これと訓ず ● 曳も裳も共にひく也、ゆるや  
かになござるをいふ ● 乗りて驅け廻はざるをいふ ● 坐ながら見る貌、まながら其德にといふ程の意 ●  
他人が之を服し之に乗らんとすの意也

○山に樞あり、隰に柎めり。子に廷内あるも、酒せず婦せず。子に鐘鼓あるも、  
鼓せず考せず、宛として其れ死せば、他人是れ保たん。

● 山樞なり、たらの類なるべし ● 一名は樞あはぎと訓じ又あをきとも訓ず ● 庭の中を指す ● 水も打  
たず舞もとらざること ● うちもせずならしめざるをいふ ● 他人の所有となるべしとなり

○山に漆あり、隰に栗あり。子に酒食あるも、何ぞ日に瑟を鼓せざる。且つ以  
て喜樂し、且つ以て日を永うせよ。宛として其れ死せば、他人室に入らん。

● 人憂ふれば日の短きを覺ゆ、故に飲食して樂を爲し以て此の日を永くせよとの意也 ● 節室に入りこみて  
我が物とせんとたり

揚之水

是れ管の昭公を刺れる詩也

揚たる之水、白石鑿鑿たり。素衣朱襮、子に沃に從はん。既に君子を見る、云に何ぞ樂まざらん。

揚之水。白石鑿鑿。素衣朱襮。從君子沃。既見君子。云何不樂。

● 悠揚とゆるやかに流るゝをいふ ● 高く險しき貌 ● 白色の上衣に朱の縁とりたる襮のつきもの、之を服用するをいふ ● 相叔を指す ● 地名、曲沃なり

○揚たる之水、白石皤皤たり。素衣朱繡、子に鵲に從はん。既に君子を見る、云に何ぞ憂へん。

揚之水。白石皤皤。素衣朱繡。從君子鵲。既見君子。云何其憂。

● 色の潔白なるをいふ ● 朱絲を以て繡(ぬい)とりたるものを服すること ● 曲沃の邑也

○揚たる之水、白石粼粼たり。我、命あるを聞けども、敢へて以て人に告げず。

揚之水。白石粼粼。我聞有命。不敢以告人。

● 水すきとほりて石の見ゆる貌 ● 相叔の命命を聞くをいふ ● 人民に陰謀の成らんことを期待し隠して人に告げざるをいふ

椒聊

是れ管の昭公の失敗を刺れるもの也

椒聊の實、蕃衍升に盈つ。彼其之子、碩大朋なし。椒聊なるかな、遠條なるかな。

椒聊之實。蕃衍盈升。彼其之子。碩大無朋。椒聊且。遠條且。

● 山椒のこと、聊は助字なり ● しげりはびこること ● 一升たつぷりになるをいふ ● 相叔を指す ● 碩も亦大也 ● 枝の遠くして實の益々蕃きを歎ずる也

○椒聊の實、蕃衍菊に盈つ。彼其之子、碩大且つ篤し。椒聊なるかな、遠條なるかな。

椒聊之實。蕃衍盈菊。彼其之子。碩大且篤。椒聊且。遠條且。

● 兩手にてすくふを菊といふ

綯繆

是れ管國の亂れて昏朝其時を得ざるを刺れる也

綱繆東。三  
星在天。今夕  
何夕。見此良  
人。子兮子兮。  
如此良人。何

綱繆東。三  
星在隅。今夕  
何夕。見此選  
近。子兮子兮。  
如此選近。何  
綱繆東。楚。三  
星在戶。今夕  
何夕。見此樂  
者。子兮子兮。  
如此樂者。何

綱繆として薪を束ぬ、三星天に在り。今夕何の夕ぞ、此の良人を見る。子  
や子や、此良人を如何にせん。

● 綱繆は薪束ぬのごとし、ひきまよふこと ● 東方七宿の心星をいふ、其數三つあり故にいふ ● 夫を指す  
● 女自身を嗟歎していふ

○綱繆として芻を束ぬ、三星隅に在り。今夕何の夕ぞ、此の選近を見る。子  
や、此の選近を如何にせん。

● 草也 ● 東南隅を指す ● 芻を束ぬして選よこと

○綱繆として楚を束ぬ、三星戸に在り。今夕何の夕ぞ、此の樂者を見る。子  
や、此樂者を如何にせん。

● 雜木にて薪とすべきもの也 ● 美しき者即ち女を指す

秋杜

是れ兄弟なき者自ら其孤獨を憐みて助を人に求むる詩也。或は云ふ、是れ魯の武公が齊を求めて自ら自ら輔けざる

有秋之杜。其  
葉漚漚。獨行  
踽踽。豈無他  
人。不如此我  
父。嗟行之人。  
胡不比焉。人  
無兄弟。胡不  
飲焉。  
有秋之杜。其  
葉菁菁。獨行  
震震。豈無他  
人。不如此我  
姓。嗟行之人。  
胡不比焉。人  
無兄弟。胡不  
飲焉。

を刺れる者也と

秋たる之の杜あり、其葉漚漚たり、獨り行くこと踽踽たり。豈に他人なからん  
や、我が同父に如かず。嗟行之人、胡ぞ比けざる。人、兄弟なし、胡ぞ飲けざる。

● 獨り生ずる貌 ● 赤棠のこと、和名かたなしと訓ず、りんごを謂ふ也 ● 處なる貌 ● 獨りして進まざ  
る貌 ● 異姓の人を指す ● 兄弟の事 ● 行路の人をいふ ● 比と同じく輔くること

○秋たる之の杜あり、其葉菁菁たり、獨り行くこと震震たり。豈に他人なからん  
や、我が同姓に如かず。嗟行之人、胡ぞ比けざる。人、兄弟なし、胡ぞ飲けざる。

● 處なる貌 ● 依る所なき貌

羔裘

是れ魯人、其の在位者が其民を恤まざるを刺れる者也

羔裘豹袂。自我人居居。豈無他人。維予之故。

羔裘豹裘。自我人究究。豈無他人。維予之好。

蕭蕭鵝羽。集于苞栩。王事靡盬。不能蓺稷。

羔裘豹袂、我が人を自ふる事居居たり。豈に他人なからんや、維れ子之れ故あり。

○羔裘豹裘、我が人を自ふること究究たり。豈に他人なからんや、維れ子之れ好あり。

● 袖と同じ、そで也 ● 居居と同意 ● 愛好の念あるをいふ

鵝羽

是れ晉民征役に従ふが爲に其父母を養ふこと能はざるを感みて作りし詩也

蕭蕭たる鵝羽、苞栩に集まる。王事監きこと靡し、稷黍を蓺うること能はず、父母何をか怙まん。悠悠たる蒼天、曷ぞ其れ所あらん。

嘒嘒鵝翼。集于苞棘。王事靡盬。不能蓺黍稷。父母何食。悠悠蒼天。曷其有極。

蕭蕭鵝行。集于苞桑。王事靡盬。不能蓺稻粱。父母何嘗。悠悠蒼天。曷其有常。

● 鳥の羽音也 ● 鵝はがんのこと、其のはれ也 ● 蕭はしげること、相はくぬぎの類也 ● 王事は征役のこと、其の忽にすべからざるをいふ ● もちきびとうるしきびと也 ● 何の時か、我をして其所を得しめて勞役の苦を免れんやの意

○蕭蕭たる鵝翼、苞棘に集まる。王事監きこと靡し、黍稷を蓺うること能はず、父母何をか食はん。悠悠たる蒼天、曷ぞ其れ極まりあらん。

● とびある木、和訓ばら也 ● 勞役のやむ時なきをいふ

○蕭蕭たる鵝行、苞桑に集まる。王事監きこと靡し、稻粱を蓺うること能はず、父母何をか嘗めん。悠悠たる蒼天、曷ぞ其れ常あらん。

● 稻はいね也梁は粟類とありて穀物を指す也 ● 平常に復す時期なきをいふ

無衣

是れ晉の武公が晉國を併せ奪ひたるを刺れる詩也

豈曰無衣七兮。不如子之衣。安且吉兮。

豈に衣七つなしと曰はんや、子の衣の安うして且つ吉きに如かず。  
○豈に衣六つなしと曰はんや、子の衣の、安うして且つ煖なるに如かず。

有杖之杜

有杖之杜。生于道左。彼君子兮。嗟肯適我。中心好之。曷飲食之。

杖たる之の杜あり、道の左に生ず。彼の君子、嗟れ肯へて我に適かんや。中心之を好みせども、曷ぞ之を飲食せしめん。  
○杖たる之の杜あり、道の周に生ず。彼の君子、嗟れ肯へて來り遊ばんや。

子兮。嗟肯來遊。中心好之。曷飲食之。

心之を好みせども、曷ぞ之を飲食せしめん。

葛生

葛生蒙楚。藋蔓于野。予美亡此。誰與獨處。

葛生ひて楚に蒙り。藋野に蔓る。予が美此に亡し、誰と與にか獨り處らん。  
○葛生ひて棘に蒙り、藋域に蔓る。予が美此に亡し、誰と與にか獨り息まん。

角枕粲兮。錦衾爛兮。予美亡此。誰與獨且。

角枕粲たり、錦衾爛たり。予が美此に亡し、誰と與にか獨り且さん。



● 獨處して且に至るをいふ

○ 夏の日、冬の夜。百歳の後、其居に歸らん。

● 居も亦墳墓也

○ 冬の夜、夏の日、百歳の後、其室に歸らん。

● 墳穴也（つかあな）

采 芑

是れ管の獻公が魯を聘くを刺れる詩也

采芑采芑。首陽之巔。人之爲言。苟亦無信。會旃會旃。苟亦無然。人之爲言。胡得焉。

● 今の甘草なり、和名あまぎと訓ず ● 同言を爲すをいふ ● 暫く之をさしおけよと也 ● 得る所なくし

焉。

采芑采芑。首陽之下。人之爲言。苟亦無與。會旃會旃。苟亦無然。人之爲言。胡得焉。采芑采芑。首陽之東。人之爲言。苟亦無從。會旃會旃。苟亦無然。人之爲言。胡得焉。

マ 露ものづから止まんと也

○ 苦を采り苦を采る、首陽の下に。人の言を爲す、苟に亦與すること無かれ。旃を舍き旃を舍きて、苟に亦然すること無かれ。人の言を爲す、胡ぞ得んや。

● 苦菜（ひがな）なり ● 同意すること

○ 芑を采り芑を采る、首陽の東に。人の言を爲す、苟に亦從ふこと無かれ。旃を舍き旃を舍きて、苟に亦然すること無かれ。人の言を爲す、胡ぞ得んや。

● 芑菜を指す

唐國十二篇三十三章

秦一之十一

秦は國の名、禹貢雍州の域に在り

車鄰

是れ秦君が始めて車馬侍御あるを美めて作れる者也

車あり鄰鄰たり、馬あり白顛なり。未だ君子を見ず、寺人之れ令す。

● 秦君の行く際をいふ ● うびたひと訓じ顔に白き毛あるをいふ ● 秦君を指す ● 宮中に使はるゝ小官即ち閹官を指す

○ 阪に漆あり、隰に栗あり。既に君子を見て、並び坐して瑟を鼓す。今者樂ま

● 日月の過ぎ去るをいふ ● 八十を蓋と曰ふ

○ 阪に桑あり、隰に楊あり。既に君子を見て、並び坐して簧を鼓す。今者樂ま

● 室の事也 ● 死亡をいふ

有車鄰鄰。有馬白顛。未見君子。寺人之令。阪有漆。隰有栗。既見君子。並坐鼓瑟。今者不樂。逝者其盡。阪有桑。隰有楊。既見君子。並坐鼓簧。今者不樂。逝者其亡。

駟驥

是れ前篇の意を諷せし者也

駟驥孔だ阜なり、六轡手に在り。公の媚子、公に狩に従ふ。

● 四匹の黒馬を指す ● 轡はくつわと訓ず手綱也、四馬には八轡ある筈也、中二ナダは轡にかけあきるとの六轡を手に操る也 ● 公の親愛する所の人をいふ

○ 時の辰牡を奉ず、辰牡孔だ碩なり。公曰く之を左せよと、拔を捨てば則ち獲。

● 各その時に宜しき獸をいふ、牡はそのをす也、之を奉ずとは成人がその獸を君前に進ひ出すをいふ ● 肥大にして肉多し ● 凡そ獸を射るには左より右へ射通すを法とす ● 矢をきつて放つこと ● 獲物を得ること即ち矢の中るをいふ

○ 北園に遊びて、四馬既に閑はす。輶車鸞鑣、獵歌駟を載す。

● 陳習の出来たること ● 輶車を指す ● 鸞鑣は飾也鑣はくつわのつきたるくつわのカマカをいふ

遊子北園。四馬既閑。輶車鸞鑣。載獵歌。

駟驥孔阜。六轡在手。公之媚子。從之。公子狩。

奉時辰牡。辰牡孔碩。公曰左之。舍拔則獲。

騶

小戎。棧收。五  
綦。梁。駟。游。環。  
脊。驅。陰。鞞。蓋。  
續。文。茵。暢。轂。  
駕。我。騶。馬。言。  
念。君。子。溫。其。  
如。玉。在。其。板。  
屋。亂。我。心。曲。

● 二香共に獸犬の名なり、膝の長きを驗といひ、其短きを歌賦といふ

小戎

是れ秦の襄公が天子の命を奉じ西戎を討ちたるを美めたる詩也

小戎。棧收。五綦。梁。駟。游。環。脊。驅。陰。鞞。蓋。續。文。茵。暢。轂。我。我。騶。馬。言。念。君。子。溫。其。如。玉。在。其。板。屋。亂。我。心。曲。

- 兵車を指す
- 棧は漢也、收は駟也、駟は車の前段兩端の横木をいふ、小戎はこの駟を遠く短くする也
- 車
- 駟(ながえ)を五總皮にてまきたるをいふ
- 駟段の間にありて車の前より馬の衝(くびき)までの間、中高くきりて屋の梁の如くなるをいふ
- 皮を以て環として、たづなをすべつちぬき御者その一端をとりさばくもの也
- 皮二寸を衝の兩端につけてもとを車前の轂にかく、此皮駟馬の背の外にありて駟馬の内へこみ入る、ゆゑに背駟といふ
- 陰は陰板也、輿(とこ)の前がまを輿といひ、板をそはたて、輿の上をまはすもの也、輿はひきははは也
- 轂を以て環二つをいかりて飾り陰板にうちつけて駟のあとをばこれにかけ續くるによりて環轂といふなり
- 車内にしく虎の皮のしとね也
- 駟の腹中にありて外には輻をさし内には軸を貫くもの也、輻は長き意味也
- 駟は背く駟文あるをいふ、駟は左の足の白きをいふ、駟すとは馬を車にかくる也
- 板を以て屋根を穿きたるもの
- 心の委曲なる處、即ち我心曲を指す

四牡孔阜。六  
轡在手。騶駟  
是中。騶駟是  
駟。龍盾之合。  
鑿以艘。朝言  
念君子。溫其  
在邑。方何爲  
之。胡然我念  
之。

○四牡孔だ阜なり、六轡手に在り。騶駟是れ中にし、騶駟是れ駟にす。龍盾の合へる、鑿るに艘駟を以てす。言に君子を念ふ、温として其れ邑に在り。方に何をか期と爲ん、胡ぞ然く我をして之を念はしむる。

- 騶は駟に同じ赤毛にて鬣の黒きをいふ
- 駟とは黄色にして口もとの鬣を馬をいふ、騶は黒毛の馬也、駟にすとは副馬とするをいふ
- 龍の模様を畫きたる盾の二枚相合ふこと
- 鑿は環の舌のあるものをいふ、駟は兩駟の内たづな也
- 田舎の邑に居るをいふ
- 何の時を歸朝の期とするか

棧駟孔羣。衣  
矛鏐。蒙伐  
有苑。虎韞。鐵  
膺。交二轡。弓  
竹閉緄。騰。言  
念君子。載  
載。與。厭。厭。良  
人。秩。秩。德。音。

○棧駟孔だ羣けり、衣矛鏐。蒙伐苑たることあり、虎韞鏐膺。二弓を交韞す、竹閉緄。言に君子を念ふ、載ち寝ね載ち興く。厭厭たる良人、秩秩たる德音。

- 牙(はこ)の及に三かどあるをいふ
- 射かけたるはこじり即ちしづきをいふ
- 鏐色のたてを指す
- 飾のある形器
- とちの弓袋をいふ
- ちりばめるむながねをいふ
- 弓二張を本末取りちがへてまやに入る也
- 竹のゆだめを指す
- 弓幹と共に躍にまよひかためてくるはざる韞にすること
- 安んじて重んずる義
- 次第ある意
- 徳行のきこえあるもの

蒹葭

是れ秦の襄公が用禮を用ふること能はざるを刺れる詩也

蒹葭蒼蒼。白露為霜。所謂伊人。在水一方。溯洄從之。道阻且長。溯游從之。宛在中央。

蒹葭蒼蒼として、白露霜と爲る。所謂伊人、水の一方に在り。溯洄して之に從はんとすれば、道阻てて且つ長し。溯游して之に從はんとすれば、宛として水の中央に在り。

蒹葭凄凄。白露未晞。所謂伊人。在水之涘。溯洄從之。道阻且躋。溯游從之。宛在中央。

蒹葭凄凄として、白露未だ晞かず。所謂伊人、水の涘に在り。溯洄して之に從はんとすれば、道阻てて且つ躋る。溯游して之に從はんとすれば、宛として水の中坻に在り。

蒹葭采采。白露未已。所謂伊人。在水之涘。溯洄從之。道阻且右。溯游從之。宛在中央。

蒹葭采采として、白露未だ已まず。所謂伊人、水の涘に在り。溯洄して之に從はんとすれば、道阻てて且つ右す。溯游して之に從はんとすれば、宛として水の中坻に在り。

終南何有。有條有梅。君子至止。錦衣狐裘。顏如渥丹。其君也哉。

終南

是れ秦人が其君を美め且つ之を戒めたる詩也

終南何か有る、條あり梅あり。君子至る、錦衣狐裘す。顏渥丹の如し、其れ君なる哉。

周の名山の名 山嶽なり、和名ひまざと訓ず 錦衣は采服にして狐裘は所謂狐白裘也、共に諸侯の服する所たり かつく漬けたる丹(紅)の如く顔色のてりてうるはしきをいふ 容貌衣服の其君たるに稱へるを褒美する也

終南何有。有紀有堂。君子至止。黻衣繡裳。佩玉將將。壽考不忘。

○終南何か有る、紀あり堂あり。君子至る、黻衣繡裳す。佩玉將將たり、壽考忘れず。

● 山の麓をいふ ● 山のひろく平なる處をいふ ● 黻の字の形を又とす一は青く一は黒し ● 繡はぬいもの也 ● 玉の相觸る、聲也 ● 黻ながく讀とるまで長く高れずして前後の位を失はざるをいふ

黃鳥

是れ秦の穆公が三良を殉せしめたるを時人之を哀みて作りし者也

交交黃鳥。止于棘。誰從穆公。子車奄息。維此奄息。百夫之特。臨其穴。惴惴其慄。彼蒼者天。殫彼蒼者天。殫我良人。如可贖兮。人百其身。

交交たる黃鳥、棘に止まる。誰か穆公に従ふ、子車奄息なり。維れ此の奄息は、百夫の特なり。其穴に臨んで、惴惴として其れ慄る。彼蒼たる者は天、我良人を殫す。如し贖ふ可くんば、人、其身を百せん。

● 飛んで往來する貌 ● こまうぐひすのこと ● 惡木也 ● 子車は氏名也 ● 百人中特に秀出したるをいふ ● 墓穴也 ● ちこそるゝ貌 ● 善人なり ● 百人の身を以て之に代らんとの意

交交黃鳥。止于桑。誰從穆公。子車仲行。維此仲行。百夫之防。臨其穴。惴惴其慄。彼蒼者天。殫彼蒼者天。殫我良人。如可贖兮。人百其身。

○交交たる黃鳥、桑に止まる。誰か穆公に従ふ、子車仲行なり。維れ此の仲行は、百夫の防なり。其穴に臨んで、惴惴として其れ慄る。彼蒼たる者は天、我良人を殫す。如し贖ふ可くんば、人、其身を百せん。

● 殉死すること ● 子車は氏仲行は字 ● 比たり當なり一人を以て百夫に當るをいふ

交交黃鳥。止于楚。誰從穆公。子車鍼虎。維此鍼虎。百夫之禦。臨其穴。惴惴其慄。彼蒼者天。殫彼蒼者天。殫我良人。如可贖兮。人百其身。

○交交たる黃鳥、楚に止まる。誰か穆公に従ふ、子車鍼虎なり。維れ此の鍼虎は、百夫の禦なり。其穴に臨んで、惴惴として其れ慄る。彼蒼たる者は天、我良人を殫す。如し贖ふ可くんば、人、其身を百せん。

● 雜木なり ● 氏名なり ● 亦當る也

晨風

飲彼晨風。鬱彼北林。未見君子。憂心欽欽。如何如何。忘我實多。

山有苞櫟。隰有六駮。未見君子。憂心靡樂。如何如何。忘我實多。

山有苞棗。隰有樹檉。未見君子。憂心如醉。如何如何。忘我實多。

是れ秦の康公が其賢臣を愛つるを刺れる詩也

飲たる彼の晨風、鬱たる彼の北林。未だ君子を見ざれば、憂心欽欽たり。如何ぞ如何ぞ、我を忘るゝこと實に多し。

● 鳥のはやく飛ぶ貌 ● 櫟の一名、はしたかと訓ず ● こんもりと茂りたる貌 ● 林の名 ● 憂へて忘れざる貌

○山に苞櫟あり、隰に六駮あり。未だ君子を見ざれば、憂心樂み靡し。如何ぞ如何ぞ、我を忘るゝこと實に多し。

● 山に苞棗あり、隰に樹檉あり。未だ君子を見ざれば、憂心樂み靡し。如何ぞ如何ぞ、我を忘るゝこと實に多し。

○山に苞棗あり、隰に樹檉あり。未だ君子を見ざれば、憂心樂み靡し。如何ぞ如何ぞ、我を忘るゝこと實に多し。

● 山に苞棗あり、隰に樹檉あり。未だ君子を見ざれば、憂心樂み靡し。如何ぞ如何ぞ、我を忘るゝこと實に多し。

無衣

是れ秦の倍強悍にして戰鬪を好むを諷したる者也、或は云ふ、是れ秦の康公が威々兵を用ふるを刺れる詩也と

豈に衣無しと曰はんや、子と袍を同じうせん。王子に師を興さば、我が戈矛を修め、子と仇を同じうせん。

● 綿を入れたる衣をいふ ● 王命を以ていくさをもちたすこと ● いづれもはこの事 ● 敵なり

○豈に衣無しと曰はんや、子と澤を同じうせん。王子に師を興さば、我が矛戟を修め、子と偕に作たん。

● 肌膚をいふ ● 戟も亦はこ也二つの枝あるもの也 ● 子と一語にたゞんの意

○豈に衣無しと曰はんや、子と裳を同じうせん。王子に師を興さば、我が甲兵を修め、子と偕に行かん。

● 甲はよろひ、兵は武具の總名

豈曰無衣。與子同袍。王子興師。修我戈矛。與子同仇。

豈曰無衣。與子同澤。王子興師。修我矛戟。與子偕作。

豈曰無衣。與子同裳。王子興師。修我甲兵。與子偕行。

我送舅氏。曰至渭陽。何以贈之。路車乘黃。

我送舅氏。悠悠我思。何以贈之。瓊瑰玉佩。

於我乎。夏屋渠渠。今也每食無餘。于嗟乎。不承權輿。

渭陽

是れ晉の康公が其母を念うて作れる詩也

我、舅氏を送りて、日に渭陽に至る。何を以て之に贈らん、路車乘黃あり。  
● 母の兄弟をいふ、秦の康公の舅にあたる晉の公子重耳の事也 ● 地名なり ● 諸侯の車を指す ● 黄色の毛のそむひたる四匹の馬をいふ

○我、舅氏を送る、悠悠たる我思。何を以て之に贈らん、瓊瑰玉佩あり。

● 長くはてなき貌 ● 美しき石の玉に似たるもの ● 佩玉と同じ、腰にもぶ所の玉をいふ

權輿

是れ秦の康公が賢者を贈する意の褒ふるを歌じて詠ざるもの也

我に於て、夏屋渠渠たり。今や食ふ毎に餘なし。于嗟乎、權輿を承がす。

● 大なる家をいふ ● 深く廣き貌 ● 贈物の甚だ褒へたるをいふ ● はりかぬ、最初め長く受け継ぐこと

乎。不承權輿。於我乎。每食四簋。今也每食不飽。于嗟呼。不承權輿。

子之湯兮。宛丘之上兮。洵有情兮。而無望兮。

能はざるをいふ

○我に於て、食ふ毎に四簋あり。今や食ふ毎に飽かす。于嗟呼、權輿を承がす。

● 飯を盛る器也、黍稷稻粱の四種をいふ簋の總なる也

秦國十篇二十七章

陳一之十二

陳は國の名、禹貢豫州の東に在り

宛丘

是れ陳の幽公の淫亂成なきを刺れる詩也

子の湯たる、宛丘の上に。洵に情あり、而も望なし。

● 湯と同じ遊蕩の意、うかれあそぶこと也 ● 地名 ● 樂しむべき情調あるをいふ ● 成儀の望むべきものなきをいふ

坎其擊鼓。宛丘之下。無冬無夏。值其鷺羽。

坎其擊缶。宛丘之道。無冬無夏。值其鷺翮。

東門之枌。宛丘之子。嬖嬖其下。

穀且于差。南方之原。不積。

○坎として其れ鼓を撃つ、宛丘の下に。冬と無く夏と無く、其鷺羽を値つ。  
● 鼓を打つ聲 ● 鷺(さぎ)の頭上に長き毛十數枚あり其羽を以てかざしと稱し舞ふもの之を持ちて所處す也  
○坎として其れ缶を撃つ、宛丘の道に。冬と無く夏と無く、其鷺翮を値つ。  
● 音樂の拍子にうつ物也 ● 赤羽の翮(かざし)也

東門之枌

是れ陳の風俗亂れて男女聚會以て相樂しむことを賦したるもの也

東門の枌、宛丘の櫛。子仲の子、其下に嬖嬖す。

● 城の東門を指す ● 白楡也、和名にれと訓ず ● 桴也和名とち又くぬぎと訓ず ● 陳の大夫子仲の女を指す ● 舞上貌

○穀且于に差ふ、南方の原。其麻を積まず、市に嬖嬖す。

其麻。市也。嬖嬖。穀且于逝。越以隱邁。視爾如蔽。貽我握椒。

衡門之下。可以棲遲。泌之洋洋。可以樂飢。

豈其食魚。必取河之魴。豈其取妻。必齊之姜。

衡門

是れ隱居して自ら樂しみ求むること無き者の詞なり。或は云ふ、是れ陳の僖公を誘掖せんとして之を作れる也と

衡門の下、以て棲遲す可し。泌の洋洋たる、以て飢を樂む可し。

● 衡は橋也、木を横へて門とすること、かぶき門を指す ● 遊息の意、あそびやすらふこと ● 泉水のこと ● 水流る、貌 ● 樂しんで飢をしのごをいふ

○豈に其の魚を食ふに、必ずしも河の魴のみならんや。豈に其の妻を取らんに、必ずしも齊の姜のみならんや。

● 河に産する魴魚(をどごこ)をいふ ● 姜は齊の婦、齊國の姜心は其品貴し



豈其食魚。必河之鯉。豈其取妻。必宋之子。

○豈に其の魚を食ふに、必ずしも河の鯉のみならんや。豈に其の妻を取るに、必ずしも宋の子のみならんや。

● 子は宋の姪、猶好の夢といふが如し

東門之池

是れ男女會遊の詞なり。或は云ふ、陳君の淫昏を諷みて賢女以て君子に配せんことを思ひて作れる者也と

東門の池、以て麻を漚すべし。彼の美しき淑姫、與に晤歌すべし。

● 水につけまくこと ● 淑は善也、賢女を指す ● 晤は解也、うちとけて歌ふをいふ

○東門の池、以て紵を漚すべし。彼の美しき淑姫、與に晤語すべし。

● 和名からむしと訓ず、まをの事也

○東門の池、以て菅を漚すべし。彼の美しき淑姫、與に晤言すべし。

東門之池。可漚麻。彼淑姫。可與晤歌。東門之池。可漚紵。彼淑姫。可與晤語。東門之池。可漚菅。彼淑姫。可與晤言。

● 和名ナゲと訓ず、茅の類也

東門之楊

是れ亦男女期會の詞なり

東門の楊、其葉群群たり。昏以て期と爲す、明星煌煌たり。

● 盛なる貌 ● 夕を指す ● 會合の約束をいふ ● 所謂昏明にして今の金星をいふ即ち昏の明星夜明の明星、こゝは後者を指す也 ● 大に明なる貌

○東門の楊、其葉群群たり。昏以て期と爲す、明星暫暫たり。

● 群群と同じく盛なる貌 ● 煌煌と同じく大に明なる貌

墓門

是れ陳死が太子冤を弑して國を奪ひしを刺れる詩也

墓門に棘あり、斧以て之を斲く。夫や良からず、國人之を知る。知れども已め

淑姫。可與晤言。東門之楊。其葉群群。昏以爲期。明星煌煌。東門之楊。其葉群群。昏以爲期。明星煌煌。墓門有棘。斧

以斯之。夫也。不良。國人知之。知而不已。誰昔然矣。

墓門有梅。有鴉萃止。夫也不良。歌以訊之。訊予不顧。顛倒思予。

防有鵲巢。中有旨苕。誰謂予美。心焉惕切。

誰昔よりして然り。

● 墓に入る道の門也 ● 此人を指す ● 國人之を知るに、かゝはらず之を改めざるをいふ ● 曠昔といふが如し一朝一夕の事に非ざるをいふ

○墓門に梅あり、鴉あり萃まれり。夫や良からず、歌うて以て之を訊ぐ。訊ぐれども予を顧みず、顛倒して予を思ふ。

● 顛倒の思也或はゆえと訓じ或はよくるふと訓じ ● 其思を歌に上みて之を告ぐるをいふ ● 顛倒の状をいふ

防有鵲巢

是れ男女の私ありて之を聞するを憂ふる者の詞なり。或は云ふ、陳の宣公が嬖を備ずるを憂へて之を作れる者也

○防に鵲巢あり、中に旨苕あり、誰か予が美を備かす、心焉に惕切たり。

● 隄防即ちつゝみを指す ● かさゞのすをいふ ● 丘陵即ちをかを指す ● 旨は草の名、和名とんどうと訓ず或はいふ小黒豆なりと、旨は美也其味のうまきをいふ ● 個人即ち愛人を指す ● だましよはすこと憂ふる也

中唐有鸞。中有旨鸛。誰謂予美。心焉惕切。

月出皎兮。佼人僚兮。舒綯糾兮。勞心惓兮。

月出皓兮。佼人憫兮。舒綯受兮。勞心擻兮。月出照兮。佼人僚兮。舒綯受兮。勞心擻兮。

○中唐に鸞あり、中に旨鸛あり。誰か予が美を備かす、心焉に惕切たり。

● 中唐の中庭の階より門までの道を指す ● しきがはら也 ● 草の名、五色備はりて綯の如しといふ ● 切切と同じ心にもそれて憂ふる様をいふ

月出

是れ男女相悦んで相念ふの詞なり。或は云ふ、是れ當時の在位者が嬖を好まざりて色を好むを刺れる者なりと

○月出でて皎たり、佼人僚たり。舒綯を糾べんとして、勞心惓たり。

● 月の光也 ● 美人を指す ● かはよき貌 ● 舒は思ひ深くきはまりなき義にして糾は纏のむすばれ解けやちぬ義也 ● ゆるむること ● 心を苦しめてしはくとなるをいふ

○月出でて皎たり、佼人憫たり。舒綯を受べんとして、勞心擻たり。

● 月の白くさゆること ● かはよき貌 ● 憂ひ思ふこと ● 憂ふる様也

人燎兮舒天  
紹兮勞心慘  
兮。

胡爲乎株林  
從夏南。匪適  
株林。從夏南。

駕我乘馬。說  
于株野。乘我  
乘駒。朝食于  
株。

● 明なる説いさぎよき意 ● 痛くむすばるゝ意 ● 憂ふること ● もと體に作る、今集傳の説に従つて改め譯す

株林

是れ靈公が夏微舒の母に淫し、朝夕休息せざるを刺れる詩也

株林に胡爲れぞ、夏南に従ふ。株林に適くに匪ず、夏南に従ふ。

● 邑の名 ● 何すれぞ株林にゆくやの意 ● 夏微舒の事其字を子南といふ、夏南といはざるは所謂詩人史厚の旨也、此詩前半は問にして後半は答なり

○我乘馬に駕して、株野に説る。我乘駒に乗つて、朝に株に食む。

● 株林の野外を指す ● 夕に宿るをいふ ● 馬の六尺以下なるを駒といふ

澤陂

是れ亦當時の淫風を諷したる者也

彼澤之陂。有蒲與荷。有美一人。傷如之何。寤寐無爲。涕泗滂沱。

彼澤之陂。有蒲與荷。有美一人。碩大且卷。寤寐無爲。中心悄悄。

彼澤之陂。有蒲與荷。有美一人。碩大且儼。寤寐無爲。輾轉伏枕。

彼澤の陂に、蒲と荷と有り。美なる一人あり、傷むとも之を如何にせん。寤寐爲すことなく、涕泗滂沱たり。

● 土手の事 ● 水草和名がまど訓ず ● 荷は蓮と同じくはちす也 ● いたくしく之を思ふこと ● 他にせんすまなきをいふ ● なみだ也 ● 雨の大に降る貌、涙の多きことをかたどりいへる也

○彼澤の陂に、蒲と荷とあり。美なる一人あり、碩大にして且つ卷たり。寤寐爲すこと無く、中心悄悄たり。

● 蘭也和名よぢばかまど訓ず ● 形のたちのびて大なるをいふ ● 髪のうるはしきこと ● 心にうれへて安からぬ様をいふ

○彼澤の陂に、蒲と荷とあり。美なる一人あり、碩大にして且つ儼なり。寤寐爲すこと無く、輾轉して枕に伏す。

● 蓮花也、一説に蓮のつぼみなりといふ ● つしめる貌 ● よしこるび返りをうつこと

陳國十篇二十六章

檜一之十三

國の名、揚州に屬す、周襄へて後には鄭に合す、こゝに收むる所の詩多くは鄭風也

羔裘

是れ繪若が好みて衣服を潔くし、消通遊宴のみを事とするを憂へて作れる詩也

羔裘逍遙し、狐裘以て朝す。豈に爾を思はざらんや、勞心切切たり。

○ひつじのかはごるもの事諸侯の朝服也 ○出て遊ぶこと ○きつねのかはごるもの事天子に朝する服也 ○君主を指す ○憂ふる貌

○羔裘翱翔し、狐裘堂に在り。豈に爾を思はざらんや、我心憂傷す。

○逍遙といふが如し ○堂上にいますこと

○羔裘膏の如く、日出でて曜たるあり。豈に爾を思はざらんや、中心是れ悼

ひ。

羔裘逍遙。狐裘以朝。豈不爾思。勞心切切。  
羔裘翱翔。狐裘在堂。豈不爾思。我心憂傷。  
羔裘如膏。日出有曜。豈不爾思。中心是悼。

悼。

素冠

○日之を照して光あるをいふ

是れ三年の喪を行ふこと能はざるを刺りて作れる者也

○素冠を見ん。棘人樂樂たり。勞心博博たり。

○棘人、たて黒く、ぬき白き布にてつくり之に白きへりをつけたるものにして、三年の喪喪由冠する所也 ○心にあわたしく、やすらかならぬ様を棘といふ、喪に居る孝子の状態をさしていふ也 ○やせがれたる貌 ○憂へ苦しむ貌

○庶くは素衣を見ん、我心傷悲す。聊く子と同じく歸らん。

○白き麻布の喪服をいふ ○孝子の體あるを敬慕し其人と同じく其家に居らんと也、或は歸を同じうすと讀み心のちもわく所を一つにせんと説けり

○庶くは素釋を見ん、我心蘊結す。聊く子と一の如けん。

○白きなめしがはにて作れるひざあひをいふ ○思の心中にむすばれて解けざること ○一様の態度たら

庶見素冠兮。棘人樂樂兮。勞心博博兮。  
庶見素衣兮。我心傷悲兮。聊與子同歸兮。  
庶見素釋兮。我心蘊結兮。聊與子如一兮。

國風 檜 羔裘 素冠 隔有哀楚

んことを願ふ意

隰有萋楚

是れ政の頽しく賦の頽く其苦に堪へざるを歎きて詠じたる詩也。或は云ふ、是れ周君の放逐を嘆みて作れる詩也と

隰に萋楚あり、猗儺たる其枝。天の沃沃たる、子の知ることなきを樂む。

隰有萋楚。猗儺其枝。天之沃沃。樂子之無一知。

● 隰七の事。和名詳ならず、一名羊桃、羊桃は夾竹桃のことなりといふ人あり。● 柔にすなはなる貌。● 年少くしてかほだちよきもの指していふ。● つや／＼しく光る様をいふ。● 萋楚其花を指す。● 憂なき様をいふ。

○ 隰に萋楚あり、猗儺たる其華。天の沃沃たる、子の家なきことを樂む。

● 何の累なき様をいふ

○ 隰に萋楚あり、猗儺たる其實。天の沃沃たる、子の室なきことを樂む。

隰有萋楚。猗儺其華。天之沃沃。樂子之無一室。

匪風

是れ周道の衰微を憂嘆せる詩也

風の發たるに匪ず、車の偻たるに匪ず。周道を顧瞻して、中心怛たり。

匪風發。兮。匪車偻。兮。顧瞻周道。中心怛兮。

○ 風の飄たるに匪ず、車の嘒たるに匪ず。周道を顧瞻して、中心弔たり。

● 吹き舞はすこと。● ゆりうごちて安からざる貌。● あはれみ、いたむをいふ

○ 誰か能く魚を享ん、之が釜鬻を漑かん。誰か將に西歸せんとす。之を懷じ好音せん。

誰能享魚。漑之釜鬻。誰將西歸。懷之好音。

● 鬻も亦釜の屬也、我れその釜をもちひそむがんの意。● 周に歸ること。● 我之をなぐさめやすんずるに好き音づれを以てせんの意

檜風四篇十二章

曹一之十四

國の名、禹貢の兗州にあり

蜉蝣

是れ昭公の奢侈を好むを刺れる者也

蜉蝣の羽ある、衣裳楚楚たり。心の憂あり、我に於いて歸り處れ。

● 蟲の名、ひをむしと訓ず ● 色のおざやかなる貌 ● 來りて居よといふ訓也

○蜉蝣の翼ある、采采たる衣服あり。心の憂あり、我に於いて歸り息へ。

● いるどりのうつくしきをいふ

○蜉蝣の闇闕する、麻衣雪の如し。心の憂あり、我に於いて歸り説れ。

● もぬけて出づること、其の始めて生ずるをいふ

蜉蝣之羽。衣裳楚楚。心之憂矣。於我歸處。  
蜉蝣之翼。采采衣服。心之憂矣。於我歸息。  
蜉蝣闇闕。麻衣如雪。心之憂矣。於我歸説。

候人

是れ共公の君子を避けて小人を近づくるを刺れる詩也

彼の候人、戈と殺とを何ふ。彼其之子、三百赤芾す。

● 道路に往來して賓客を接迎する官人を指す ● はこ也 ● 受也、はこの類也 ● 擲也 ● 小人を指す ● 芾は印綬也、祭服の時にかざり帯といふ

○維れ鷓梁に在り、其翼を濡さず。彼其之子其服に稱はず。

● 水鳥和名うと訓ず ● 釣合はざるをいふ

○維れ鷓梁に在り、其味を濡さず。彼其之子、其媾を遂げず。

● 其君に厚く忠を盡すことの久しからざるをいふ、一説には君の恩寵をうくるにかなはざるをいふ

○蒼たり蔚たり、南山朝隲す。婉たり變たり、季女斯に飢う。

● 草木深淵茂れるをいふ ● 同上 ● 雲氣の朝に立ちのぼるをいふ ● わかき説 ● かはよき説 ●

彼候人兮。何才與殺。彼其之子。三百赤芾。  
維鷓在梁。不濡其翼。彼其之子。不稱其服。  
維鷓在梁。不濡其味。彼其之子。不遂其媾。  
蒼兮蔚兮。南山朝隲。婉兮變兮。季女斯

飢。

少なと同じ ① 容易に人に従はざるを以て反つて飢饉に苦しむをいふ

鳩 鳩

是れ在位者の心を用ふる均平尊一なるを表したるもの也。或は云ふ、在位に君子なく其用心の一ならざるを刺れる者也と

鳴鳩在桑。其子七兮。淑人君子。其儀一兮。其儀一兮。如結兮。

○ 鳴鳩桑に在り、其子七つ。淑人君子、其儀一つ。其儀一つなれば、心結ぶが如し。

① 或は布穀ともいふ、きじばとの事也 ② 布穀の子を養ふや朝には上より下り、夕には下より上り、平均一如くならを以て在位の人平均ならざるを反興する也 ③ 善人と同じ ④ 威儀動作を指す ⑤ 其亂れざるをいふ

○ 鳩桑に在り、其子梅に在り。淑人君子、其帯は伊れ絲。其帶伊れ絲なれば、其弁伊れ駢。

⑥ 大帯を指す、絲は素絲をいふ ⑦ 皮弁の冠を指す ⑧ 馬の青黒色なるをいふ、其皮弁の色に借用す

鳴鳩在桑。其子在棘。淑人君子。其儀不忒。其儀不忒。正是四國。

○ 鳴鳩桑に在り、其子棘に在り。淑人君子、其儀忒はず。其儀忒はざれば、是の四國を正しうす。

① 其常度ありて亂れざるをいふ ② 四方の國をいふ

○ 鳩桑に在り、其子梅に在り。淑人君子、是の國人を正しうす。是の國人を正しうせば、胡ぞ萬年ならざらん。

③ 四國の人民を指す ④ 萬年の壽福を享有し得べきをいふ

下泉

是れ王室陵夷して小國困弊するを諷するもの也

冽彼下泉。浸彼苞稂。憯我寤嘆。念彼周京。

冽たる彼の下泉、彼の苞稂を浸す。憯として我寤めて嘆き、彼の周京を念ふ。

① 冷かなる義也 ② ながれ下るしみづをいふ ③ 苞はむらがり生ずる義也、稂は童蒙、又は根莖草と稱す類の中に雜生する莠(びぐさ)の類也 ④ いさどはりてなげく憂也 ⑤ 周の天子のみまことを指す





遲遲采芣芣。女心傷悲。殆及公子同歸。

七月流火。八月萑葦。蠶月條桑。取彼斧斨。以伐遠揚。猗彼女桑。七月鳴鴈。八月載績。載玄載黃。我朱孔陽。爲公子裳。

四月秀葽。五月鳴蜩。八月其穫。十月隕箚。一之日于貉。取彼狐狸。爲公子裘。

しきかごをいふ ① 細道のこと ② 桑のわか葉をいふ ③ 日の長きをいふ ④ 白晝也上もぎと訓ず、之を煮て其汁をそいげは蠶早く生ずといふ ⑤ 衆多なる貌、人の多きをいふ ⑥ 幽公の子を指す

○七月流火あり、八月萑葦あり。蠶月桑を條し、彼の斧斨を取つて、以て遠揚を伐る。彼の女桑を猗す。七月鳴鴈あり、八月載めて績む。載ち玄く載ち黄にし、我朱孔だ陽に、公子の裳と爲す。

● あしの事、葽は小、葦は大の差別あり、之を刈り取りて桑年の蠶事に備ふる也 ① 蠶を飼ふ月 ② 枝ながち桑をきりて其葉をとること ③ をのをいふ、分ちていへば斧はまさり也斨はよき也 ④ 遅く伸びたる枝と高くさし上れる枝とをいふ ⑤ 子桑を指す ⑥ 枝を存して葉のみをとるをいふ ⑦ 今の百舌(もず)也 ⑧ 其麻絲を織むること ⑨ 我が染め出せし赤色の殊にあざやかにうつくしきをいふ

○四月秀葽あり、五月鳴蜩あり。八月其れ穫し、十月隕箚す。一の日子いて貉し、彼の狐狸を取つて、公子の裘と爲す。二の日其れ同じうして、載ち武功を績ぐ。言に其糞を私し、駢を公に獻る。

● 秀とは花さかざしてみのるをいふ、葽は草の名、一に小草と名づく、其根は人糞に用ふる遺滓也 ① 蠶の糞名 ② 早稲を刈るをいふ ③ 草木の葉の落つるをいふ ④ 十一月を指す ⑤ 狐狸を獲るをいふ ⑥ 十二月を指す ⑦ 共に田獵を爲すこと ⑧ 武事を練習すること ⑨ 小家を指す ⑩ 大家を指す

○五月斯螽動股。六月莎雞振羽。七月在野。八月在宇。九月在戶。十月蟋蟀入我牀下。穹窒熏鼠。塞向墜戶。嗟我婦子。曰爲改歲。入此室處。

● 蟲の名きりんとすと訓ず ① 鳴く時の状也 ② 蟋蟀と同じ、こほるぎと訓ず ③ 亦鳴く時の状也 ④ 家の軒なり ⑤ 戸内をいふ ⑥ ねだいの下をいふ ⑦ 家屋の間隙を塞ぐこと ⑧ 北のまど也 ⑨ ぬり塞ぐこと ⑩ 歲將に改まらんとして寒氣いよく強くなるべければ此の室に入りて居れと、我婦子に命ずる也

○六月鬱と蓂とを食ひ、七月葵と葍とを亨る。八月棗を剝ち、十月稻を穫ら。此の春酒を爲つて、以て眉壽を介く。七月瓜を食ひ、八月壺を斷つ。九月苴を叔ひ、茶を采り樗を薪にし、我農夫を食ふ。

之日其同。載績武功。言私其穢。獻于公。

五月斯螽動股。六月莎雞振羽。七月在野。八月在宇。九月在戶。十月蟋蟀入我牀下。穹窒熏鼠。塞向墜戶。嗟我婦子。曰爲改歲。入此室處。六月食鬱及蓂。七月亨葵及葍。八月剝棗。十月穫稻。爲此春酒。以

介眉壽。七月食瓜。八月斷壺。九月叔苴。采荼薪芣。食我農夫。

九月築場圃。十月納禾稼。黍稷重穋。禾麻藜麥。嗟我農夫。我稼既同。上入執事。功。晝爾于茅。宵爾索綯。亟其乘屋。其始播百穀。

二之日鑿冰。沖三之日納于凌陰。四之日其蚤。獻羔祭韭。九月肅

● 邵季也。和名。ハと訓ず。● 葡萄の小さき者。和。エビと訓ず。● あふひと訓ず。● 豆類をいふ。● なつめと訓ず。割つとは之を打ち落す也。● 老人を助け養ふこと。● 氣也。かんべうの事をいふ。斷つとは其莖よりとるをいふ。● 麻の實を拾ふこと。● 比が菜の事。● 薪材和名。ゆるすと訓ず。● 耕作に従事する者。若をいふ。

○九月場圃を築き、十月禾稼を納る。黍稷重穋、禾麻藜麥をさへに。嗟我農夫、我稼既に同まる。上入して宮功を執れ。晝は爾于いて茅かれ、宵は爾綯を索へ。亟かに其れ屋に乗れ、其れ始めて百穀を播け。

● 禾をこみなす。庭を揚といひはたけを圃といふ。● 凡て穀物の莖葉共に刈するを禾と爲し、禾の實りて野に在るを稷といふ。● 穀の晚く熟する者を重と爲す。即ち晚稻也。穀の早く熟する者を穋と爲す。即ち早稻也。● 野よりして宮に入るをいふ。● 家屋葺治の事を指す。● 葺治の準備也。● 同。● 田中の屋根の破損を修むるをいふ。

○二の日氷を鑿つこと沖沖、三の日凌陰に納る。四の日其れ蚤に、羔を獻じ非を祭る。九月肅霜あり、十月場を稼ふ。朋酒斯に饗す。曰。羔羊を殺し、彼の公堂に躋り、彼の兕觥を稱ぐ、萬壽無疆なし。

霜十月。滌場。朋酒斯饗。曰。殺羔羊。躋彼公堂。稱彼兕觥。萬壽無疆。

鳴鳴鳴。鳴。既取我子。無毀我室。恩斯勤斯。鬻子之閔斯。

迨天之未陰雨。徹彼桑土。綯之纏。靡戶。今

鳴 鳴

是れ周公が成王の爲めに作りし詩也

鳴鳴鳴。鳴。既に我子を取る、我室を毀ぶること無かれ。斯を思し斯を勤して、子を鬻うて之れ斯を閔め。

● ふくろよの類。鬻也。● 我室を指す。● 鬻愛を加ふること。● 手高く之を勞はること。● 稚子を養育すること。

○天の未だ陰雨せざるに迨んで、彼の桑土を徹りて、靡戸を綯纏す。今女下民、敢へて予を侮ること或らんや。

女下民。或敢侮予。

予手拮据。予所掇荼。予所蓋租。予口卒瘁。曰予未有室家。

予羽譙譙。予尾翯翯。予室翹翹。風雨漂搖。予維音哓哓。

● 榮の根也 ● 剥ぎとること ● 巢の氣を通ずるところを窟をいひ、其の出入するところを戸といふ ● 手を入れてとりつくちふこと ● 是れふくぢふが巢下に居る人を指していへるなり ● たれが敢へて予(鳥自身)をあなどるものあらんや、此詩皆比喩也

○予が手拮据す。予が掇る所の茶は、予が蓄積する所なり。予が口卒く瘁みぬ。曰く、予未だ室家あらずと。

● 手と口と共に働くこと ● 茶の穂也 ● 積み集むること ● 勞苦の結果をいふ ● 王家の新に造られて未だ集らざるをいふ

○予が羽譙譙たり、予が尾翯翯たり。予が室翹翹たり。風雨に漂搖せられ、予維れ音哓哓たり。

● そがる、こと ● 破る、こと ● 危きこと ● ゆりうごかざる、こと ● 哀鳴の態なるをいふ

東山

是れ周公東征より歸り、軍士を勞せん爲に作れる詩也

我徂東山。惓惓不歸。我來自東。零雨其濛。我東曰歸。我心西悲。制彼裳衣。勿士行枚。蜩蟴在桑野。敦彼獨宿。亦在車下。我徂東山。惓惓不歸。我來自東。零雨其濛。果臝之實。亦施于宇。伊威在室。蠨蛸在戶。町疃鹿場。熠燿宵行。不可畏也。伊可懷也。

○我、東山に徂き、惓惓として歸らず。我、東より來る、零雨其れ濛たり。我東より歸らんと曰ふ、我心西に悲む。彼の裳衣を制して、行枚を士とすること勿し。蜩蟴たる者は桑野に在り。敦たる彼の獨宿も、亦車下に在り。

● 久しき貌 ● 降雨と同じ ● 雨ふる貌 ● 心、西にとんで悲しく思ふこと ● 兵服を指す、或は云ふ平居の服なりと ● 陣中枚を銜むことを爲さざりきと也 ● 動く貌 ● いもむし也 ● 發語の辭としてそれとよむ者あり、或は副詞として久しくとよむ者あり ● 獨り處りて移らざる貌

○我、東山に徂き、惓惓として歸らず。我、東より來る、零雨其れ濛たり。果臝の實、亦宇に施へり。伊威室に在り、蠨蛸戸に在り。町疃鹿場となり、熠燿たる宵行あるも、畏る可からず、伊れ懷ふ可し。

● 蜩蟴と同じ、和名からすうりと訓ず ● のきの下をいふ ● 一名鼠婦和名とこむしと訓ず ● 一名蠨蛸和名あしだかぐもと訓ず ● 家のわきの空地を指す ● 鹿の遊び場をいふ ● 光の明滅するさまをいふ ● 蟲の名俗の所謂みづはたる也或は一に熠燿宵行くと讀み螢火の夜になりて飛び行く意に解するものあり ● かつかしく思ふべきをいふ

我徂東山。惓惓不歸。我來自東。零雨其濛。鸛鳴于垤。婦嘆于室。洒掃穹窒。我征聿至。有敦瓜苦。烝在栗薪。自我不見。于今三年。

○我、東山に徂き、惓惓として歸らず。我、東より來る、零雨其れ濛たり。鸛垤に鳴く、婦、室に嘆く。洒掃穹窒し、我征して聿に至らん。敦たる瓜の苦きあり、烝、栗薪に在り。我が見ざりしより、今に三年なり。

● 大鳥の一種なり和名おほとりと訓ず ● 鸛家也 ● 水を打ちて掃き清むること ● 鼠の出口をよさぐこと ● 我が征行の夫今や至らんと待ち望む意 ● 瓜の種の苦きを以て心の苦しみに喩ふ ● 薪材なる栗の木にかかりををいふ

○我、東山に徂き、惓惓として歸らず。我、東より來る、零雨其れ濛たり。倉庚自東。零雨其濛。倉庚于飛。燿燿其羽。之子于歸。皇駸其馬。親結其縞。九十其儀。其新孔嘉。其舊如之何。

○我、東山に徂き、惓惓として歸らず。我、東より來る、零雨其れ濛たり。倉庚自東。零雨其濛。倉庚于飛。燿燿其羽あり。之子于に歸く、皇駸たる其馬あり、親ら其縞を結び、其儀を九十にす。其新なる孔だ嘉く、其舊き之を如何ん。

破 斧

是れ軍の士、周公が已等を勞するの意に答へんとて作れる詩也

既破我斧。又缺我斨。周公東征。四國是皇。哀我人斯。亦孔之將。

● 多年戰爭の結果、兵器の毀損するをいふ ● 同上 ● 四方の國を指す ● 君の罪をせめ民の怨を正すをいふ ● 是れ周公が人民を哀憐する心の至大なるをいへる也

○既に我斧を破り、又我斨を缺く。周公東征し、四國是れ皇す。我が人を哀む、亦孔だ嘉し。

● 鑿(のみ)の屬をいふ ● 善く化するをいふ

○既に我斧を破り、又我斨を缺く。周公東征し、四國是れ適し。我が人を哀む、亦孔だ休し。

既破我斧。又缺我斨。周公東征。四國是皇。哀我人斯。亦孔之將。